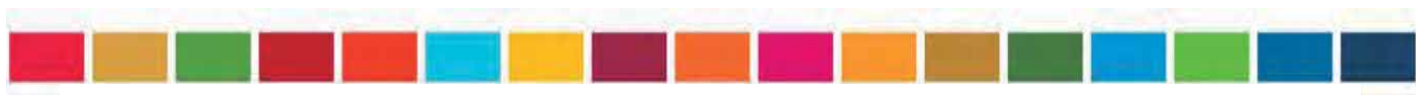


2024 年度 東洋大学 SDGs 実践講座 活動報告



2024 年度「SDGs 実践講座～17 ゴールへの第一歩～」活動報告

- I. はじめに
- II. 運営委員
- III. 運営委員会の開催
- IV. 広告宣伝
- V. 募集
- VI. 受講者数一覧
- VII. 「総合」履修者数
- VIII. 予算執行報告
- IX. 骨子およびプログラム
- X. 講義プログラム
- XI. 講義要旨
- XII. 受講前・受講後アンケート結果
- XIII. 最終レポート(ホームページに掲載)

「SDGs 実践講座」は、2022 年度より 4 年目の開講として、全 15 回の講義を教員および外部講師に担当いただき、対面・オンライン講義として実施をした。今年度の授業は従前までの事前申込制から、一般の履修登録に変更し、より多くの履修者が受講できるように手配をした。

以下、今年度の活動報告を行う。

I. はじめに

全学総合講義「SDGs 実践講座 –17 ゴールへの第一歩–」をふり返って

代表担当者：東洋大学副学長/生命科学部 川口 英夫

SDGs (Sustainable Development Goals) は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。この SDGs は発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサルなものであり、皆が日々行っている諸活動の中で SDGs に取り組むことが求められています。さらに、2020 年に「行動の 10 年」がスタートしたという宣言がありました。2015 年に公表された目標に対し 5 年間の予備期間を経て、2020 年から 10 年間をかけて目標を実現しようという、次のフェーズに移ったことが宣言されたということです。

これらの状況を鑑み、本学でも今年度から全学部を対象とした講義「SDGs 実践講座 –17 ゴールへの第一歩–」を立ち上げました。本講義の目的は下記の 3 つです。

- ①SDGs に関し、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶ。
- ②この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に变化させて行く」。
- ③在学中あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長する。

これらの目標に対し、受講生の講義の最終発表や最終レポートから、「行動の10年」に相応しい、SDGsをベースとした「行動変容を伴う学び」がある程度実現できたと考えています。

学祖井上円了先生の言葉である、本学の建学の精神は「諸学の基礎は哲学にあり」ですが、これに「他者のために自己を磨く」「活動の中で奮闘する」という言葉を纏めると、「深く考え、実行する」ということになります。この井上円了哲学の実践版として本講義を実施したわけですが、全受講生が将来、「深く考え、実行する」人材として、国内外で大いに活躍してくれるものと確信しています。

II.運営委員

教学担当常務理事	金子 光一
学長	矢口 悦子
教務部長(副学長)	多田 英明(法学部教授)
社会貢献センター長	高山 直樹(福祉社会デザイン学部教授)
講座運営担当責任者	川口 英夫(生命科学部教授)
講座運営担当者	小瀬 博之(総合情報学部教授)
講座運営担当者	村上 一基(社会学部准教授)
講座運営担当者	堀本 麻由子(文学部准教授)

III.運営委員会の開催

実施なし

IV.広告宣伝

学内掲示、ホームページ(ボランティア支援室)、本学公式アプリ、ToyoNet-G、ToyoNet-Ace による配信等で広報活動を行なった。

V.募集

申込期間 : 各キャンパス履修登録期間に準ずる。
履修者総数: 87 名
履修取消期間後: 74 名(確定)
授業開始: 9/20(金)5 時限 A301 教室(10 号館 3 階)

VI.受講者数一覧

単位:人数

履修者数	74
------	----

● 受講者数(学部・学年別)

単位:人数

学部/学年	1 年	2 年	3 年	4 年	合計
文学部 1 部	1				1
文学部 2 部	2	2	1		5
経済学部 1 部			2		2
経済学部 2 部	2	1			3
経営学部第 1 部			1		1
経営学部第 2 部	3	1	1		5
法学部第 1 部	3			1	4
法学部第 2 部	4				4
社会部第 1 部	1			1	2
社会部第 2 部		1	1		2
国際学部	5	4	2		11
福祉社会デザイン学部		3			3
情報連携学部		7	4	5	16
理工学部	3	1	4	2	10
総合情報学部		1	1	1	3
生命科学部				1	1
ライフデザイン学部			1		1
合計	24	21	18	11	74

VII.「総合」履修者数

1、履修登録者数

「総合ⅢB / 全学総合 J」 40 名 (白山キャンパス)

「総合ⅨB / 全学総合ⅡB/ 全学総合 J」 20名 (赤羽台キャンパス)

「総合 B / 全学総合 F」 13 名 (川越キャンパス)

「総合Ⅳ / 全学総合 J」 1 名 (朝霞キャンパス)

2、単位修得者数

47 名 (63%)

出席不良者、グループ発表欠席者、最終レポート未提出者が目立った。

VIII. 予算執行報告

支出

予算目的	予算件名	予算額	執行額	残額
授業・講座等運営	SDGs 実践講座	230,000 円	141,226 円	88,774 円

IX. 骨子およびプログラム

2024 年度 SDGs 実践講座「17 ゴールへの第一歩」の骨子(シラバス)

1. 講座の目的・内容

「SDGs(Sustainable Developmental Goals)」とは、2015 年 9 月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でより良い世界を目指す、17 項からなる国際目標である。本講義の目的は、この SDGs について、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶことである。さらに、この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に变化させて行く」ことで、在学中、あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長することを目指す。

なお、本講義受講期間中に SDGs に繋がる活動をスタートしていただく。社会貢献センター(ボランティア支援室)等で実施する活動、若しくは自身での活動を通じて、本講義の学びを「自分ごと」にする。これらの活動を踏まえ、グループでの最終発表および各自の最終レポートをまとめる。

また、本講座終了後、受講者には東洋大学 SDGs アンバサダーへの登録を推奨します。

2. 本講座の名称

本講座は「SDGs 実践講座～17 ゴールへの第一歩～」を正式名称とする。

3. 本講座の募集人員、応募方法等

- 1) 募集人員：50 名程度
- 2) 対 象：本学の学部生
- 3) 授業期間：秋学期(9 月 20 日～1 月 24 日まで)
- 4) 応募方法：履修登録による。

4. 学修到達目標

受講生は、以下の力を涵養し獲得することが期待される

1. SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力
2. 「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力
3. 課題・問題を発見する力
4. 他者と関わりチームとして成果をあげる力

5. 講義スケジュール

- I. 1) 学長挨拶(矢口 悦子 学長)SDGs 実践講座運営担当挨拶(川口先生)
2) 「外国にルーツを持つ若者のキャリアをめぐる課題と当事者の経験」(村上先生、ラウフ アルーサ アアリーさん)
3) アイスブレイク(堀本 麻由子先生 法学部教授)
- II. ワークショップで考える SDGs「世界がもし 100 人の村だったら」から考える SDGs
(外部講師 NPO Dear)
- III. 世界と日本の子どもの貧困について考えよう(小野 道子 福祉社会デザイン学部准教授)
- IV. カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか？ (小瀬 博之 総合情報学部教授)
- V. 移民・難民と私たち：共生社会へのカギ (南野 奈津子 福祉社会デザイン学部教授)
- VI. 見える飢餓と見えない飢餓ー植物科学からの挑戦ー(廣津 直樹 生命科学部教授)
- VII. うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」する意味と意義(外部講師 JICA 高田 健二)
- VIII. 対話的な深い学びへのアプローチ(堀本 麻由子 文学部准教授)
- IX. 開発途上国の生活環境改善に向けて(北脇 秀敏 国際学部教授)
- X. 住み続ける社会のデザイン(水村 容子 福祉社会デザイン学部教授)
- XI. 水道水を考える(大塚 佳臣 総合情報学部教授)
- XII. 日本人の働き方は、これからどうなるのか(久米 功一 経済学部教授)
- XIII. Security 再考：ウクライナ戦争が動かした原子力発電回帰(市川 颯 国際学部教授)
- XIV. トランスジェンダーから見える世界と共生(外部講師 卒業生 勝又 栄政)
- XV. 最終グループ発表

上記プログラムを受講したまとめとして、グループ毎に受講生が、口頭および文書により発表する。

予め書面を作成し、当該書面に基づいて口頭報告をさせることで、プレゼンテーション能力の涵養を図る。口頭報告については、教員が講評を行い、さらに思考を深化させるように指導する。

6. 成果の公表について

授業の成果については、運営、プログラム内容、最終報告書などをまとめた活動報告書として公表する。

7. 授業科目としての提供

授業科目「総合」(半期 15 回 2 単位)として提供し、単位認定を行う。

8. 録画収録および ToyoNet-Ace の活用

講義については、録画収録して講義記録として保存する。また、ToyoNet-Ace を活用して、授業運営に関する管理を行う。

9. 講師謝礼

学内者:授業コマに含む 学外者:33,000 円(税込)
(NPO Dear については 44,000 円(税込)とする。)

X. 講義プログラム

2024年度 東洋大学SDGs講座

2024/9/10

秋学期 講義+ディス カッション	秋期(金5)	17のゴール (※4は共通)	授業 形式	内容詳細(例)	講師	所属・肩書き
第1回	9月20日	全体	ハイフレックス	(16:30～16:40) 学長挨拶、SDGs実践講座担当教員挨拶	矢口 悦子/川口 英夫	学長/社会貢献センター運営委員(SDGs担当・生命科学部)
				(16:40～17:40)「外国にルーツを持つ若者のキャリアをめぐる課題と当事者の経験」	村上一基/ラウフ アルーサ アアリー	社会学部/大学院教務課職員
				(17:40～18:00) アイスブレイク	堀本 麻由子	文学部
第2回	9月27日	全体	Web	「世界がもし100人の村だったら」から考えるSDGs(仮)	外部講師 NPO Dear	特定非営利活動法人 開発教育協会講師
第3回	10月4日	1・5・11	ハイフレックス	世界と日本の子どもの貧困について考えよう	小野 道子	福祉社会デザイン学部
第4回	10月11日	7・12・13・15	ハイフレックス	カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか?	小瀬 博之	総合情報学部
第5回	10月18日	3・10・16	ハイフレックス	移民・難民と私たち: 共生社会へのカギ	南野 奈津子	福祉社会デザイン学部
第6回	10月25日	2	ハイフレックス	見える飢餓と見えない飢餓—植物科学からの挑戦—	廣津 直樹	生命科学部
第7回	11月8日	17	ハイフレックス	うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」する意味と意義	外部講師(JICA高田健二)	外部講師
第8回	11月15日	4	ハイフレックス	対話的な深い学びへのアプローチ	堀本 麻由子	文学部
第9回	11月22日	3・6・11	ハイフレックス	開発途上国の生活環境改善に向けて	北脇 秀敏	国際学部
第10回	11月29日	11	ハイフレックス	住み続ける社会のデザイン	水村 容子	福祉社会デザイン学部
第11回	12月6日	3・6・12・14	ハイフレックス	水道水を考える	大塚 佳臣	総合情報学部
第12回	12月13日	8	ハイフレックス	日本人の働き方は、これからどうなるのか	久米 功一	経済学部
第13回	12月20日	16	ハイフレックス	Security再考: ウクライナ戦争が動かした原子力発電回帰	市川 顕	国際学部
第14回	1月10日	5	ハイフレックス	トランスジェンダーから見える世界と共生	外部講師(卒業生勝又栄政)	外部講師
第15回	1月24日	全体	ハイフレックス	最終グループ発表	運営担当	

*プログラム内容・授業形式については変更する場合があります。

1: 貧困をなくそう 2: 飢餓をゼロに 3: すべての人に健康と福祉を 4: 質の高い教育をみんなに 5: ジェンダー平等を実現しよう 6: 安全なトイレを世界中に 7: エネルギーをみんなにそしてクリーンに 8: 働きがいも経済成長も 9: 産業と技術確立の基礎を作ろう 10: 人や国の不平等をなくそう 11: 住み続けられるまちづくりを 12: つくる責任、つかう責任 13: 気候変動に具体的な対策を 14: 海の豊かさを守ろう 15: 陸の豊かさを守ろう 16: 平和と公正をすべての人に 17: パートナーシップで目標を達成しよう

SDGs17 目標よりテーマを設定し、講義を行った。毎回の講義では、グループを設定し、グループワークやディスカッションを重視し、意見を出し合いながらグループ毎の意見をまとめ、発表した。

XI. 講義要旨

SDGs 実践講座第1回 講義要旨

9月20日(金)

講師名: 川口 英夫(生命科学部教授)

テーマ: SDGs 推進センター長挨拶

SDGs 実践講座第2回 講義要旨

9月27日(金)

講師名: NPO 法人 Dear 八木 亜希子

テーマ: 「世界がもし 100 人の村だったら」から考える SDGs

インターネット上で、拡散することによって世に知られることとなった、「世界がもし 100 人の村だったら」は、世界をひとつの村にたとえ、人種、経済状態、政治体制、宗教などの差異に関する比率はそのままに、人口だけを 100 人に縮小して説明している。受講者には、気になった文章をグループ内で共有し、なぜその部分が気になったのか、どういう感情を抱いたのかを考え、グループごとに発表を行った。2030 年までに達成すべき開発目標として掲げられている「SDGs」。受講者はこの年に世界がどうなって欲しいか、あるいはどうなっていると思うかを話し合い、それまでに自分たちができることは何かについて考え、地球社会に住む自分たちのあり方、未来について考えるきっかけとなった。

SDGs 実践講座第3回 講義要旨

10月4日(金)

講師名: 小野 道子(文学部准教授)

テーマ: 世界と日本の子どもの貧困について考えよう

この講義では、SDGs 目標 1 の「貧困をなくそう」の内容やターゲット、絶対的貧困と相対的貧困の違いについて説明できるようになること、世界と日本の子どもの貧困の現状や対策について自分なりの考えを持つことができるようになることを目的とした。まずは「子どもの貧困」のイメージについて各自で考えてもらった。講義を聴くだけでなく、世界で極度の貧困状況にある子どもの数は減っているのか、日本のひとり親家庭の子どもの貧困率がなぜ高いのか、日本の子どもの貧困対策など、グループで話し合い発表した。子どもだけでなくおとなの貧困も自己責任ではないこと、災害などが起きれば誰でも脆弱層になり得るため、平時からのレジリエンス構築が大切であること、2030 年までにどのようにしたら子どもの貧困を減らせるのか考え続けてもらうことの重要性などを伝えた。

SDGs 実践講座第4回 講義要旨

10月11日(金)

講師名:小瀬 博之(総合情報学部教授)

テーマ:カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるか?

SDGs(持続可能な開発目標)のうち、主にSDG7(エネルギーアクセス),12(生産と消費),13(気候変動対策),15(陸域生態系保全)に関わる「カーボンニュートラル=脱炭素社会」をテーマに講義を行った。最初にresponを活用して受講者の関心を把握、共有しながら、SDGsを内包する「2030アジェンダ」の基本理念の説明、トレードオフになっている社会・環境・経済の問題を講義した。続いて、学生のグループワークを行うにあたって、カーボンニュートラルに向けた行動例として、環境省が提唱する「ゼロカーボンアクション30」や東洋大学での実践事例として「こもれびの森・里山支援隊」の活動、過去の「SDGs講座」の提案から実現に至った「東洋大学SPRINGウォーターサーバープロジェクト」などを紹介した。グループワークは、「カーボンニュートラル=脱炭素社会に向けて3万人の学生や大学組織で実施できることのアイディアを出し合ってまとめる」という課題を課し、11の各グループの発表によって、省エネルギー行動(エアコンOFF、消灯、階段使用など)、施設改善(断熱・ソーラーパネルの設置・植物を植えるなど)、資源消費削減と有効活用(給水所の増加とマイボトル持参、マイバッグ持参、食品ロス削減、紙使用削減、資源回収、古着売買、リサイクル商品の開発)、しくみづくり(アプリ活用、ポイント還元、ボランティア情報の共有、授業カリキュラムの改善)などのアイディアを情報共有できた。これらのアイディアは、後半のグループワークに生かされたものと考えられる。

SDGs 実践講座第5回 講義要旨

10月18日(金)

講師名:南野 奈津子(福祉社会デザイン学部教授)

テーマ:移民・難民と私たち:共生社会へのカギ

本講義では、SDGsの目標3、10、16をテーマとして、1)世界の難民の実情、2)移民・難民の経験を考えるワーク、3)難民受け入れに賛成・反対の立場でのディスカッションを行い、難民の理解と共生について学んだ。まず、世界における難民・移民の数や地域、人が移動をする/強いられる要因や背景をデータから確認した。次に、「自分の大切なもののほとんどを急に手放す」という経験を感じるための個人ワークを行い、その時に生じた感情を共有した。そして、共生のために私たちが現実的経験することとして、難民受け入れに賛成、反対の立場を割り当て、それぞれの立場の思いや主張を小グループで共有するワークを行った。最後に、「共生社会のカギとは何か」について話し合った。「自分の感情として経験出来て見方が変わった」「難民について知ること」「自分事としてとらえること」等が、今後大切なこととして、報告された。

SDGs 実践講座第 6 回 講義要旨

10 月 25 日(金)

講師名: 廣津 直樹(生命科学部教授)

テーマ: 見える飢餓と見えない飢餓—植物科学からの挑戦—

本講義では、SDGs の目標 2「飢餓をゼロに」をテーマに講義を行った。まず、世界の飢餓状況について説明し、このような食料問題の原因と解決策についてグループワークで意見を出し合った。社会的手段としては気候変動対策やフードロス対策、国際協力など、技術的手段としてはストレス耐性作物や栽培技術の改善など幅広い意見が出された。次に、ビタミン A や鉄、亜鉛などの栄養素の不足という目に見えない飢餓“hidden hunger”の状況と今後の予測について紹介し、“hidden hunger”の対策と予想される問題点についてグループワークで意見を出し合った。目に見えない栄養素について啓蒙教育が必要であることを確認した。様々な学部が学生が集まる本講義では、グループワークにより様々な視点の意見が出された点が特徴的であった。最後に、文理融合の必要性和教育を受けている者の責任について投げかけ、講義を総括した。

SDGs 実践講座第 7 回 講義要旨

11 月 8 日(金)

講師名: 高田健二 島根県立大学客員教授/海士町グローバル・フロンティア大使

テーマ: うまい棒から考える「パートナーシップで目標を達成」(SDGs 目標 17)

SDGs 目標 17 は、国家間の制度改善や資金調達といったターゲットを軸としており、大学生がそうした大規模な課題に取り組むためには、知識をつけるコンテンツ学習だけでは不十分であり、受講生たちの資質を鍛えるコンピテンシーを学ぶことが必要である。そのために必要となる考え方(6 次の隔たり、スチュエーション・リーダー、想像力、3 つのカン等)について講義前半で取り上げた。講義後半では、東洋大学卒業生が代表取締役社長をしている「やおきん」の代表商品である「うまい棒」から、「パートナーシップで目標を達成」することを「やおきん」の具体的な取り組みから説明し、講義前半のコンピテンシーで説明した項目が活かされている事例として伝えた。東洋大学生たちが大学卒業後の社会で活躍するためには、今回の講義で説明したコンピテンシーを磨き続けることが重要である。今後、うまい棒を食べる機会に、この授業内容を意識して自己研鑽してほしい。

SDGs 実践講座第 8 回 講義要旨

11 月 15 日(金)

講師名: 堀本 麻由子(文学部准教授)

テーマ: 「対話的な深い学びへのアプローチ」

本講義は、SDGs 17 ゴールに関し、「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力を育むこと、さらにこれまでの授業内容を振り返りつつ、対話的なディスカッションを通して、問題・課題(SDGs17 ゴール)への取り組み方を考えることをねらいとした。はじめに、「対話的なディスカッション」に関する講義を行い、その後グループ演習を実施した。各グループは 17

ゴールの内の関心の近い学生同士による4～5名程度の編成とした。各自の問題関心を深めるため、質問中心の話し合いによる自己紹介ワークなどを活用し、グループメンバーの互いを理解することで、共通関心を探る機会とした。今回は、SDGsアンバサダーの学生に、グループ演習のアドバイザーとして、グループ活動への助言をお願いした。そのことが、グループ活動の成果発表や講座終了後のアクションプランへのつながりを受講生がイメージするうえで非常に役立った。

SDGs 実践講座第 9 回 講義要旨

11 月 22 日(金)

講師名:北脇 秀敏(国際学部教授)

テーマ:開発途上国の生活環境改善に向けて

講義では、まず MDGsから SDGsへ世界的な開発目標が移り変わった過程を紹介した。先進国から途上国への国際協力が中心課題であった MDGsと比較し、「誰一人取り残されない」SDGsに変わり多くの人に受け入れられたことを述べた。次に途上国の生活環境を守る重要な要素として水供給、し尿・排水処理、廃棄物処理の 3 つの公共事業が途上国住民の健康に関係する要素であり、健康的な生活を送るためには、これらが破綻のない形で実施されていることが必要なことを述べた。講義において特に強調した点は、これらの不備があるとどのような健康上の問題点があるかという点に加え、途上国において生活環境を改善する上でどのような適正技術を導入すれば良いかという点にも考察を加えた。また東洋大学の卒業生が途上国の環境改善に青年海外協力隊員として活躍している様子も紹介し、聴講生がどのようにこうした活動に関われるかの議論も行った。

SDGs 実践講座第 10 回 講義要旨

11 月 29 日(金)

講師名:水村 容子(福祉社会デザイン学部教授)

テーマ:住み続ける社会のデザイン

講義では、SDGs 目標 5「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」の内容や達成度の測定方法、この目標の達成度がとりわけ低い日本の現状について確認したのち、雇用労働分野で男女共同参画のための PDCA サイクルを動かすよう企業に義務付ける国内法「女性活躍推進法」と、女性活躍推進企業データベースで公表されている情報の使い方を学んだ。その後、女性活躍推進に関連して学校法人東洋大学が公表している事業主行動計画や公表情報を他の私立大学のものと比較しつつ、各大学の女性活躍推進の特徴や課題、事業主行動計画の内容やその目標設定の適切さについて話し合うグループワークを行い、最後にまとめとして、グループでの話し合い結果を報告しあって全体で共有した。授業後、学生は東洋大学の女性活躍推進の取組に対する自らの評価とその理由をまとめたミニレポートを提出した。

SDGs 実践講座第11回 講義要旨

12月6日(金)

講師名:大塚 佳臣

テーマ: プラスチックごみから海を守る為に消費者の意識を変えるには?

SDGs 目標 14(海の豊かさを守ろう)の主題の 1 つとして挙げられている海洋プラスチック問題ならびにマイクロプラスチック問題を取り上げた。プラスチックの特徴、使用状況、海洋プラスチックを巡る世界の動向を紹介した上で、海洋プラスチックがもたらす環境影響、マイクロプラスチックの発生メカニズム、マイクロプラスチックがもたらすであろう環境影響について解説をした。その上で、「海洋プラスチック問題・マイクロプラスチック問題に向けて、個人・社会・産業がなすべきこと」「それを社会・消費者がそれを受け入れるようにするために必要な情報提供のあり方」をテーマとしたグループディスカッションを行い、その内容を発表していただいた。最後に、海洋プラスチック問題のように、影響の実態(範囲、影響の大きさ)が不明である問題を扱い世の中に働きかける上で、留意すべき点(因果関係、発生確率とリスクの程度、実効性の考慮)を紹介した。

SDGs 実践講座第 12 回 講義要旨

12 月 13 日(金)

講師名:久米 功一(経済学部教授)

テーマ: 日本人の働き方と働きがいとはこれからどうなるのか

本講義では、「未来の仕事 働きがいと新しいテクノロジーから考える」という視点から議論がなされた。はじめに、SDGs 目標8「働きがいも経済成長も」を確認した上で、働きがいの尺度として、活力、熱意、没頭の3要素からなるワーク・エンゲイジメントが紹介された。コロナ禍では、休業要請等により、ワーク・エンゲイジメントが下がった職種があり、それをどう是正すればよいかが議論された。また、働きがいをも高める方策として、テクノロジーの応用が示された。具体的には、内閣府ムーショント目標 1 が掲げる、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会が実現したならば、自分自身はそのテクノロジーを何に活用するかが議論された。デジタル化に伴う付加価値の変化と、深刻な人手不足による社会の機能低下の心配に対して、新しいテクノロジーを活用して、時間や場所などの制約にとらわれずに、働きがいを感じながら働くことの可能性が示された。

SDGs 実践講座第 13 回 講義要旨

12 月 20 日(金)

講師名:市川 顕(国際学部教授)

テーマ:Security 再考:ウクライナ戦争が動かした原子力発電回帰

この授業では、欧州における「エネルギー安全保障」という言葉に投げ込まれた多様な意味を理解することで、Security 概念が多様であることを学生に理解できるよう試みた。そのため、EU エネルギー政策の歴史および特徴について説明し、EU 加盟国のエネルギーの現状を俯瞰した。その上で、EU による対露経済制裁、EU のウクライナ戦争発生後のエネルギー戦略である REPowerEU、を踏まえて、EU(および EU 加盟国)におけるエネルギー安

全保障概念の整理を試みた。

SDGs 実践講座第14回 講義要旨

1月10日(金)

講師名:外部講師(卒業生 勝又 栄政)

テーマ:トランスジェンダーから見える世界と共生

本学社会学部の卒業生であり、トランスジェンダー当事者の視点から、ジェンダーに関する講義が行われた。

SDGs 目標 5「ジェンダー平等を実現しよう」とは男性・女性の平等に関する目標であり、**LGBTQ+**については厳密には含まれていないというお話から始まり、**LGBTQ+**について学ぶ回となった。勝又さんは、幼いころから性の違和感を感じており、その社会的背景には「男女二元論」が存在し、「男性は青、女性は赤」であったり「男性は格好のいいものを好む、女性は可愛いものを好む」といった固定観念が違和感を生んでいることの説明があった。性別は二つではなく、詳細にはもっと多数の性別が存在し、世の中にはそのことを公言せずに生活している方も多くおり、最初から決めつけた発言をするのではなく、誰もが回答に違和感のないような質問を心掛けることが大切であると伝えられ、締めくくられた。

以上

1.1 SDGsの項目をいくつ知っていますか。

受講前

知っている目標の個数	回答
1	3
2	2
3	1
4	5
5	7
6	2
7	1
8	4
9	1
10	2
11	1
12	1
13	1
14	1
15	0
16	0
17	9
一つも知らない	4
合 計	45

受講後

知っている目標の個数	回答
1	2
2	0
3	1
4	1
5	0
6	0
7	2
8	0
9	0
10	3
11	2
12	2
13	0
14	0
15	1
16	0
17	16
一つも知らない	0
合 計	30

1.2 SDGsの目標のうち、現在あなたが最も関心を持っているものを一つ上げてください。

受講前

最も関心を持つ目標	回答
1: 貧困をなくそう	6
3: すべての人に健康と福祉を	3
4: 質の高い教育をみんなに	10
5: ジェンダー平等を実現しよう	5
6: 安全な水とトイレを世界中に	4
10: 人や国の不平等をなくそう	2
11: 住み続けられるまちづくりを	4
12: つくる責任つかう責任	2
13: 気候変動に具体的な対策を	4
14: 海の豊かさを守ろう	1
16: 平和と公正をすべての人に	1
17: パートナリシップで目標を達成しよう	1

受講後

最も関心を持つ目標	回答
1: 貧困をなくそう	6
2: 飢餓をゼロに	1
3: すべての人に健康と福祉を	2
4: 質の高い教育をみんなに	7
5: ジェンダー平等を実現しよう	3
6: 安全な水とトイレを世界中に	1
8: 働きがいも経済成長も	1
10: 人や国の不平等をなくそう	2
12: つくる責任つかう責任	1
13: 気候変動に具体的な対策を	1
14: 海の豊かさを守ろう	1
15: 陸の豊かさを守ろう	1
16: 平和と公正をすべての人に	1
17: パートナリシップで目標を達成しよう	1

1.3 あなたは、設問2で挙げた目標の実現に向けて、何かを実践しようと計画していますか。

受講前

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	16
2	3
3	9
4	7
5	6
6	0
7	4
合 計	45

受講後

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	0
2	4
3	7
4	5
5	3
6	2
7	9
合 計	30

1.4 あなたは、設問2で挙げた目標の実現に向けて、既に計画の実践の段階に入っていますか。

受講前

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	21
2	6
3	6
4	2
5	4
6	3
7	3
合 計	45

受講後

(していない)1←3→5→7(している)	回答
1	7
2	2
3	2
4	4
5	8
6	1
7	6
合 計	30

★2024年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前45名 受講後30名

1.5 設問3と4のいずれかでSDGsの目標実現に向けた実践を計画している、または、既に実践段階に入っていると回答した人（5～7のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのようなことを実践しようと、あるいは、既に実践していますか。自由に記述してください。

受講前

・インドのアウトカーストの村向けに基礎教育の提供や女性自立支援（NPO）
・ウォーターサーバープロジェクトSPRINGでの活動
①学外・学内での実践：移民難民問題に関して 日本では欧米と比較し、難民認定率の異常な低さが浮き彫りになる中、難民の強制送還を可能にしてしまう入管法の改正案が2023年6月に通ってしまいました。それまでも、難民認定までのプロセスの杜撰さ、入管収容の不透明性（適切な医療が受けられないことによる死亡事件/職員から暴力を振るわれる）など様々な問題点が挙がっていたものの、一向に改善される余地が見えません。これを受けて私は去年、地元・川崎で入管法改悪反対のサウンドデモを開催し、神奈川・毎日・東京新聞に取り上げていただいたり、法務委員会の傍聴に参加するなど様々なアクションを講じてきました。学内でも、教授たちとともに授業内で難民問題について解説する時間を設けていただいたり、私の主張が掲載されたメディアをシェアしていただいたりとう入管法改正を阻止するための活動を行ってきました。今現在も、難民支援の団体にボランティア参加し、日本語教室を月に数回程度開催しています。
②学内での実践：学び、考え、語ることのできる空間づくり 学内では公認サークル「社会科学研究会」に所属し、あらゆる社会問題について学生が主体的に学び、考え、語ることのできる空間づくりに取り組んでいます。過去にはジェンダー問題、人種差別、子ども食堂の実態などの学習会や哲学カフェも開催しました。7月にはパレスチナ/イスラエル問題についての学習会と映画上映会（ユナイテッド・ピープルさまの協力をもとに）を2回開催し、多くの学生とパレスチナ、ガザに生きる人々へ想いを馳せ、停戦のためには何ができるかという議論を行いました。
・個人としてゴミの分別を徹底したり、その知識を友人に共有したりしている。また、不要になったものはフリマアプリで出品するなどした。
・能登ボランティアに参加をしたり、募金活動も行った。
・オンラインで誰でも教育を受けられるサービスの開発計画をしている。
・6の「安全な水とトイレを世界中に」ともかぶる範囲が存在するが、東洋大学内で生理用ナプキンの無償配布や意識調査を行っている。また、外部・ASEANの国に行って複数のボランティアをおこなったりして、発展途上国と日本の間の友好関係を把握すると共に自分に何ができるのかを見てきました。また、来年度は1年間を使いASEANに加盟している国・加盟申請中の国に実際に行き、現状の把握と何ができるのかの実践をおこなってくる予定です。
・アンバサダーや学内での企画に参加している（参加を考えている）
・高校生の時ですが、学習支援ボランティアに参加して1年通して参加しました。

受講後

・SDGsアンバサダーとしての活動。 ・「パレスチナに連帯する東洋大学学生有志」という有志団体を立ち上げ、東洋大学に対して①パレスチナ侵攻への停戦声明の表明、②パレスチナへの人道的支援（パレスチナ市民への支援制度の設立、パレスチナ/イスラエル問題の理解促進に向けた学術的な取り組み）③学生の主体的な発信・活動への協力を要求する署名活動を行いました。2024年11月2日から12月20日の間に上記の内容を記した要求書への賛同署名を集め、学内の教職員45名、学部生300名、院生3名、卒業生62名、中退生2名、学生の保護者/家族17名、学外者744名の合計1,173名の方々に署名していただきました。この署名を学長および理事長にお渡しし、年度末までには理事会にて審査していただくよう動いています。
・学校に行くことが難しい方や、お金の関係上学校に行くことができない方のために、オンライン上でも(義務)教育を受けられる環境を整えること。(学校でネットワークなど情報技術について学んでいるため)
・地域の方々と交流できるイベントに参加をし、いろいろなお話しをしている。
・SDGsを広める活動を計画している
・フェアトレードの商品を積極的に購入するようになり、そのような仕組みを整えている団体に寄付やクラウドファンディングなどの援助をしていると同時に、実際に海外に行き貧困等の問題に直面する方々の現状を知ると同時にワークショップやボランティアの形で手助けをしている。
・渋谷で毎年開催されるプライドパレードへの参加を考えている
・キッズドアや子ども食堂といったボランティア活動をしようとしている
・教職の講義を受講しています。
・自分と異なる国で育って教育を受けた人との交流
・色々なボランティア活動を通して他者と協力しながら、パートナーシップで目標達成はもちろん、関連しているSDGsゴールにもつながっていくので実践しています。
・学習支援活動
・普段の生活の中に少しずつ各目標を意識した行動を取り組んでいる。
・個人的には、男女を問わず、偏見なくすべての人に接することです。
・就職活動で自分自身のキャリアについて考えいる時にこの考え方を念頭に考えている
・水インフラを維持する仕事に就く
・質の高い教育を実現するために、これからボランティアグループなどを通じて英語の教えたり、社会スキルなどをシェアしたりしていきたいと思っています。やっていることとしては、自分の国、ミャンマーの学生たちを無料で日本語を教える活動やっています。
・マイボトル・マイバッグを使用し、プラスチックごみを削減、環境にやさしい洗剤を使うことで海に流れ込む化学物質を減らす

★2024年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前45名 受講後30名

1.6 あなたには、SDGsの目標のうち、設問2で挙げたもの以外にも、大きな関心を抱いているものがいくつかあります。個数を選択してください。（選択必須）

受講前

設問2で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
1	9
2	10
3	8
4	5
5	1
6	2
7	1
8	0
9	1
10	0
11	1
12	1
13	0
14	0
15	0
16	1
他には関心がない	5
合 計	45

受講後

設問2で挙げたもの以外に関心を抱く目標の個数	回答
1	3
2	6
3	7
4	4
5	2
6	1
7	0
8	0
9	2
10	0
11	1
12	0
13	0
14	0
15	0
16	1
他には関心がない	3
合 計	30

1.7 設問6でひとつでも「ある」と回答した方に尋ねます。設問2で挙げたものと設問6で挙げたものを、あなたなりに関連付けて考えていますか。（考えていない）1←3—5→7（考えている）

受講前

（考えていない）1←3—5→7（考えている）	回答
1	2
2	1
3	11
4	6
5	6
6	4
7	9
無回答	6
合 計	45

受講後

（考えていない）1←3—5→7（考えている）	回答
1	1
2	1
3	5
4	2
5	9
6	2
7	7
無回答	3
合 計	30

1.8 あなたは、SDGsの目標のうち設問2で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していますか。（発信していない）1←3—5→7（発信している）（選択必須）

受講前

（発信していない）1←3—5→7（発信している）	回答
1	23
2	5
3	6
4	5
5	4
6	0
7	2
合 計	45

受講後

（発信していない）1←3—5→7（発信している）	回答
1	9
2	4
3	4
4	4
5	5
6	2
7	2
合 計	30

1.9 設問7で、SDGsの目標のうち設問2で挙げたものについて、自分の考えを社会に強く発信していると回答した人（5～7のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのようなことを発信しようと、あるいは、既に発信していますか。自由に記述してください。

受講前

①学外・学内での発信：移民難民問題に関して

設問5で記載した内容と被りますが、学外では神奈川・毎日・東京新聞に取り上げていただき、去年6月に国会で通ってしまった入管法の改正案がいかに難民の生存権を危うくさせるものであるかを主張してきました。さらに、学内でも社会学部研究室の掲示板に新聞面を掲載していただいたり、授業内でも難民問題を考えてもらうための時間を設けていただきました。

②学内での発信：学び、考え、語ることのできる空間づくり

公認サークル「社会科学研究会」のSNS（インスタグラム、旧twitter）を通し、あらゆる社会問題に関する弊団体の学習会、哲学カフェなどで出た参加者からの意見や感想、イベントの様子などを発信しています。特に『人種差別について考えよう』哲学カフェでは、ガザ侵攻によるパレスチナ人の大量虐殺、埼玉県川口市に住む在日クルド人への排斥デモなど、人々の尊厳を当たり前のように踏み躪る出来事を踏まえ、“共生”や“差別”などの言葉に向き合い、対話の過程で出た意見をシェアしています。

・個人のInstagramを使って、活動を発信し興味を持って貰うきっかけをつくらうとしている。

・主にInstagramのストーリーと投稿を用いて、自分がやってきた活動を周知すると共に、次代の参加者を募集したりなど多くの広報をしてきました。

・SDGsアンバサダーのInstagramや広報誌にて、自分の見解を述べている

・ボランティア参加しました。

・この前、AIESECという国際ボランティア組織に三年間ぐらい所属した経験があり、それを通して、SDGsに従う社会を築くために様々な行動、例えば、knowledge sharingというイベントとかをやりました。

・SDGsという目標をもっと多くの人に知るように発信します

受講後

・白山キャンパスに設置されているウォーターサーバーに関する活動で、主に学生に向けマイボトルの利用促進などを発信している。

・就労支援の企業のパン屋さんにみんなでいったことをSNSにあげたりしている。

・SNSを用いて自分の体験を世の中に発信したり、大学で複数の機会をいただき講演・登壇という形で他者に発信している。

★2024年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前45名 受講後30名

・発信というだけなら友人間での会話や学校の先生などとしていて、そのほかにInstagramなどのSNSにも発信しています。
・知識の詰め込みではなく、柔軟な教育が必要である
・インフラが老朽化して維持管理が急務であることを周りの人に話す
・地域の清掃活動に参加する。公共交通機関や自転車を利用し、車の使用を減らす、地域のイベントや防災訓練に積極的に参加する

★2024年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前45名 受講後30名

1.10 あなたは、SDGsの目標の実践が社会をより良いものにすると思っていますか。
(思っていない) 1←3→5→7 (思っている) (選択必須)

受講前

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	件数
1	3
2	1
3	4
4	6
5	8
6	4
7	19
合 計	45

受講後

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	件数
1	1
2	0
3	1
4	7
5	9
6	2
7	10
合 計	30

1.11 あなたは、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させるとしていますか。
(思っていない) 1←3→5→7 (思っている) (選択必須)

受講前

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	回答
1	5
2	0
3	6
4	10
5	7
6	4
7	13
合 計	45

受講後

(思っていない)1←3→5→7(思っている)	回答
1	3
2	1
3	1
4	5
5	6
6	6
7	8
合 計	30

1.12 設問11で、SDGsの目標の実践があなた自身を成長させると回答した人（5～7のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのような点で成長できると思いますか。自由に記述してください。

受講前

・SDGsの目標を実践させようとする中で自分が今まで知らなかった世界の事態を知れて自分の思考に深みが増すと思うから。
・世界の事態を学ぶことが基礎になるため、世界的な視点で物事を見れるようになる
・自分が日常生活でする選択をより良いものにできると思う。
・SDGs目標の実践は、他者から言われたことを鵜呑みにせず、自分で批判的に思考し、検証する能力が備わると考えられる。この能力が自然と身につく、自分自身ぶれない軸を持つことができれば、VUCAと言われる予測がつかないあらゆる状況下でも自分が今何をすべきかが分かるようになる。そのためには、目標実践において様々な失敗も経験し、再度中長期・短期目標を検証、設定し直すことも必要であると考えられる。
・実践することで、理論の構築から実践までを経験することになり、ただ理想を掲げるだけの人間から理想を実現できる人間へと成長できると思った。
個性の尊重は人間関係を良好に保つのに役立つし、地球環境への配慮は未来を考えて行動することに繋がると思うので、人として必要なスキルと予測する能力を高めるといって成長できると思う。
・SDGsの目標の実践をすることで、日本だけでなく世界の人々の状況においても学習することができるから。
・世界の情勢に詳しくなる
・人と人のつながりを大切に、いきいたいから。さまざまな人や経験から、刺激を受けて成長できると思う。
・環境問題を知り、活動できること。
・sdgsが何かを知る事で自身の知識が身に付き、世界情勢が分かるようになる
・世界規模の社会問題に自分がどのように貢献できるのかを考えるうえで、世界情勢や自身の能力に対し向き合っていく必要があるため、自分を客観視することが出来る。
・世界の今を知るといって大きく成長出来ると考えています。自分事に捉えているだけだと上手くいかないことが多い現在の状況の中で、SDGsに関する数多くのことを学ぶことは今を知ることにより大きく貢献できると考えています。
・環境問題に意識を持ち、人として成長できると考える
・社会問題を知り、ふれることでこれから自分が何をすべきなのかが明確になり、行動力が向上する。
・人との繋がりがより深く理解できそうである、そして貧困問題をなくそうとする、私はより多く自分を成長させたいと思います。
・勉強をしたくてもできない人たちがいることを考えて質のいい勉強をしようと考えられる

★2024年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前45名 受講後30名

・日本は生活を送るには、恵まれている環境であるように感じるが、世界には教育どころか生活するのが困難な人や差別、戦争に遭う人もたくさんいると思うのでまずはその現状を知ることが、自分を成長させると 생각합니다。
・成長した点については、SDG s の目標を少しでも実践することによって、いかに自分一人だけでじゃ目標を達成できないと感じました。なので、効率よくSDG s の目標を達成するためには一人で頑張るんじゃなくて、コミュニティに属して取り組んだ方が目標達成に繋がります。
・目標に向かって計画、実行を行うことは主体性の獲得など様々なところで成長できると 생각합니다。
・今まで社会問題に対して何の意識も持たなかったが、実践を通して他人事ではなく自分ごととして社会問題に取り組めると思ったから。
・例えば、Gender Equality が実践できたらお互いにもっと尊敬を持つようになり、より良い社会で生きることが可能になると 생각합니다。また、SDGs は世界に関わることで、色々な国からの友達と問題を解決することで、自分のネットワークも広がっていくだろうと 생각합니다。
・自身の専門分野の加速

受講後

・SDGsのゴールをすべて同時に達成することは難しいと考えているが、達成に向けて取り組むことで自分の視野が広がりより豊かな発想力が身につくと思う。
・様々なことに挑戦し、沢山の経験を積む手助けになる。
・SDGsを学ぶことで世界中の様々な情勢を知ることができるし、環境問題を解決できる可能性がある点
・色々な価値観に触れることで、行動の選択肢を増やせるとおもうから。
・それについて考える事で知識が増え、考える事が出来る
・社会に目を向けること自体がそもそもの成長であると考えています。普段自分のことで手一杯の中、私生活で世の中のことを考えて生活するだけで十分成長であると考えます。また、そのように社会に目を向けることでメゾでもマクロでも普段気づくことが出来ない点に気づく・触れることが出来るので成長の点として十分だと考えます。
・私生活において意識をした生活を送るようになる。
・例えば、「10：人や国の不平等をなくそう」の実践を行うことで、人種による差別や出身による差別的思考にならず、平等な価値観で向き合うことができるようになると思う。
・この開発目標を社会問題と関連させて考え行動することで自分自身の問題に対する意識や行動力を養うことに繋がると考えた
・一人でも自分で悩みを抱え込んで人が減ると思う。
・知ることは大きな第一歩であると感じた
・自分は将来国際協力に携わる職業に就きたいので、SDG s の目標を実践することによりその様々な経験や体験、学びが国際協力に就きたいと思っている自分を成長してくれます。
・課題解決力を向上させてくれると 생각합니다。
・主体性、問題発見能力の成長
・グローバル意識を高め、視野を広げる。
・自分自身がSDGsに携わることによってワールドワイドな考えができると考えこれは自己成長の一環ではないかと考えたから。
・社会問題の知識が増える
・例えば、高い教育を実現するために、貢献することで教育の価値を知り、知識の上昇につながるのではないかと 생각합니다。
・SDGsの実践は「未来の自分を成長させる投資であり、単なる知識ではなく、実際に行動し、試行錯誤しながら成長できる機会が増えます。課題解決能力、視野の広がり、コミュニケーション力、責任感、発想力など、多くのスキルが身につく、将来的にどんな仕事や活動をする際にも活かせる点で成長できるはずで

★2024年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果

回答者数：受講前45名 受講後30名

1.13 あなたは、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようと考えていますか。
(考えていない) 1←3→5→7 (考えている) (選択必須)

受講前

(考えていない) 1←3→5→7 (考えている)	回答
1	5
2	3
3	9
4	8
5	9
6	5
7	6
合 計	45

受講後

(考えていない) 1←3→5→7 (考えている)	回答
1	1
2	0
3	3
4	10
5	6
6	4
7	6
合 計	30

1.14 あなたは、SDGsの目標の実践に際して、仲間たちと連携しながら社会に貢献していますか。
(していない) 1←3→5→7 (している) (選択必須)

受講前

(していない) 1←3→5→7 (している)	回答
1	12
2	6
3	8
4	9
5	4
6	4
7	2
合 計	45

受講後

(していない) 1←3→5→7 (している)	回答
1	7
2	5
3	1
4	7
5	1
6	3
7	6
合 計	30

1.15 設問13と14のいずれかで、SDGsの目標の実践を通じ、仲間たちと連携しながら社会に貢献しようとしている、あるいは、既に貢献していると回答した人（5～7のいずれかを選択した人）は、具体的に、どのような貢献をしようと、あるいは、既に貢献をしていますか。自由に記述してください。

受講前

- ・ボランティアなどを通して教育などに貢献する。
- ・現地でのサポートと先進国からのサポートを分業する。
- ・マイボトルの推進活動。
- ・公認サークル『社会科学研究会』を通して出会った仲間たちとともに、日常では語りづらい社会問題や個人的に抱えているモヤモヤを共有できる空間づくりを行っています。このような空間は、目に見えるような短期的な成果だけではなく、長い年月をかけて社会問題解決/目標達成に取り組んでいくため、メンバーひとりひとりが長期的な視野を持てることを目指しています。そのために、自主ゼミのような読書会や、メンバーが自ら調べたことを共有する学習会、抱えているモヤモヤを言語化して相手に伝える哲学カフェなど、ひとりだけでは成立しない仲間とともにやるからこそ意義のある活動を行っています。
- ・特に関心のある問題を絞り込み、それについて議論して自分たちなりの問題解決の理論を構築する。
- ・友人にもゴミの分別に協力してもらっている。
 - ・以前ダンスの全国大会があったのですが、LGBTを題材にした作品に出演し、優勝することができ、新聞に載りました
- ・SDGsアンバサダーの活動で、メンバーと協力しゴミ拾いや、地域貢献をしている。
- ・Toyo-MeWプロジェクトという団体に所属し、ジェンダー間の理解の促進等をおこなっています。
- ・一度ボランティア参加したことありました。
- ・ユニクロやGUなどでよく見る古着の寄付などは、すぐに実行できることだと思う
- ・自分はSDGsアンバサダーの一員なので、他の仲間たちと連携しながら（パラスポーツ、ビーチクリーンなど）いろいろな活動に参加し、貢献しました。これからは、自分で立案しさらなる上を目指していきたいと思います。
- ・まだ、一緒に活動する仲間がいないため、この授業で出来たらと考えています。
- ・安全な水とトイレを世界中に普及させるために何をすればいいのかわかりません。とりあえず自分の家のトイレの掃除を頑張りたいです。
- ・前申したとおり、ボランティア組織で様々な国の人々と話し合い、お互いに問題を理解してもらい、一緒に解決していました。

★2024年度 SDGs実践講座 受講前/受講後アンケート結果
回答者数：受講前45名 受講後30名

受講後

・ペットボトルごみの正しい分別の仕方やマイボトルの利用促進など、一人ひとりの意識の変革を行おうとしている、
・いろいろなボランティアにさんかをしている。
・海外派遣では、同じ意志を抱く方と一緒に、現地の問題を解決しようと試行錯誤していました。
・異国の文化や思想についての理解を促すワークショップなどを行い、偏見でなく正しい理解のもとに関わりを持てるような世の中にしていきたい。
・自分自身国際ボランティアサークル「Salamat」や東洋大学SDGsアンバサダーに所属しているので、Salamatはフィリピンにいてダイケアセンターの運営だったり地元住民と交流、フィーディングなどでSDGsゴール1、2、4、11、17に貢献出来ていてまたアンバサダーでは防災食配布、ビーチクリーンやバラスポーツで上記以外にもSDGsゴール3、5、6、7、10、12、13、14、15を仲間たちとともに貢献しています。
・「すべての人に健康と福祉を」の目標を達成するために、献血などやその他医療ボランティアをおこない、医療資源の確保に貢献したいと思いました。
・SDGsのイベントへの参加
・生活の些細なことから始めて、良い、持続可能な生活習慣を身につけるつもりである。不要な電力、水資源などの消費を減らし、できるだけ資源の再利用を行う。
・周りの人にSDGsを意識しろと集団で説得する
・地元企業や自治体と協力し、ゴミ拾い+まち歩きイベントに参加、公共施設や商業施設にリサイクルボックスの設置の提案

1.16 その他、何かあれば自由に記述してください。

受講前

・半学期の間、受講生のみならず共に考え、語り合えるような講座であれば嬉しいです。そして自分自身も何か成長できたと思っています。よろしくお願いします！
・高校時代に積極的に貧困国における月経の課題についてプロジェクトを実施し、国内外のコンテスト等で積極的に発信していた。しかし、自分の力に限界を感じるとともに、国外に住む友人との間で政治要素を大きくはらむトラブルがあったため、SDGsに関連する事象を一切受け入れられなくなってしまった。しかし、このまま課題から目をそらし続けるのはよくないと考えたため、受講を決意した。この授業をすべて終える頃に、自分が解決したい明確な課題を追求し、行動に移すことが目標です。
・地球温暖化が進んでいる今は、SDGsを直面している今では意識しはじめ無ければならない時代になりそうである、環境への配慮は必要とする現代社会では森林や水源地を保護する必要があるが我が国では森林面積の割合が多い国だと考えられる。
・今後ともよろしくお願いします。
・よろしくお願いします。
・SDGsの理念などはよくわかるけど、そのために自分が何をすればいいのかは全く分からなくて困ってしまった。

受講後

・本講義を通じてSDGsについて学ぶことができ、自発的に「自分事」にして取り組めることがいくらかでもあったの自覚できました。
・今回の授業でとても多くの学びが得られました。教えて下さった先生方には本当に感謝しています。
・半年間ありがとうございました。
・SDGsの目標を実現する為環境に優しい取り組みは私たちすべての人々が協力し、社会に貢献する必要があるだと感じました。

SDGs 実践講座最終レポート①

1. 全体の概要

私はこの SDGs の授業を通して今後の世界が直面する、あるいは持続可能社会についてよく学びました。授業を受ける前の段階ではただ単に SDGs の概要について勉強するのであらうと考えていました。しかし、各授業で先生方が様々な角度や見方、更に実践的な体験まで行ってくださったおかげで、とても面白い発見がありました。また、私は白山のキャンパスの学部ではないため、オンラインからの参加でしたが、先生がオンライン組にも分かりやすい説明をしてくださったおかげで SDGs の見方が変わりました。更に各授業のグループディスカッションでは他の学部のメンバーと意見交換や交流が出来て授業の知識だけでなく、ディスカッションのやり方が学べる良い機会になりました。今回このような授業を設けて下さった先生方には本当に感謝しています。この授業で得た学びを元に今後の学校生活でも活かしていきたいです。

2. 心に残った授業回

第 12 回 日本人の働き方はどうなるのか

この授業は今まで受けてきた授業のなかで最も印象的でした。なぜなら、他の授業は SDG のよくある貧困の話や水質、食べ物の話でしたが、この授業は日本の働くという問題点に絞り、解決策を探るという今までとは少し違う授業だったからです。一見 SDG とは関係ないようにも思いましたが、持続可能性社会という点で見たら働き方や仕事を見直すことによって日本経済がよくなり出生率が上昇し日本が存続できると思います。私は経済学部ではないのですが、先生がグラフや表を使って分かりやすく教えていただきました。内容の部分で日本と海外の上司と部下の関係と仕事の責任度合いの比較が一番印象的でした。アメリカなどは部下の意見を取り入れ、仕事の責任は上司が取るそうです。日本はリスク回避型なので仕事の責任は部下に取ってほしいし、上司の言われた事が絶対主義の国なので上司の意見が会社の方針として決まり、部下の意見は通らないと聞いて驚きました。確かに日本では年功序列の考え方がまだ根強い国ではあるし、会社の方針はすべて役員や社長が決める傾向があると思います。日本でも最近はボトムアップ型企業が増えているのでこのような考え方が広まって欲しいと考えました。また、固定型 VS 不安定型の話も印象的でした。先生がお話されていた通り、日本企業は古くから付き合いのある一社と取引を行う傾向がありますが、今は不安定な経済社会ですので、取引先が突然倒産する可能性もあると思いました。多くの企業と契約を結ぶ事で一つが潰れても安

心できる状態が生まれると思います。私はここでも日本人のリスク回避型の思想が強いと考えます。怒られたくない、失敗したくないという思いから昔から自分が安心できる企業とだけ付き合いたいという考えが強くあると思います。その考えも大切だと思いますが、他も見るチャレンジをする事によって可能性の幅が広がると思います。少子化に連れて労働人口が減少するのを座って待つことなく、何か動いて、チャレンジをすることは日本を持続可能な社会にするためには必要不可欠な考え方です。更に AI の活用も今の少子化の日本社会にはなくてはならないと思います。様々な職場で人手不足の中 AI を導入することによって改善できると思います。日本政府は欧米各国のように AI に関する法律を取りまとめるべきと思いました。そうすればスムーズに導入する事が可能になります。

3. 身についてしたこと

この授業を通して SDGs の重要性について大変多くの事を学びました。授業を受ける前もその重要性についてはよく理解していたつもりでした。しかし、先生方が具体的な数字やグラフを使って、今の世界の現状とその深刻さを詳細に説明してくださったおかげで、私の SDGs についての知識が増えました。発展途上国の飢餓の問題や水の水質、co2 の問題など私達には考えなければいけない問題が山積みである事が非常に勉強になりました。その知識を身に着けたうえでのディスカッションも大きな財産になりました。みんなで社会問題について話し合い、考えあう事で問題の改善に役立つと思います。一人、一人の力は小さくとも多くの人が集まれば大きな力に変わると 생각합니다。このようにまずは自分が SDGs に対して向き合い、真剣に考える事が大切であると授業を通して思いました。

4. これからどう活かすか

私はこの授業で学んだ SDGs を多くの人に広めていきたいです。先程にも書いた通り、多くの人が考えて議論する事で解決の第一歩が踏み出せると思います。私は地域で SDGs について議論する会を開いて地域の人、出来れば行政の人と一緒に考えて解決に向けて話したいと考えています。そのためには今の知識だけでは議論するには及ばないと思うので、もっと SDGs について調べて深堀をして、積極的に議論できる状態にしたいです。それが出来れば多くの人を巻き込むことが出来て問題の解決の大きな足掛かりとなると考えます。

SDGs 実践講座最終レポート②

1. 講義全体の概要

この講義では、持続可能な開発目標（SDGs）を軸に、現代社会が抱える多様な課題について学ぶ機会を得た。特に、貧困、飢餓、クリーンエネルギー、水資源、移民問題、労働環境といった幅広いテーマを取り上げ、それぞれの問題がどのように関連し、国際社会や個人がどのように取り組むべきかについて考察することができた。

本講義の特徴として、単なる理論的な説明だけではなく、具体的な事例を通じて SDGs の現実的な課題を理解できた点が挙げられる。例えば、「世界がもし 100 人の村だったら」という資料では、世界全体の人口を 100 人に縮小して考えることで、貧困や教育格差、富の偏在といった問題を直感的に理解できた。また、ポーランドのエネルギー政策を題材に、気候変動対策とエネルギー安全保障の関係について学び、環境問題が経済や地政学とも密接に結びついていることを知った。

加えて、日本国内の課題にも焦点を当て、水道水の利用率低下や食品ロスの問題など、日常生活に関わるテーマについても考察する機会があった。こうした講義内容を通じて、SDGs は国際的な課題であると同時に、私たちの身近な生活とも密接に関わっていることを実感した。

2. 心に残った授業回

特に印象に残ったのは、第 3 回の貧困問題に関する講義である。この講義では、絶対的貧困と相対的貧困の違いについて学び、日本国内においても貧困問題が深刻であることを知った。子どもの貧困率が 15.4% と高い現状や、マイクロファイナンスの活用による貧困削減の可能性など、経済的な視点からのアプローチも学ぶことができた。これまで貧困問題は発展途上国の問題という認識が強かったが、日本国内にも存在する課題として捉え直すきっかけとなった。

また、第 5 回の「移民・難民と私たち」の講義では、難民問題に対する社会の偏見や誤解が共生社会の実現を阻む要因となっていることを学んだ。日本では難民の受け入れが非常に少なく、外国人労働者に対する社会的な課題も存在する。この講義を通じて、異文化理解の重要性や、多様性を受け入れる姿勢が必要であることを強く感じた。

さらに、第 11 回の「水道水を考える」の講義では、日本の水道水の安全性や、その持続可能性について深く考えさせられた。日本の水道水は世界的に見ても安全でありながら、ペットボトル水の消費増加による環境負荷が高まっているという問題が指摘された。この講義を受けてからは、日常的に水道水を利用するよう意識するようになり、持続可能な消費行動の大切さを実感した。

3. 身に着いたこと

この講義を通じて、SDGs に関する知識だけでなく、問題を多角的な視点で捉える力を養うことができた。貧困問題に関しては、経済的な視点だけでなく、教育格差や社会的孤立との関係も理解することができた。また、気候変動対策においても、再生可能エネルギーの導入が単純に良いというわけではなく、生態系への影響やエネルギー供給の安定性を考慮する必要があることを知った。

特に情報リテラシーの重要性を実感した。移民や難民に関する偏った情報がインターネット上には多く存在しており、正しい知識を得るためには信頼できる情報源を活用することが不可欠であると学んだ。また、グループディスカッションを通じて、多様な意見を尊重しながら議論する力も向上したと感じる。

4. これからどう活かすか

この講義で学んだことを今後の生活やキャリアに活かすために、まずは日常生活の中で実践できることから始めたい。例えば、食品ロスの削減に努めることや、水道水を積極的に利用すること、リサイクルを意識した消費行動をとることなど、小さな行動を積み重ねていきたい。また、買い物をする際には、環境に配慮した商品を選ぶことや、過剰包装を避けるといった意識を持つことも重要であると考えている。こうした日々の選択が、結果的に持続可能な社会の実現につながると信じている。

さらに、SDGs に関する知識を周囲の人々と共有し、社会全体の意識を高めることにも貢献したいと考えている。例えば、家族や友人と話す際に、食品ロスや環境問題について議論する機会を増やしたり、SNS を活用して SDGs に関する情報を発信したりすることも効果的である。また、学校や地域のイベントなどで SDGs に関する活動に積極的に参加し、多くの人々と意見を交換することで、より深い理解を得ることができるだろう。

将来的には、経済学の知識を活かして、貧困や環境問題の解決に貢献できるような分野で働きたいと考えている。特に、地方自治体や公共機関での政策立案に関わる仕事に興味があり、SDGs の目標を地域レベルでどのように実現できるかを考えていきたい。例えば、地域の企業と協力し、環境に配慮したビジネスモデルを推進する政策を立案したり、教育機関と連携して子どもの貧困問題を解決するためのプログラムを実施したりすることができるのではないかと考えている。

また、ボランティア活動や NGO への参加を通じて、実際に社会課題の現場を経験し、より実践的な視点を身につけたい。特に、海外でのボランティア活動に興味があり、発展途上国の貧困や環境問題に直接関わることで、理論だけでなく現実の課題を肌で感じることができると考えている。こうした経験は、将来的に国際協力や地域開発の分野で働く上で大きな財産となるだろう。

また、企業の取り組みにも注目し、将来的に働く企業を選ぶ際には、SDGs に対して積極的な姿勢を持っているかどうかを判断基準の一つとしたい。環境負荷を低減する製品の開発や、働きがいのある職場環境の提供など、企業の社会的責任を考慮した上で、自分自身がどのように貢献できるかを考えたい。例えば、再生可能エネルギーの活用を進める企業や、フェアトレード製品を扱う企業など、社会的に意義のある事業を行っている企業に関心を持っている。

また、企業だけでなく、個人としても環境や社会に貢献できる方法を模索していきたい。例えば、クラウドファンディングを利用して社会的企業を支援することや、エシカル消費を意識して商品を選ぶことも、一つの方法であると考えている。

最も重要なのは、今回の講義で得た知識を自分の中だけに留めず、周囲と共有し、行動に移すことである。社会の問題を「他人事」ではなく「自分事」として捉え、一人ひとりの小さな行動が持続可能な未来を築く大きな力になると信じている。そのためには、日常生活の中での実践にとどまらず、長期的な視点を持って社会に貢献できる方法を考え続けることが重要であると感じている。

SDGs 実践講座最終レポート③

1. 全体の概要

本講義を通じて、SDGs の目標 4「質の高い教育をみんなに」の重要性を再認識した。教育は社会の発展に不可欠な要素であり、個人の将来だけでなく、地域や国全体の経済発展にも大きな影響を与える。しかし、現実には都市部と地方部、家庭環境による教育格差が存在し、すべての人が平等な学習機会を得られているわけではない。講義では、日本国内外における教育格差の現状や、ICT を活用した教育の可能性、奨学金制度の役割などについて学び、解決策を模索する機会を得た。特に、地方の情報格差や経済的要因による学習機会の制限について深く考えさせられた。

2. 心に残った授業回

最も印象に残ったのは、**「教育格差と ICT 技術の活用」**に関する講義である。この授業では、日本国内外における教育格差の実態と、それを解消するための技術的アプローチについて学んだ。特に、地方と都市部の教育環境の違いや、経済的な背景による学習機会の差が大きな問題であることを実感した。

(1) 日本における教育格差の現状

日本では、地方部では受験に関する情報が少なく、大手予備校の数も都市部と比べて限られている。そのため、大学受験を考える際に十分な情報を得ることが難しく、教育の質にも差が生じている。また、経済的な事情により塾や予備校に通えない生徒が多く、家庭の経済状況が学力に与える影響が大きいことがデータからも示されていた。

(2) 中国の教育格差の事例

中国では、高考（全国統一大学入試）が平等なチャンスを提供する一方で、都市部と農村部の教育資源の差が依然として大きな問題となっている。地方の子どもたちは、経済的な理由で学業を中断することも多く、家庭を支えるために働くケースが多い。そのため、教育の機会を均等にするためには、単なる制度の整備だけでなく、家庭や地域全体の支援が不可欠であることが分かった。

(3) ICT 技術を活用した教育支援

授業では、ICT 技術を活用することで教育格差を縮小できる可能性についても学んだ。特に、オンライン教育ツールの導入は、地方の学生が都市部と同じレベルの教育を受けられる手段として期待されている。例えば、AI を活用した学習支援ツールを導入することで、生徒がいつでも質問できる環境を作り、個別最適化された学習を提供できる。

また、タブレットやノートパソコンを無償配布し、インターネットを通じて塾の授業を受けられるようにすることで、情報の格差を減らすことが可能になる。

この授業を通じて、教育格差を解決するためには、ICT 技術の活用が鍵となることを強く実感した。従来の教育制度だけでは解決できない課題に対して、デジタル技術が新たな解決策を提供できることが分かり、将来的にこの分野に関わる仕事をしたいと考えようになった。

3. 身についたこと

(1) 教育の機会均等の重要性

教育は「選ばれた人」のものではなく、すべての人に平等に提供されるべき権利である。しかし、現実には地域や経済状況によって学習機会が制限されている。この問題を解決するためには、政策の見直しだけでなく、テクノロジーを活用した新しい学習機会の提供が必要である。

(2) ICT を活用した教育の可能性

オンライン教育ツールの導入により、地方に住む生徒も都市部の生徒と同じレベルの教育を受けることが可能になる。映像授業や AI を活用した学習支援システムを活用すれば、従来の黒板と紙の授業だけでは実現できなかった個別最適化された学習が可能になる。

(3) 奨学金制度の新たな可能性

経済的な理由で学習機会を得られない子どもを支援するため、奨学金制度のブランド化が有効であることを学んだ。企業や個人が支援する仕組みを明確化することで、より多くの支援が集まりやすくなり、持続可能な教育支援が実現できる可能性がある。

4. これからどう活かすか

(1) ICT を活用した教育支援の推進

今後は、AI やデジタル技術を活用した教育ツールの開発や普及に関心を持ち、実際に活用することを目指したい。例えば、ChatGPT のような AI を活用すれば、生徒がいつでも質問できる環境を整えることができ、学習機会をより均等に提供できる。オンライン学習プラットフォームの発展にも注目し、将来的にこの分野に貢献できるようなスキルを身につけたい。

(2) 教育支援プロジェクトへの関与

奨学金制度のブランド化に関するアイデアを活かし、企業や個人が支援しやすい環境を整える活動に参加したい。例えば、学習支援プラットフォームを通じて、教育支援を希望する人と支援を必要とする学生をつなぐ仕組みを考えたり、地域ごとの教育ニーズに応じた支援プログラムを検討したりしたい。

(3) 情報発信と啓発活動

教育格差の問題について、SNS やブログを活用して情報発信を行い、より多くの人に関心を持ってもらうことも重要だと考えている。特に、地方の受験生やその保護者向けに、学習のコツや受験情報を共有することで、情報格差の解消に貢献できると考えている。

5. 結論

本講座を通じて、教育の機会均等が社会の発展にとって不可欠であることを改めて認識した。SDGs 目標 4「質の高い教育をみんなに」の実現には、政府の政策だけでなく、テクノロジーの活用や奨学金制度の強化など、多方面からのアプローチが必要である。

今後、自分自身のキャリアの中で、教育格差の解消に向けた取り組みに貢献できるよう、ICT 教育や教育支援プロジェクトに積極的に関わりたい。また、個人としても学習機会の提供や情報発信を通じて、より多くの人々が平等に学べる社会の実現を目指していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート④

1. 全体の概要

SDGs とは、国連で 2030 年を達成期限として掲げられたものです。17 のゴール（目標）と、ゴールを達成するための具体的な 169 のターゲットで構成されている。政府・企業・地域・個人が達成すべき目標である。

第 2 回目の授業では、世界がもし 100 人の村だったらについて講義を受けた。第 3 回目の授業では、世界と日本の子どもの貧困について考えた。4 回目の授業では、カーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何ができるのかについて考えた。第 5 回目の授業では、移民・難民との共生について話し合った。第 6 回目の授業では、飢餓の問題について考えた。第 7 回目の授業では、うまい棒についての講義を受けた。第 8 回目の授業では、人と話し合うときのルールについて考えさせられた。第 9 回目の授業では、環境と健康について考えた。第 10 回目の授業では、ノルウェーにおける持続可能な コ・ハウジングの供給・運営 体制について講義を受けた。第 11 回目の授業では、水道水について考えた。第 12 回目の授業では、日本人の働き方について講義を受けた。第 13 回目の授業では、ポーランドにおける原発計画と市民意識について講義を受けた。第 14 回目の授業では、ジェンダーについて考えた。第 15 回目の授業では、各グループが最終発表を行った。様々な問題について話し合ったり、考えさせられたりした。普段は、貧困問題やエネルギー問題についてあまり考えないので、問題について考える機会、他のキャンパスの生徒と話す機会が得られて興味深かった。

2. 心に残った授業回

第 2 回

第 2 回目の授業では、世界がもし 100 人の村だったらについて講義を受けた。日本は、教育も受けられるし、飢餓を体験する人もあまり多くはない。しかし、他の国では飢餓に苦しんでいたり、教育が受けられなかったりすることがある。日本とアフリカを比べると、飢餓でなくなってしまう人はアフリカの方が圧倒的に多い。他者を助けるためには、人に愛情をもって接すること、諦めないことが大切だと授業資料には書いてあった。

人を助けたいのならば、お金を稼ぐことが重要だと思った。お金を稼いで億万長者になることができれば、そのお金を使って人を雇えて、人を助けるためのプロジェクトをたくさん実行することができるし、他の国にお金をばらまく

ことができる。お金があれば、心に余裕ができ、他の人のことを考えて思いやることができると考えた。自分に余裕がないと、他者の持っている視点について考え、理解することができない。貧困の子どもたちのために食料を与えたり、野菜の育て方を教えたりしようと思っても、人を集めるために給与が発生した方が人を集めやすいし、野菜を育てるために道具が必要になるので、それを買うにもお金がかかる。だから、日本の給料をもっと上げたり、税金を少なくしたりすることが必要だと思った。「他の国が貧困です。子どもが教育を受けられていません。だから、募金をお願いします。」と言われても、募金をする人は多くないと思う。自分の生活で精一杯だからである。学生がそういう募金活動をして、その学生が社会人になったとき、仕事で忙しくなって時間に余裕がなくなり募金活動を続ける人は減ってしまうと思う。日本は、お金と時間に余裕がなくなってきたと思うので、日本の給料をもっと上げたり、税金を少なくしたりすることによって、日本人1人1人の生活に余裕を持たせ、他の国の惨状を改善する日本人が増えるのではないかと考えた。

3. 身についてたこと

他者について考えるときに、子どもだから、お年寄りだから男性、女性であるから、この職業だから、この人種、宗教信者であるから、と実態も知らないのに、文句や難癖をつけるのをやめようと思った。人と接するときには、何も知らない人を決めつけるのではなく、1人の人間としてどういう人であるのかを探っていくことが必要であると考えた。良いところと悪いところを考えることが大切である。つまり、多角的な視点で物事を見ることが求められると思った。そして、多角的な視点で物事を見るためには、知識が必要であるので、読書の習慣が身につくようになった。社会学に関すること、植物に関することなどいろいろな本を読むことによって、知識を少し増やすことができたし、様々な学問に興味を持つことが増えた。

4. これからどう活かすか

SDGsの取り組みに参加することも大切であるが、日常で自分では何ができるのかを考えて、日頃から植物を育てたり、動物を増やしたりして自然を増やし、自然と共生することに活かす。本を読んで知識が増えたので、その知識を応用して人の手助けになるにはどのようなことをするべきかを考え、実行するように活かすことが求められるのではないと思う。そして、頭の片隅にSDGsの概念や他者についての思いやりがないと、社会について考えることを放棄してしまうので、考えることを辞めないように、たまにこの授業を受けたことを思い出そうと思う。

SDGs 実践講座最終レポート⑤

1. 全体の概要

初回の講座では矢口学長が学校法人東洋大学 SDGs 行動憲章についての説明があった。変化の激しい現代社会において、多様な価値を理解するとともに自己の哲学を持ち体系的に考え主体的に社会の課題に取り組み対処できる人材を育成するためとしての教育、多面的な知を結集し広範かつ重層的な研究を展開し複雑な課題を解決するための研究、や他にも環境貢献や社会・国際貢献、ダイバーシティ・インクルージョンなどの観点が存在した。第1回は海外にルーツを持つ若者のキャリアとしてラウファルーサアサリーさんをお招きして「われわれ」を問い直すということが今の私たちにとって必要ということを学んだ。

第2回の授業では世界がもし100人の村だったらという題で講義を行い世界中に存在している格差を改めて知ることが出来た。日本にも格差社会は存在しているということも認識した。

第3回では社会福祉学部の小野先生をお招きし、貧困について学習した。絶対的貧困や相対的貧困といった貧困の種類や日本にも存在している貧困についてどのような対処が施されているのかを学んだ。そして貧困と災害、レジリエンスについての説明もあり、貧困地域は災害が発生した時に災害の影響を受けやすく災害時から始めるのではなく常日頃から対策や関係地を築かなくてはいけないということも学んだ。

第4回ではカーボンニュートラルの実現に向けて私たちは何が出来るといいうテーマで小瀬先生をお招きした。カーボンニュートラルに向けて東洋大学では川越キャンパスのこもれびの森で行われている森林保全活動が挙げられた。また履修生内で私達には何が出来るといいうことでグループ内で考えた。電力消費節約のため、階段を使うように促す案が出て階段に今の消費カロリーを示し、階段利用者に効果がある階段の使い方を考えた。

第5回では移民難民と私たち・共生社会へのカギと題して難民移民問題について取り扱った。貧困や紛争で住む場所を追われている人がこの世界にはいてそれだけではなく、賃金を稼ぐためや、学習をする理由などで自分の身を国外に置く人がいる。日本では難民受け入れ状況が先進国の中は極端に低くなっている。だがこのことは言語の問題やグローバル化が進んでいないなどの様々な要因があるためだ。グループワークでは難民側を受け入れ賛成派、難民受け入れ反対派、難民の3つの視点で話し合いを行った。次に何が共生を阻むのかについて話し合った。

第6回は飢餓問題についての講義で食糧問題の原因と解決策をグループで話し合った。Hidden hunger を改善するには何をすべきかについても話し合った。教育面での支援が必要と考えた。

第7回ではうまい棒を用いてパートナーシップ実現に向けて講義を行った。人と人とのつながりということはとても大切であり、自分の身の回りにいる人三人をつなげると有名な人物に会えるということを知った。また SDGs の目標達成にはパートナーシップが必要不可欠であることも学んだ。

第8回からは、最終発表に向けてのグループで講義を行った。8回ではグループワークが円滑に行えるようにルール決めやどのように議論を展開すべきかを学んだ。

第9回は北脇先生をお招きして公衆衛生について講義を行った。生活環境を守っていくためには上下水道、廃棄物処理が必要であることを学んだ。

第10回ではノルウェーにおける持続可能なコ・ハウジングについての講義を行った。日本とノルウェーにおいて戸建て志向・持ち家志向という点であった。幸福度と住宅取得の希望は相関関係にあることを学んだ。グループワークで出た意見として日本の廃校になった学校をリノベーションし老人ホームにすべきというアイデアが出た。

第11回は水道水を考えると題し世界には安全な水を確保することが難しいことを学んだ。近年、水道水に抵抗を持つ人が多く、水道水を抵抗がある人に飲んでもらうには何をすべきかをグループワークで考えた。もともとの価値観などもあり、飲んでもらうにはなかなか難しいということを感じた。

第12回は日本人のこれからの働き方について少子高齢化に対する新たな雇用形態や AI、DX 導入の行方について学んだ。あらゆる変化に私たちは対応していかなくはいけないことの重要性を学んだ。

第13回はポーランドの原発立地について市川先生をお招きし、講義を行った。エネルギーと安全保障について深く学ぶことが出来た。

第14回では LGBTQ について勝又先生をお招き講義を行った。日本はいかに男女二元論で物事が成され、当事者は生きにくい世の中であったということを再確認した。また LGBTQ だけではなく日本はカミングアウトをしなければいけないということがさらに生きにくいと思う原因になっていると感じた。

心に残った授業回

第13回のポーランドにおける原発計画と市民意識が心に残った。日本人は東日本大震災の福島第一原発の事故を経験していることで原発に関して敏感である。また近年ロシアのウクライナ侵攻があり国家間の安全保障も考える機会が増えた。私はこの講義を受ける前まで原発立地と安全保障について全く関係ないものと感じていたが、実は深くかかわっていて、日本は隣国が戦争寸前で

あり、原発に感じてでもこれから考えなくてはいけないと感じたからだ。

2. 身についてしたこと

私は SDGs 実践講座を通じて日常生活で起きている問題を SDGs の観点で考えることが出来たと感じる。実践講座で取り扱った問題は私たちの日常生活と関わっていてそれらの問題を私たちはどう対処すべきか考えた。またグループワークを通じて自分の意見を発信、仲間の意見と自分の意見を比べ共通点や相違点を見つけることが出来た。最終発表に向けて仲間同士で協力し合い問題をどのように解決し、我々がどのようなアクションを取るべきかを考える問題解決力と政策提言も身についた。

3. これからどう活かすか

私は現在東洋大学 SDGs アンバサダーとして日々活動に励んでいる。実践講座では SDGs について深く学ぶことが出来た。SDGs に関するワークショップを企画する、もしくは自分自身が参加することが考えられる。日常生活においても節水を心がける事、マイボトルを持参することや、募金活動に参加するなどといった今からでも行えることを行動にすることも挙げられる。そして実践講座のように多様な人と SDGs について考えることもパートナーシップを実現するためには必要不可欠なので年齢や性別国籍を超えて考えることが私たちに出来る事である。

SDGs 実践講座最終レポート⑥

本講義では、回ごとに研究部門の異なる教授が講義を行い、学生間のグループディスカッション等を通して学びを深めるものである。その内容は多岐に渡り、文系分野のジェンダーや難民の課題だけではなく、理系分野とされる衛生に関連する課題や植物の栄養価を高める方法についての講義もあった。学生は会場となっている白山キャンパスの学生だけでなく、朝霞キャンパスや川越キャンパスの学生な多様な学部、学年の参加があった。また、ほとんどの授業でディスカッションための時間が設けられていた。多くの学生が積極的に発言をしていたため、参加に否定的な人を見つけることが難しいほどであった。講座の最終回では興味のあるSDGsのターゲットに沿ってキグループに分かれてプレゼンテーションを行った。その際、キャンパスや学年による隔たりはなく、積極的な議論が行われた。プレゼンテーションについては、発表内容の深さに多少の差はあるものの、どのチームも丁寧に準備をして本番に臨んでいた。

私の特に印象に残った回は、11回目に大塚教授が行った「水道水を考える」という講義である。この講義では授業前に三種類の水が配布され、どの水が水道水かを判別するきき水が行われた。講義内容は水道水の安全性を懸念してそのまま飲むのを避ける人について、科学的根拠に基づいた判断なのかを問うものであった。事実として、東京の水道水は厳しい検査基準を通過した非常に安全性の高いものであり、科学的に危険という証明する根拠はないに等しい。そのため、荷まない原因の多くが心理的要因による判断であることを学んだ。また、心理的要因が与える影響について、具体的なデータが提示され、印象が人の行動に与える影響力の大きさに驚いた。特にベイジアンネットワークについては全く知識がなく、確率をあのように分かりやすい図で表現できることがとても興味深かった。講義を通して一つの課題には複数の要因があり、課題を解決するうえで、妥協点を探す重要性にも気づいた。今までの私では、水道水を飲む人が少ないという課題に対して、極限まで有害物質を減らすという対策しか考えることができなかった。しかし、水道水を飲む人が少ないという課題において、実際に取り組むべきは意識の改革で、現時点で基準をクリアできている水質の改善は妥協できる点に入ることを知った。この講義の最後にはグループディスカッションが行われた。特に印象に残っているのは、東京の水道水は地方の水道水より味が悪く、飲む気にならないという意見であった。味を比較した感想であるのか、水源を見て受けた印象による感想なのかを知ることはできなかったが、実際に東京の水に対してそのような印象を抱いている人がいることに驚いた。また、話し合いの中で、水道水という名前に問題があるという意見が出たことも印象的だった。講義を受講する前

は、討議されていなかった可能性もあったかもしれない。知ることの重要性を痛感した。

全体を通して身についた力は、多角的に課題を捉えて原因を推測する能力だ。講義を受けるまでは、判断材料が自分の経験に限られ、社会課題が発生する要因も一つか二つ程度しか考えることができなかった。しかし、普段関わることのない方々と意見を交換したことや講義で新たな知識を沢山取り入れることができたため、多角的な視点から物事を考えられるようになり、一つの課題に対してその要因が一つだけではないことに気が付くことができた。また、SDGsの印象への印象も大きく変化した。過去の経験から、受講前は社会課題解決のために一部の行動力のある人のみが活動を行っていてそれ以外の人は真剣に取り組んでいないと考えていた。しかし、講座を通して多様な人々と関わったことで、実際に活動を行っている人は決して少数ではないことに気づいた。それにより、以前より社会課題を解決するための活動参加する際の抵抗が軽減し、実際に地域のごみ拾いを行うなど、行動につなげることができた。

私は特に関心を持ったのは6番の「安全な水とトイレを世界中に」である。ごみ拾いに参加したきっかけも地域の川の汚染がひどく、これ以上水質を悪化させないことが目的であった。また、一度は挫折した高校時代に取り組んでいた貧困地域における生理の貧困を是正するプロジェクトを再開するため、資料を一から集め直し始めた。私はまだ将来何を目的とし、どのように行動していくかの具体的な指標が定まっていない。しかし、実際に就職する職業や企業にかかわらず、生理の貧困の解決のための活動は人生を通して続けていきたいと考えている。他にも、マイボトルを持参することやごみを丁寧に分別することなど、大掛かりな準備をせずとも取り組めることは沢山ある。SDGsのための取り組みは意識の高い人がガクチカを稼ぐために行っているものであるという悪いイメージを払しょくするためにも、周りの人をも巻き込みんで小さなことでも意識して日常生活をおくりたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑦

1. 全体の概要

私は、12/20 の SDGs 実践講座第 13 回、国際学部市川先生の「ポーランドにおける原発計画と市民意識」[1]という授業が、とても印象に残った。その講義を受け「日本における原発の歴史と今後について」を調べ、自分の考えをまとめたいと思い、本テーマの設定に至った。本レポートを執筆することで、原発に関しての自分の意見を持てるようになりたい。

2. 心に残った授業回

第 13 回

講義で学習した、ポーランドの原発の話を簡単にまとめる[1]。ポーランドは欧州屈指の石炭産出国で、2021 年時点 79.7%石炭火力発電の割合を 37.5-56%の範囲に縮小しようとしていて、それを埋め合わせるために風力発電と原発を使用することが計画されている。

さらに、ウクライナ情勢などをふまえた結果、エネルギー自立が必要と考え原発の導入を急いでいる。今まで欧州の各国に石炭の利用で非難されたり、ロシアとの天然ガスのやり取りに苦労したりと、様々な要素が絡み合い、2022 年 11 月のポーランド国民原発支持率は 75%となっている。

講義で学習をしたのはポーランドのことであった。しかし、私はそもそも原発についての知識や、日本と原発の関連などの知識が全く無い。これから、様々な文献を調べて、まとめたい。

3. 身についたこと

まず、原発の基礎について調べた。ネワンでんき「原子力発電のメリットとデメリット。再稼働の必要性や代替エネルギーについても解説」というページをもとにまとめる。原子力発電の仕組みは、ウランという物質の核分裂によって発生する膨大な熱エネルギーを利用して電力を作る方法である。

原発の話で、よく耳にする「放射線とは」何かを調べた。原子力発電の燃料であるウランは天然の放射性物質だが、原子炉の中でウランが核分裂する時に多量の放射性物質が生み出される。放射線とは、特定の物質が出す高エネルギーの粒子や、空間を伝わる電磁波のこと。放射線を出す物質を「放射性物質」、どのくらいの量の放射線を出すかという放射性物質の能力を「放射能」という。放射能は時間の経過で弱まり、半分に減るまでにかかる時間を「半減期」と呼ぶ。具体的に紹介すると、ヨウ素 131 は 8 日しかかからないが、ウラン 238 は

45 億年もかかる。ALPS 処理水に含まれるトリチウムは 12.3 年かかる。

次に、原発のメリットをまとめる。原子力発電は、発電効率、安定性、CO₂ 排出量の観点で優れている。最大の利点の一つは、非常に少量の燃料で大量の電力を生み出せるという点である。ウランは、ペットボトルのふたより小さい燃料 1 つで一般家庭の 6 か月分の電力を生み出すことができる。

また、原子力発電は安定的な電力供給が可能である。ウランは、世界各地で採取可能で、化石燃料・自然エネルギーに比べ安定供給が可能である。原子力発電はベースロード電源とされ、常に一定の電力を供給し続けられるため、電力網全体の安定性を高める役割も果たしている。

そして、ウランの核分裂を利用する原子力発電は、燃焼のプロセスがないので、発電をする際に CO₂ を排出しない。温室効果ガス削減が求められる現代において、原子力発電は重要な役割を果たすことが期待されている。

続けて、原発のデメリットをまとめる。原子力発電は、事故発生時の被害、使用済み燃料、費用問題などの懸念点がある。原子力発電所で事故が起きた場合、放射性物質が外に漏れる可能性がある。放射線にさらされることを「被ばく」といい、細胞の遺伝子を傷つける。大量に浴びることで、細胞が分裂できず死んでしまい、がん化したりする。少ない量でも、数年以降に発ガンや白内障などの障害がおこる危険性がある。引用した

また、使用済み燃料「核のゴミ」の処理にも大きな課題がある。高い放射性廃棄物を安全なレベルに減衰させるためには、数万年から数十万年かかると言われていて人類の生活圏から隔離する方針が世界で共有されている。

そして、原子力発電所は初期投資、維持に莫大な金額が必要になる。また費用だけでなく、安定性を確保するために高度な技術と、厳しい規制基準を満たす必要がある。さらに、稼働していない期間も、維持費用が必要となり、廃炉にも数十年単位の時間と莫大なコストがかかる。建設・運用・廃炉まで一貫して高額なコストがかかることになる。

次に日本の原発の歴史を調べた。日本では 1955 年に「原子力基本法」が成立し、原子力利用が始まった。この基本法で、原子力の研究や開発、利用は平和目的に限る、また「民主」「自主」「公開」の三原則にもとづくことが定められた。1970 年福井県で日本原子力発電株式会社の「敦賀発電所 1 号機」が日本で初めて稼働。1970 年の大阪で開催された日本万国博覧会で「原子力は発電に利用することのできるエネルギーである」という認識が広まった。1973 年オイルショックが起きた際、当時の田中角栄首相が「原子力を重大な決意を持って促進したい」と述べ、立地地域へ交付金を定める法律が整備された。

1995 年、研究運用されていた福井県の高速増殖炉「もんじゅ」でナトリウム漏洩事故が起こった。もんじゅの冷却材であった液体金属ナトリウムが漏洩して火災につながった。また、1999 年に株式会社 JCO のウラン加工工場で臨界事故が発生。ほかにも、点検データの不正が明らかになるなど、原発に対する国民の不信を招く事態となった。そして政府は 2003 年に策定したエネルギー基本計画で安全性の向上・信頼回復に努めた。

2010 年「第三次エネルギー基本計画」では「2030 年に、原子力発電比率を 50%超を目指す」と記載された。しかし 2011 年、東日本大震災にともなう福島第一原発の事故が発生。深刻な被害をもたらすこととなった。津波による事故が原因で、水素爆発が起き原子炉などが破損し、放射性物質が大気中に放出された。風で周辺に広がり、雨で地上に降下した。既に現在の福島県内の大気中の放射線量は現在、世界の主要都市とほぼ同水準になっている。2023 年 5 月 1 日時点で避難指示解除準備区域や居住制限区域ではすべて解除され、7 市町村の一部で帰還困難区域が設定されるのみとなっていること。

4. これからどう活かすか

以上のように、講義で学んだことから日本の現状を、調べたことをもとに自分の考えを述べたいと思う。まず、私は原発の利用に賛成であり、もっと導入をしていきたいと考えている。電力は人間が生活していく上で必要不可欠であり、太陽光・水力などの自然エネルギーだけでは賄えず、きれいごとだけでは済まされないと考えた。原子力だって CO2 排出の観点で言えば、環境に優しい。人体への影響が考えられるが、しっかり対策を練り、事故が起きた場合に再発防止に努め進化して行けば良いと思う。このようにして、人間の文化は発展してきたのだと思う。

リスクは沢山あると思うが、何事においてもリスクを犯さない限り成長はないと思う。石油など現状のエネルギー問題は、日本の全員が知っていることだと思う。その代わりとなるものとして上げられているのが、この原発だと思う。新しい物を取り入れるのは反対されたり、デメリットばかり見られてしまうことが多い。しかし、調べ自分で考えメリットとデメリットを比較できる様になりたいと思った。

今回このレポートを書いたことにより、原発について自信を持って自分の意見を持てる様になった。このように他の社会問題に関しても、誰かの意見を鵜呑みにするのではなく、様々な記事を読んでメリット・デメリットを比較して検討することが大事だとわかった。今後、暮らしていく中でもさまざまな判断をすることが求められると思う。その際に時間をかけても、しっかり考えていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑧

1. 全体の概要

本講義は、SDGs（持続可能な開発目標）の17の目標を基盤とし、さまざまな視点からSDGsを学ぶことを目的とした授業である。授業では、水資源、貧困問題、環境問題など、多岐にわたるテーマが取り上げられた。その中で、受講者は自身に関心を持った目標を選び、グループでテーマを決定し、具体的なアクションについて検討した。その成果を最終的にプレゼンテーションとして発表する構成となっている。

本講義の魅力は、単にSDGsに関する知識を得るだけでなく、さまざまな学部や学年の学生と交流する機会を得られる点にある。通常の授業では自学部の学生と関わることがほとんどであるが、本講義では異なるバックグラウンドを持つ学生と意見を交わし、新たな視点を得ることができた。そのため、SDGsの学びにとどまらず、自身の視野を広げることができた点が非常に有意義だったと感じる。

2. 心に残った授業回

最も印象に残ったのは、第14回目のトランスジェンダーに関する講義である。この回では、実際にトランスジェンダーの方が講師として登壇し、ご自身の経験や社会的課題について話してくださった。特に印象的だったのは、私たちが何気なく使っている言葉がトランスジェンダーの方を傷つける可能性があるという指摘である。例えば、「彼女できた？」といった何気ない会話も、性自認と生物学的性別が一致しない方にとっては不快に感じる場合があることを認識し、言葉遣いに配慮することの重要性を学んだ。

また、オリンピックにおける性別の枠組みに関する議論も興味深かった。トランスジェンダーの方が女性枠または男性枠で競技に参加する際、公平性の問題が生じることがある。たとえば、身体的な違いが競技の結果に影響を与える可能性があり、公平性を保つためにどのような制度が適切かを考える必要があると感じた。この講義を通じて、トランスジェンダーの方々が直面する社会的困難についてより深く理解することができた。そして、今後は日常生活においても、相手の立場を尊重し、多様性を意識した行動を取るよう心がけたいと考えようになった。

3. 身についたこと

本講義を通じて、SDGsに関する幅広い知識を得るだけでなく、異なる視点を持つことの重要性や、実際に行動を起こすことの大切さを学ぶことができた。

SDGs は単なるスローガンではなく、現実社会の課題解決に直結するものであると実感し、特に環境問題やジェンダー問題について深く考えるきっかけとなった。例えば、環境問題に関する講義では、気候変動や資源の枯渇が私たちの生活に及ぼす影響について学び、持続可能な社会を実現するためには、個人レベルでも意識的な行動が求められることを理解した。ジェンダー問題に関する講義では、社会における無意識の偏見や構造的な課題について考えさせられ、日常の何気ない言動が他者に与える影響について改めて意識するようになった。また、他学部の学生とのディスカッションを通じて、自分とは異なる視点や価値観に触れることができたのも大きな学びであった。私は情報系の学部に属しており、普段は技術的な観点から物事を考えることが多いが、経済学や社会学を専攻している学生と意見を交わすことで、SDGs の目標を達成するためには技術だけではなく、政策や教育、社会構造の改革など、多方面からのアプローチが必要であることを実感した。特に、貧困問題について議論した際には、単に経済的支援を行うだけでは根本的な解決には至らず、教育や雇用の機会を創出することが重要であるという意見が印象に残っている。このように、異なる分野の視点を取り入れることで、より包括的な問題解決の方法を考えることができるようになった。

さらに知識を得るだけでなく、実際に行動に移すことの重要性も学んだ。私は授業の一環として地域の清掃活動（ゴミ拾い）に参加したが、身近なところからでも社会に貢献できることを実感した。SDGs の目標を達成するには、政府や企業の取り組みだけでなく、個人レベルでの意識改革と行動が不可欠である。例えば、環境問題に関しては、リサイクルの徹底や省エネルギーの実践、エコフレンドリーな製品の選択など、日常生活の中でできることが多くある。ジェンダー問題に関しても、周囲の人々への配慮や、多様性を尊重する姿勢を持つことが重要であると感じた。

このように、本講義を通じて、SDGs に関する知識を深めるだけでなく、他者と意見を交換することで新たな視点を得ることができ、さらに自ら行動を起こすことの大切さを学んだ。今後は、情報技術を活用して SDGs の目標達成に貢献できるような取り組みを考え、より実践的な形で社会課題の解決に関わっていきたいと考えている。

4. これからどう活かすか

私は情報系の学部に所属しており、プログラミングやアプリ開発を学んでいる。このスキルを活かし、SDGs の目標に貢献できるようなシステムやアプリ

を開発したいと考えている。

例えば、SDGs の目標 6「安全な水とトイレを世界中に」を実現するために、水の清潔度を可視化するシステムを開発することが考えられる。具体的には、水の透明度や細菌数をセンサーで測定し、データを視覚的に分かりやすく表示するアプリを作ること、水質の問題をより多くの人に認識してもらうことができる。

また、環境問題への貢献として、ゴミの分別をサポートするアプリの開発も考えられる。AI を活用してカメラでゴミを識別し、適切な分別方法をユーザーに提示するシステムを構築することで、リサイクル率の向上に貢献できるのではないかと考えている。

さらに、ジェンダー平等に関連するアクションとして、LGBTQ+の方々が安心して相談できるオンラインプラットフォームの開発も視野に入れている。例えば、匿名で相談できるチャットボットを設置することで、悩みを抱える方々が気軽にサポートを受けられる環境を作ることができるかもしれない。このように、情報技術を活用することで、SDGs の達成に貢献できる可能性がある。本講義で学んだことを活かし、今後の学習や開発活動に取り組んでいきたい。

5. おわりに

本講義を通じて、SDGs の課題がいかに多岐にわたり、かつ深刻な問題であるかを実感した。そして、知識を得るだけでなく、具体的なアクションを起こすことの重要性を学ぶことができた。今後は、情報技術を活用して SDGs に貢献する方法を模索し、自分なりのアプローチで社会課題の解決に取り組んでいきたいと考えている。

SDGs 実践講座最終レポート⑨

1. 全体の概要

今回の SDGs に関する講義を通じて、持続可能な社会を実現するための多面的なアプローチについて学びました。17 の目標を中心に、それぞれの課題の背景、現状、そして具体的な解決策を多角的に理解する機会を得ました。特に、環境問題、貧困や格差社会、ジェンダー平等、エネルギー問題といった世界的な課題が、個人や地域社会の行動とどのように結びついているのかを実感しました。講義では、各目標が単独で存在しているのではなく、相互に関連していることを新たな発見として学ぶことができました。例えば、目標 13「気候変動に具体的な対策を」と目標 14「海の豊かさを守ろう」や目標 15「陸の豊かさを守ろう」が密接に関連しているように、一つの課題が解決されることで、別の課題にも好影響を与えることがわかりました。また、課題解決には地域特有の背景や文化を考慮した上で、国際的な協力と地域での具体的な取り組みを組み合わせる必要性も学びました。

2. 心に残った授業回

第 11 回

私が特に心に残った授業回は、「水道水の重要性」について学んだ回です。この授業では、日本が世界でも数少ない、蛇口から直接水を飲める国であるという事実が強調されました。それに対し、多くの国では水質汚染や環境が原因で、安全な飲料水にアクセスできない現状があることを知り、日本の水道水の素晴らしさに気づかされました。さらに、ペットボトル水と水道水の環境負荷の比較も非常に興味深いものでした。ペットボトル水の生産や輸送には、大量のエネルギーが消費される一方で、水道水は環境負荷が圧倒的に低いことがデータで示されていました。このような事実を知ると、私たちが無意識に選んでいる行動が地球環境にどれだけ影響を与えているかを深く考えさせられました。また、グループディスカッションでは、なぜ多くの人が水道水を飲むことに抵抗を感じるのかについて話し合いました。「味が気になる」「安全性に不安がある」などの理由が挙げられましたが、これらの問題は、事実を広めていったり、地域ごとの水道水の特徴を PR したりすることで解決できる可能性があると感じました。特に、日本の水道水の高い品質をもっと広める取り組みが必要だと考えました。この授業を通じて、私たちが身近な選択から持続可能な社会に貢献できることを再認識しました。水道水を選ぶことは、環境負荷を軽減するだけでなく、日本の技術を活用する行動でもあると思います。これからは積極的に

水道水を利用し、その利点を周りの人にも伝えていきたいと感じました。

3. 身についたこと

この講義を通じて、以下の3つの点を身に付けることができました。まず1つは、持続可能性に関する知識です。SDGsの各目標が抱える課題について、具体例やデータをもとにグループでのディスカッションや、ワークなどで学ぶことで、世界が直面する問題の全体像を理解しました。特に、問題の「原因」と「解決策」を結びつける視点が強化されました。2つ目は、批判的な思考と関連性の理解についてです。講義を通じて、単純な解決策ではなく、トレードオフや関連性を考慮したアプローチの重要性を学びました。例えば、再生可能エネルギーの導入が進む一方で、土地利用やコストの課題が発生するなど、一面的な見方では問題解決に至らないことを実感しました。そして最後に、行動の具体性と日常生活への応用の仕方についてです。身近なところから始められるアクションの重要性を学びました。例えば、食品ロスを減らす、マイボトルを使う、電力の消費を抑えるなど、持続可能性に向けた小さな行動が全体に与える影響について考えられるようになりました。

4. これからどう活かすか

この講義で得た知識と考え方を、以下のような、4つの具体的な行動や目標に活かしていきたいと考えています。1つ目は、地域での啓発活動です。SDGsに関する学びを地域や大学の活動で共有し、周囲の人々とともに具体的な行動を起こします。例えば、環境イベントや食品ロス削減キャンペーンの企画など、身近なコミュニティでの取り組みを進めたいと思います。2つ目は、持続可能なキャリアを目指すことです。将来的には、環境やエネルギー分野での課題解決に貢献できる仕事に就きたいと考えています。そのために、学問的な知識を深めるだけでなく、実践的なプロジェクトやインターンシップに積極的に参加し、現場感覚を養っていきます。3つ目は、日常生活での小さな行動の積み重ねです。講義で学んだ「小さな行動が持続可能な未来につながる」という考え方を実践し、マイボトルの使用、エネルギーの効率的な利用、プラスチック削減などを日々の生活に取り入れます。これらを継続的に行うことで、自分のライフスタイルを持続可能なものに変えていきたいです。最後は、他者との協力による取り組みです。持続可能な社会を実現するには、一人ではなく多くの人々との協力が必要です。講義で学んだディスカッションや意見交換の経験を活かし、異なる視点を取り入れながら新しいアイデアを生み出していきたいと考えています。

SDGs実践講座最終レポート⑩

授業では専門の講師の方を招き、各回でSDGsの17の目標から一つずつテーマを取り上げ、現状や課題、対応策について詳しく学びました。さらに、グループで議論を行い、多様な意見を共有することで、新しい視点を得ることができました。中でも私のグループで取り上げた「ジェンダー平等」については特に印象的であり、その重要性を深く考える機会となりました。特に印象に残った授業は、日本の水道水に関する内容です。それまで「日本の水道水は安全ではない」という先入観があり、日常的に市販の水を選んでいました。しかし授業で学んだ結果、東京の水道水は非常に高い品質を保ち、市販の水と比べても遜色がないことを知りました。これは、SDGsの目標6「安全な水とトイレを世界中に」と密接に関わる内容であり、普段何気なく使っている水の安全性について深く考えるきっかけとなりました。

この気づきは、環境負荷を減らすための選択にもつながるものでした。授業を通じてSDGs全体に対する理解が深まりましたが、特に重要だと感じたのは、具体的に「自分に何ができるのか」を考え、行動に移すことの大切さです。たとえば、身近な生活で環境に優しい選択をするだけでなく、周囲と協力してより大きな影響を与える行動を取る必要があります。これを意識するようになったことで、自分の日常の選択や行動に対して責任感が生まれました。

ジェンダー平等をテーマにしたグループ活動では、特にジェンダーバイアス（性別に基づく偏見）の問題について深く考えさせられました。たとえば、女性がリーダーシップを発揮する場面が少ないことや、男性が家事や育児を担うことへの社会的偏見が、未だに根強い現状が挙げられます。このことについてのグループで議論して出たもので、特に重要だと感じたのが3つあり、一つ目が、多様な視点で物事を見ることで、日常的に意識的に異なる立場や背景を持つ人々の視点を考えることが大切であり、自分自身の中にある無意識の偏見に気づき、それを改める機会が生まれます。2つ目が、教育や意識改革の工夫で、子どもたちや若い世代に対し、ジェンダー平等の価値観を根付かせるための教育の重要性を感じました。例えば、性別にとらわれない職業選択や、生徒たちが自身の価値観を形成できるような教育環境を提供することが必要です。3つ目が、他者に左右されない意思を持つことで、自分の行動や考え方が他者に影響されるのではなく、自分の価値観に基づいた選択を行う意識を持つことが重要であり、ジェンダー平等を推進するために強い意志を持ち続ける基盤となります。

また、ジェンダー平等を推進するためには、自分一人の行動にとどまらず、周囲を巻き込むことが重要です。その具体的な手段としてグループの議論で出たものが、支援団体への参加や寄付、啓発イベントやワークショップの活用が挙げられます。まず、支援団体への参加や寄付は、ジェンダー平等を推進する活動を直接的に支える効果的な方法です。例えば、ジェンダー問題に取り組む団体が主催するセミナーやキャンペーンに参加することで、自分自身の学びを深めると同時に、社会的な影響を広げることができます。また、寄付を通じて、団体が持続的

に活動を続けられるよう支援することも重要です。こうした行動は、個人が大規模な社会課題に対して影響を与える手段の一つとなります。

次に、啓発イベントやワークショップは、特に若い世代の考え方や価値観を変える効果的な手段です。たとえば、学校や地域のコミュニティで「ジェンダー平等」をテーマにした対話型のワークショップを開催すれば、参加者が身近な課題として意識し始めるきっかけを作ることができます。このような場では、参加者が性別に基づく固定観念を再認識し、それを乗り越える方法を学ぶことができます。また、具体例やデータを活用したプレゼンテーションを行うことで、問題の現実味を感じてもらうことも効果的です。さらに、SNSやブログを活用して情報を発信することも有効で、特に若い世代はインターネット上の情報にアクセスしやすいため、日常生活の中で取り入れられるジェンダー平等に関する行動や、支援団体の取り組みを共有することで、間接的に多くの人に影響を与えることができます。

こうした積極的なアプローチを継続することで、周囲の人々がジェンダー平等の必要性を理解し、行動を変えるきっかけとなることができると考えます。これらをもとに今後は、学んだ知識を自分の日常生活や大学での行動にジェンダー平等の考え方を取り入れていきます。具体的には、ジェンダーバイアスに気づいた際には、それを指摘し、周囲と意見交換を行うことで意識を広めていきたいと考えています。

また、支援団体への寄付やイベントへの参加を通じて、より積極的に社会全体の変化に貢献する意識を持ち続けます。この授業を通じて、SDGs全体の重要性和それに向けた具体的な行動の必要性を深く学びました。特に、ジェンダー平等については個人としての意識改革と周囲を巻き込む行動が重要であると実感しました。社会全体が持続可能な未来に向かうためには、一人ひとりの小さな行動が大きな変化を生み出します。私はこの学びを基に、日常の中でできることから始め、より良い社会の実現に向けて行動を続けていきたいと思っています。

SDGs 実践講座最終レポート⑪

今回の全学総合 SDGs 講座で私がまず、最初に感じたことは、「思った以上に自分が SDGs に対しての知識を持っていないな」というものだった。ニュースや新聞などのメディアやネット上でも定期的に見かける話題なので、ある程度の知は身に着けているつもりだったが、この講座で自分の知識、認識の浅さを認識した。

心に残った授業：日本人の働き方はこれからどうなるのか 日本の労働環境について

私が最も心に残った授業は、日本の労働環境について学んだ回である。特に、人口減少がもたらす雇用の変化や労働環境の問題について深く考えさせられた。この授業では、日本の労働力人口が減少していること、それに伴い働き方が多様化しつつあること、そして新たな課題が生じていることについて学んだ。

日本の少子高齢化は、労働市場に大きな影響を与えている。企業は人手不足を補うために外国人労働者の受け入れを拡大したり、AI やロボットを活用した自動化を進めたりしている。これにより、従来の雇用のあり方が変化し、新しいスキルが求められるようになってきた。一方で、働き方改革が推進され、リモートワークやフレックスタイム制など柔軟な働き方が広がりつつある。

この授業を通じて、日本の労働環境が直面する課題の深刻さを実感すると同時に、社会が変化に適応しようとしていることを学ぶことができた。その事実は知識として知っていたが、その現実がもたらす影響の実態や規模を正しく認識していなかった。また、雇用の変化は個々人の働き方だけでなく、生活全般にも影響を及ぼすことを理解した。この気づきは、私自身の将来のキャリアを考える上でも大変参考になった。

身についたこと：環境への意識の向上

この授業を受けたことで、私は日常生活の中で環境に配慮した行動をより意識するようになった。特に、ごみの分別に関しては、以前よりも細かく分別する習慣が身についた。例えば、これまで同じ燃えるゴミでも容器の汚れた物は洗うか分ける、プラスチックごみを一括で捨てていたが、容器包装プラスチックとそれ以外を分けることでリサイクルの効率を高めることができることを学んだ。また、食品廃棄物を減らすために、買い物の際に必要な分だけを購入するように心がけるようになった。

環境に配慮した行動を取ることは、単に個人の意識の問題ではなく、社会全体で取り組むべき課題である。授業を通じて、私たち一人ひとりが日常の小さな選択を意識的に行うことで、社会全体の変化につながることを学び、あるいは実際に地域単位で環境への配慮、災害への準備などへの意識の向上を働きかけることの重要性を再認識した。実際に日ごろからの訓練によって、東日本大震災でもある学校の学生、近くの施設の高齢者の犠牲者0という結果を生むことにも成功している。

こうした学びを通じて、私は「自分一人の行動が環境に与える影響は小さいかもしれないが、多くの人が同じ意識を持てば大きな変化を生み出せる」という考えを持つようになった。

これからどう生かすか：実践と意識の広がり

この授業で得た知識と意識を、今後どのように生かしていくかを考えたとき、私はまず自分の行動をより積極的に変えていくことが重要だと感じた。例えば、ごみの分別だけでなく、使い捨てのプラスチック製品を減らすためにマイボトルやエコバッグを活用することを徹底したい。また、エネルギー消費を抑えるために、不要な電気を消す習慣をさらに意識的に行うようにしたい。

さらに、私たちのグループ発表では、「気象変動への対策」として、日常の「当たり前を徹底する」ことをテーマにした。この発表を通じて、環境への配慮の意識向上や、災害時の備えについて考えるきっかけを作ることができた。例えば、ハザードマップを活用して自宅周辺の防災対策を確認したり、災害時の備蓄を見直したりすることが、気候変動による災害リスクの軽減につながる。

この授業の学びとグループ発表を結びつけることで、私は環境問題を「自分ごと」として捉え、日常の行動をより意識的に変えていくことができると感じた。また、自分だけでなく、家族や友人にもこの意識を広げていくことで、少しずつでも社会全体の環境意識を高めることに貢献できるのではないかと考えている。

まとめ

今回の授業を通じて、日本の労働環境の変化について学ぶとともに、日常生活における環境への意識が高まった。特に、人口減少に伴う雇用の変化についての理解が深まり、今後の社会の動向に注意を払う必要性を感じた。また、環境への配慮を日常生活に取り入れることで、自分の行動が社会全体に影響を与える可能性があることを実感した。

これからは、学んだことを実践に移し、自分の生活の中で環境に優しい選択を増やしていきたい。また、周囲の人々にも環境意識を広めることで、少しでも良い未来を築くための一歩を踏み出していきたい。今回の授業の学びは、私にとって大きな気づきとなり、今後の行動を変えるきっかけとなった。

SDGs 実践講座最終レポート⑫

1. 全体の概要

本講座では、SDGs がどのようなものであるのか、を様々な学問分野から理解することが出来ました。この講座は、15 回の講義を通じて、17 個の達成目標がどのような背景で設定されたのか、また学生には何が実践できるのかを複数回の講義で学生に投げかけ、学生個人が達成目標に対してそれぞれで実践できるレベルにまで関心を広げ社会に還元する講座であると考えます。学んだ分野は環境や児童・職業などの幅広いジャンルがあり、多くの学生が触れてこなかったであろう分野も網羅的に習うことが出来る機会であったと考えます。この講座は、一つの学問に縛られることなく、多角的に物事を観る視点を養うものであったと考えています。

2. 心に残った授業回

本講座の中で特に印象に残っているのは、“うまい棒”を使った第7回目の講義でした。この回では、商品や製品を思案・製造する企業などのアイデア発想の歴史を学ぶことで、SDGs 達成目標の8番である「働きがいも 経済成長も」を意識させるための講義であったと記憶していますが、私はSDGsに限らずこの講義から得られたものはとても大きかったと感じています。他の回の講義もとても興味深いもので得られるものが多かったのですが、この回の講義は特に印象に残っています。前提として、うまい棒から考えるSDGsというものが全くピンと来ず、おそらく掴みと思われる部分でまんまと捕まってしまいました。私がこの講義から得た最大の学びは「自分だったら楽しいのか、そして楽しむためなら最後まで諦めない」ということでした。今でこそ大衆的な人気を誇るうまい棒ですが、その味の変遷はとても紆余曲折したものでした。期間限定で販売してみたり、面白そうだから売り出してみたり、廃版したりなど、今日に至るまでに様々な道を通ってきたことを学びました。今まで数々の味を世に出してきたうまい棒ですが、これが売れたら面白そう、こんな味があったらいいなを動機として製品化しているということを聞き、とてもワクワクしました。講義中にうまい棒を四等分するという時間があったのですが、私はその際に複数の味を同時に食べ、新しい味を開発しようと試みました。結果は判然としなかったものの、新しいものを生み出すことがこんなにもワクワクするものなのかとその時に初めて思いました。また、講義の中ではうまい棒を世にリリースするときに直面した様々な難題を聞くことも出来ました。しかし、それらの問題に対して、いくつかの対応を用いて解決する姿勢に、諦めないということ

学ぶことが出来ました。今の時代自分のやりたいことを実行できないことが多いと感じているのですが、うまい棒の歴史のように、簡単に諦めることはせずに、自分のワクワクの実現のために奔走しようとの回の講義を聴いて思いました。

3. 身についたこと

私は今回の講座を通して、SDGs の実践が特定の人だけが出来るような難しいことではなく、学生の自分たちでも実践できるのだと考える力を養うことが出来ました。本講座では、社会ですでに実践されている対策方法やそこに至る数多の考え方を学ぶことが出来ました。授業内で紹介されていた先生方は、その道に詳しい方々ばかりだったので、普段の生活では到底得ることが出来ない知識を学ぶことが出来ました。そして、最終発表では SDGs への取り組みを自分ゴト化し、考えを協創することが出来ました。決めたテーマに沿って解決への具体策を考えることは、チームメンバーと意見を照らし合わせる必要があったのでとても大変でしたが、ためになる物でした。この経験から、SDGs の実践が特別な誰かにしかできない難しいものではなく、自分たち学生でも出来る活動であり、また自分たちが積極的に行動していかなければならないものであるということを学びました。社会に数多くある課題は、一見難しそうなものばかりですが、小さい一歩から適切にアプローチしていくことが SDGs の達成で一番重要なことだと学ぶことが出来ました。

4. これからどう活かすか

私はこの講座で得られた学びを来年度の活動に生かそうと思います。私は来年度、大学を休学して東南アジアを拠点とし、世界について多くの学びをしてくる予定です。実践講座を受講するまでの私生活では、SDGs を意識した生活というのをあまりしてきませんでした。しかし、これからは SDGs に絡めて日常の事象に対処してみようと思いました。中でも、私が今回担当した達成目標である「⑩人や国の不平等をなくそう」のジャンルを強く意識に留めようと思いました。人や国には様々な不平等があり、それは経済や教育、ジェンダー等様々なものが対象になっています。そんな数多ある不平等に関して、まずは知識を使える段階に来年度はしていこうと思いました。東南アジアやその他諸外国における不平等は、多様なものがあると思うので、しっかりと自分の目で見て確認していきたいと思いました。もちろん危険なことをするつもりは無いのですが、地域によってどのような不平等があるのか、人種によってどのような不平等があるのか等を現地で確認したいと考えています。それらを解決するためのアプローチを実際にその時にすることはもちろんのこと、帰国してからもその場で得た学びを忘れることなく、世界がよりよくなるようにその経験・知

識をふんだんに使おうと思っています。

SDGs 実践講座最終レポート⑬

1. 全体の概要

全体の概要としては、自分はこの三年間環境問題や SDGs の授業をとっていたが、この講義特有のグループワークは SDGs をいろいろな方面から考えることを可能にしたと感じた。例えば、経済学部の人からは国際学部の私とは違う、経済の分野から SDGs の目標についての意見を聞くことができた。

また最終発表では各グループごとに異なる目標についてのスライド発表を行ったため、自分の考えていたこと以外の意見を聞くことができた。

また、グループワークを通じて、SDGs の目標の具体的な解決や、社会が持つ課題、環境問題などは私一人では解決できないということも学んだ。またグループ内でも皆、学部学年やこれまで経験してきた物や環境が一人一人異なっているのを改めて感じ、多様な視点からひとつのことについて考え、議論するだけでも新たな気づきを得ることができてとても興味深いと感じた。

2. 心に残った授業

第5回の「移民・難民と私たち；共生社会へのカギ」が一番印象に残った。私の家族は農場を経営しており、実際に外国人実習生を受け入れているため、私自身が移民・難民問題についてもともと興味があったからである。

この講義では移民・難民が発生する要因、日本での現状を学んだ。

またグループワークで難民を受け入れることに否定、肯定、難民の立場に分かれて議論を行った。

私が感じる移民・難民問題の課題点は、現在起こっている戦争や紛争、迫害や経済的理由による流入の増加と、受け入れ国側の社会的な緊張、不法移民や、移民・難民の社会的地位が主にあると感じている。まずは移民・難民の増加とそれに伴う受け入れ国側の社会的な緊張についてだが、ヨーロッパ諸国は早くから移民難民を受け入れてきたが、近年では移民と一部国民が労働に関して雇用競争の激化を引き起こしてると感じる。例えば移民が入る前に低賃金労働者として働いていたその国の一部の国民は移民が入って来たことにより、自分の仕事が奪われる可能性がある。そのため、移民に対して不満を持つことがある。ほかにも例えば社会保障や国の財政の問題だが、国が移民政策に多額の資金を投じ足り、移民にも社会保障を受けられるようにすると、国の財政や国民の不満がたまることだろう。また、文化や社会にも影響が出る。価値観や生活習慣が異なるため、地元住人との摩擦が生じることに

なる。これは日本でもおこることで、例えば私は知り合いから、同じアパートに住む外国人がゴミ出しのルールを守らないことや、騒音について不満があると相談されたことがある。また貧困や社会的孤立、排除により犯罪に関与する事例から移民の増加が治安悪化につながるという誤ったイメージが広まることになる。実際にヨーロッパ諸国では移民に対する不満から、極右政党や勢力が近年台頭している。また、移民受け入れを進めるべきか否かが政党の大切な誓約になるため、政治的な争点になることもある。また上記で書いたように右翼政党の台頭はナショナリズムや差別、移民排斥運動に発展する可能性がある。

次に移民の社会的地位に関してだが、上記のように移民の社会的地位は決して高くはないと感じる。生活様式、言語、価値観の違いから主に発展途上の地域から日本にやってきた人は低い社会的地位を強いられることになるだろう。その結果犯罪に手を染めることになるケースもあると考える。

次に日本の移民難民の課題点だが、まずは日本の難民認定率の低さ、労働力としての受け入れと、労働環境が劣悪なところでの労働、文化言語の障壁があげられる。移民認定率の低さについては様々な意見があげられると思う。

次に労働についてだが、先進国、特に韓国や日本などでは少子高齢化が重要な問題となっており、労働力の確保が重要になってくる。その点で移民は日本に利益を与えると書いていいだろう。しかし、低賃金で働かざるを得ない移民が存在していることは確かであり、それは差別に値すると感じる。

また、日本は島国であり、単一民族国家であるため、異文化理解や日本語以外の言語を話せる人は全体でみると少ないと思う。そのような特性から、言語や文化の壁が生じると私は考える。

この講義のグループワークでは日本はまだ移民を受け入れる準備が社会的に整っていないという意見にまとまった。社会的な準備が整っていないまま移民を受け入れるのは移民の立場からしても、日本国民との摩擦を生むため、長い目で見ればデメリットになるという意見があり、それに納得したし印象に残った。

3. 身についたこと

身についたことは、哲学的な思考と表面だけでなく、物事を根本原因や、多角から考える力が身についたように感じる。これは様々な学部学科の人と議論を交わすことが要因になったと感じている。

4. これからどう活かすか

これからこの講義で学んだことを社会で思う存分発揮していきたいと意気込みたいところではあるが、正直に言って私はもう少し SDGs について自分の考えをより深めたいし、まだまだ学びたいと感じている。私は SDGs の問題解決には教育の影響が大きいと感じているため、教育を受ける者として、今後の授業で積極的に自分の考えを述べたりしてゆく姿勢を目指す。また社会に出てからもこの授業で身に着けた異文化理解や環境問題への価値観などを社会や会社でも、普段の生活でも実践しようとする。

SDGs 実践講座最終レポート⑭

全体の概要

SDGs の課題をさまざまな専門の先生から学び、グループワークを通して課題の発見や解決策の提案を考えて、SDGs への理解を深めていきました。

変化の激しい現代社会において、多様な価値を理解するとともに、自己の哲学を持ち、物事の本質について論理的・体系的に深く考え、主体的に社会の課題に取り組み他者のために奮闘できる人材となるよう学びました。

心に残った授業回

【貧困をなくそう】

この授業では「絶対的貧困」と「相対的貧困」という概念を学びました。絶対的貧困は、生存に必要な最低限の資源が不足している状態を指し、発展途上国に多く見られるのに対し、相対的貧困は、その社会内で他の人々と比べて生活水準が著しく低い状態を指します。特に日本では、相対的貧困が問題となっており、その影響は教育や就労機会の格差として現れています。貧困といえば、発展途上国の課題であるイメージがありますが、日本にも貧困問題があると認識し、印象に残りました。

授業の中で、「日本政府は 2030 年までに貧困を半減できるのか？」という問いが投げかけられましたが、私はその達成は難しいと考えます。貧困は世代間で連鎖しやすく、特に母子家庭では経済的な困難を抱えるケースが多いからです。この格差を縮小するためには、最低賃金の引き上げや生活保護の拡充が必要です。また、女性が安定した職に就ける環境を整え、教育や就労支援を充実させることも重要だと感じました。

SDGs の目標 1「貧困をなくそう」では、すべての人々が基本的な生活を送れるようにすることを目指しています。そのためには、経済政策だけでなく、教育機会の均等や社会保障の充実も不可欠です。この授業を通じて、貧困の問題を単なる「経済的困窮」としてではなく、社会全体の構造的な課題として捉えることの大切さを学びました。今後は、貧困問題への関心を持ち続け、社会の仕組みを理解し、身近なところから貢献できる方法を考えていきたいと思っています。

【ジェンダー平等を実現しよう】

勝又先生の「ジェンダー平等を実現しよう」の授業では、LGBTQ+ の権利や社会のジェンダー規範について深く考えさせられました。SDGs には LGBTQ+ に関する明記がなく、世界には同性愛が犯罪とされ、死刑にまで至る国も存在していることに非常に驚きました。

授業では、私たちが「男か女か」をすぐに判断してしまうのは、社会に根付いた「男女二元論」によるものだと学びました。この考え方は、「男性／女性はこうあるべき」というジ

ジェンダー規範や、「恋愛は異性愛が当たり前」という異性愛規範につながっています。

また、日本ではLGBTQ+の割合が9.7%と推計され、これは佐藤さんと山本さんの人口を合わせた970万人より多いにもかかわらず、日常で出会う機会が少ないと感じる人が多い現状があります。その理由は、多くのLGBTQ+の人々が自分のことを公にできない環境にいるためです。さらに、男女の枠に当てはまらないことで「変人」や「迷惑」と見なされ、罪悪感から自傷行為に至るケースもあることを知り、深く考えさせられました。

この授業を通じて、性の多様性を意識し、「あえて」行動することの重要性を学びました。例えば、「彼氏」「彼女」ではなく「パートナー」や「恋人」といった言葉を使うことで、無意識に誰かを傷つけないよう配慮することができます。ジェンダー平等を実現するためには、私たち一人ひとりが意識を変え、頭の中に刷り込まれた男女二元論の考えをなくしていくために日常の言動を見直していくことが大切だと感じました。

身に着いたこと

授業を通して、日本や世界が抱える社会課題について深く学び、課題解決に向けて考える力が身につきました。心に残った授業である「貧困をなくそう」の授業では、絶対的貧困と相対的貧困の違いを理解し、日本の貧困問題が単なる経済的な問題ではなく、世代間の連鎖や社会構造に深く根付いていることを知りました。特に、母子家庭の経済的困難や格差拡大の防止策について考える中で、政策の重要性を改めて認識しました。

また、「ジェンダー平等を実現しよう」の授業では、男女二元論や異性愛規範が社会に根付いていることを学び、日常の言葉や態度に意識を向ける必要性を感じました。例えば、「彼氏」「彼女」ではなく「パートナー」といった言葉を使うことなど、小さな意識の変化が社会の理解を広げる一歩になると考えます。

これからどう活かすか

授業内のグループワークや最終発表の準備を通じて、課題解決能力や協働する力を養うことができました。今後は、SDGsに関する知識を活かし、日常生活の中でできる行動を積み重ねるとともに、社会問題に対して関心を持ち続け、発信していきたいと思います。

SDGs 実践講座最終レポート⑮

1. 全体の概要

本授業である SDGs 実践講座は以下の学習到達目標に沿って授業を行った。SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力・「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力・課題・問題を発見する力・他者と関わりチームとして成果をあげる力の4つである。この SDGs 実践講座では東洋大学で教えている先生たちや大学外部講師の専門分野と関連した SDGs でオムニバス式レクチャーを行い、30分から40分くらいのグループディスカッションを行った。これらの授業形式により SDGs 自体の理念や 17 ゴールのそれぞれの取り組みを様々な講師たちの分野のおかげで自分ごとのように考えることができたとともに、自分が行っているボランティア活動を SDGs に基づいてその課題点や問題点を理解することができるようになった。

2. 心に残った授業回

第14回

の勝又先生による LGBTQ+ についてである。私は、他にも第3回の小野先生の貧困についての講義や第5回の南野先生による難民問題など以上挙げた以外の授業回はどれも違う SDGs についての講義だったので、一つ一つ心に残っていた。その中で第14回を選んだ理由として、最も大きいのが SDGs 目標5は LGBTQ+ や男女平等についてかと思っていたが、実は男女平等の身であり、その中で LGBTQ+ が含まれていなかったことが私自身にとって大きなショックとともに今までの講座の中で心に残った授業であった。これにより、私が今までの SDGs に対しての印象が大きく変わった授業回でもある。なぜなら、私の今までの SDGs の印象が「No one will be left behind」の理念のもとに全世界中の人々のための「持続可能な目標」だったのが LGBTQ+ に含まれていないとこの回の授業で聞き「なんのために No one will be left behind の理念があるんだろう」とその SDGs 自体の矛盾について疑問に思うようになった。この授業の回で聞いた話によると、宗教的および政治的に LGBTQ+ を認めない国々があるということだ。大体中東やアフリカなどのイスラム国家や権威主義国家に多く見られ、処罰がひどい場合死刑もありうる。ここで疑問が生まれるのが、国際社会は LGBTQ+ を優先するかイスラム国家を優先するかということである。現時点では、結果的に後者の意見が強く反映されたのが今の SDGs だと私は考える。国際社会はこのままではいいのだろうか？しかし、国際社会

に目を通す前に今の日本における LGBTQ+の現状を変えなければならない
といけない。

3. 身についてたこと

この実践講座で身についてたことは様々あるが、その一つとして挙げたいのが、「とりあえず行動に移す力」をこの実践講座を通して身につけることができた。今までの授業を通して思ったのが、どの回も大きな SDGs の問題を取り扱っていて、例えば、自分ごとに考えることができたとしても「結局、学生である自分が、なにができるか」をどの回の授業が終わった後に考えてしまうのである。だがしかし、第7回の高田講師によるパートナーシップの授業を聞いたおかげで、アクションつまり、行動することの大切さをこの回で知ることができた。自分が SDGs についてのアクションを取った分他の人にインスパイアすることができ、またその人も同じように他人に影響を与えることができるのだ。つまりどういうことかということ、自分が様々な団体でアクション（企画や参加）した分色々な人と出会いそのつながりの輪を広げることにより、その SDGs 目標達成につなげることができるのだ。とりあえず行動に移してみることが、例えばどんなにも小さいことでも大きな輪（パートナーシップ）につながって、それぞれの SDGs の目標達成に貢献できるのである。結局、「主体性」なんじゃないかと突っ込まれるかもしれませんが、「主体性」だけじゃ考えてから行動しますが、私が言いたいのが、考える前から行動に移すということである。

4. これからどう活かすか

私自身、小さいころから家庭環境の影響を強く受けてこのような社会問題について興味を持った。そのおかげで、私は高校の時に学習支援ボランティアを1年間参加していた経験もあり、それを大学でも続けたいと思い、SDGs 実践講座を受ける前から「東洋大学 SDGs アンバサダー」および「東洋大学公認国際ボランティアサークル Salamat」に所属して、学生として自分ができる SDGs の貢献を日々行っている。この SDGs 実践講座の経験を活かすところがたくさんありますが、その中で受けていて思うのが、一人ひとりが SDGs の全目標を同時に貢献できないということである。つまりどういうことかということ、学生が卒業後に社会人になっても SDGs の達成を貢献していくなら学生のうちから17の目標のうちどれかを重点的にアクションを取った方がその分野の専門性が上がり、さらなる大きな貢献ができるのである。今まで授業をしてくださった先生方に専門の分野があるように、17の目標のうちどれかの専門になるのも SDGs の貢献において大切だと私は考える。それを踏まえたうえで、私は将来 SDGs 目標1の「貧困をなくそう」4「質の高い教育をみんなに」16「平

和と公正をすべての人に」 17「パートナーシップで目標を達成しよう」を中心に貢献したいと思っている。現在今まで行った SDGs の活動として「東洋大学 SDGs アンバサダー」に所属し、7月のパラスポーツの企画や9月のビーチクリーン、エコプロ、ウォータースプリングプロジェクトなど様々の SDGs 目標に貢献できた。私は他にも「東洋大学公認国際ボランティアサークル Salamat」に所属していて、去年の8月に実際フィリピンに行き SDGs 目標1「貧困をなくそう」2「飢餓をゼロに」4「質の高い教育をみんなに」11「住み続けられる街づくりを」17「パートナーシップで目標を達成しよう」を実践することができた。具体的に現地で、デイケアセンタの支援と地域の活性化、フィードバックなどを行ったのである。「Salamat」という団体自体はフィリピンの貧困の解決の手段として、学生主体でデイケアセンタの建設および支援を行っているのだ。その結果上記の SDGs に貢献および実践ができたのである。私は今後、両団体の活動を引き続き実践するとともにアンバサダーの所属チームである「ダイバーシティアンドインクルージョン」チームで東洋大学内の中で世界中の貧困や難民問題についてのワークショップを他団体共同で将来的に行いたいと思っている。私は先ほど述べたように SDGs 目標1、4、16、17を中心に貢献したいので、数年就職した後に、青年海外協力隊に参加し、イギリスのサセックス大学院で開発学の修士学位を取得した後あとに以上の SDGs に関連した国際協力に携わる仕事に就きたいと考えている。そのこれらの土台として、SDGs 実践講座があり、例え、それに矛盾があったとしても救えるあるいは貢献できる人がいる限り、実践し続けたいと考える。

SDGs 実践講座最終レポート⑩

1. 全体の概要

まず、授業全体の概要として、「SDGs (Sustainable Developmental Goals)」とは、2015 年 9 月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でより良い世界を目指す、17 項からなる国際目標のことであり、本講義の目的は、この SDGs について、その理念と各ゴールに対する具体的な取り組みを体系的に学ぶことであることである。さらに、この学びを「自分ごと」として理解し、「自らの行動や選択を学生生活の中で具体的に变化させて行く」ことで、在学中、あるいは卒業後に国内外の社会で活躍できる人材に成長することを目指すという概要である。またこの授業で私たち受講生に、SDGs の理念と具体的な取り組みを「自分ごと」として理解する力、「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力、課題・問題を発見する力、他者と関わりチームとして成果をあげる力を獲得することを期待されているという学修到達目標があり、15 回の授業を通して意識して授業を聞いてきました。

2. 心に残った授業回

私が講義を受けてこの心に残った授業は第 15 回の移民・難民と私たち:共生社会へのカギという授業です。この授業では、移民・難民について学び、グループワークを通じて多様な意見を議論しました。特に、難民の受け入れに関する賛成・反対・当事者の視点から考える活動を行い、さまざまな立場の意見を理解することの重要性を実感しました。授業内では、「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるかあるいは迫害を受けるおそれがあるために他国に逃れた」人々のことを難民と定義していることを学びました。授業の中でも、グループワークで①難民を受け入れるべきだと思う人、②難民の受け入れを制限するべきだと思う人、③難民のそれぞれ 3 つの立場に分かれて、主張し合う活動が印象に残りました。①の人達は受け入れることで、国際社会からの言頼を得ることができる、労働の人手不足を解消することができるなどメリットがあるという主張でした。②の人達は、受け入れることで、難民の人たちの支援のために税金などを使うため、金銭面問題で日本国民の不満を起してしまうこと、文化の違いから起こるカルチャーショックが起こるなどの、受け入れることでのデメリットがあるという主張で、③の人たちは、自分達の人権や命を守って欲しいという主張でした。それぞれの意見全てが尊重するべきものだったので、受けて入れるべき

か否かを判断するのはとても難しかったです。

3. 身についてしたこと

私がこの講義を通して身につけたことは3つあります。

一つ目は、多角的に物事を考える姿勢です。心に残った授業回で話した難民について意見が異なる立場に分かれて討論をしたことで、ひとつの問題でも、立場によって見方が大きく異なることを理解することができました。受け入れる側・受け入れられる側、賛成・反対、それぞれの事情や価値観を知ることによりバランスの取れた考え方ができるようになると感じることができました。二つ目は、共存のための相互理解をしようとする姿勢です。ただ受け入れる・受け入れないという議論ではなく、どうすれば共存できるのかを考えることが大切だと気づきました。そのためには、異文化理解や相互理解の姿勢を持つことが不可欠であると思いました。

三つ目は、答えの無い問題こそ、考え続けようとする態度です。今までの講義の中で、難民やジェンダーのような、さまざまな立場があり、それぞれが自分の考えを持っていて、答えを一つに絞るのが難しいテーマがありました。しかし、それで考えるのを諦めるのではなく、お互いが理解するためにも一人ひとりが考え続け、より良い方向へ進むための議論を続けることが重要だと感じることができました。

4. これからどう活かすか

私が身につけた一つ目の多角的に物事を考える姿勢を活かすためには、ジェンダーや難民の問題だけではなく、社会のあらゆる課題にはさまざまな立場や意見があると思うので、一つの意見に偏るのではなく、異なる視点を理解しようとする姿勢を持ち続けたいと思いました。例えば、ニュースや社会問題について議論する際にも、賛否両論を考えながら意見を持つようにしたいです。

二つ目の共存の相互理解への理解を活かすためには、異文化に触れる機会に参加したいと思いました。具体的には、多文化交流イベントに参加したり、外国の人と交流する機会を大切にしたりすることで、実際に異なる文化や価値観を学び、相手の文化に寄り添えるようになりたいと思いました。

三つ目の答えの無い問題を考える続ける姿勢を活かすためには、これから生きていく中で、何か問題があったとき、「これが正解」と決めつけずに、常に新しい情報を得ながら考え続けることが必要だと思いました。今後も、授業や日々の生活の中で、多様な意見に触れながら、自分なりの考えを深めていきたいと思いました。

SDGs 実践講座最終レポート⑰

1. 全体の概要

『「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力』これは本講義の学修到達目標の中で、特に私が大切だと考える能力である。それを身に付けられる環境が整っている講義が本講義だと思う。全 15 回行った講義それぞれに SDGs についての深い学びがある。それを小レポートにまとめて自分の考えをつづる機会が毎回あったり、ゴールを定めたグループでの最終発表の機会があったりなど、考えをアウトプットすることが多かったため、SDGs の問題に対して主体的に自分の考えを持てるようになり、そのうえで「自分ごと」として捉え日常の行動に移すことができた。私は全講義を総じて、学修到達目標を達成できたのではないかと思う。

2. 心に残った授業回

第 11 回 「水道水を考える」

この講義では、身近な環境問題について改めて考えるきっかけになった講義だったため、心に残っている。自分がショックを受けたのが、「日本は世界的に見て水道水をそのまま飲める国であり、特に東京の浄水処理施設はとても高度で、自分がいつも使っている水道水は意外ときれいでおいしい」ということであった。なぜショックだったのかというと、今まで自分は環境問題について考えていたにもかかわらず、ペットボトルの購入を減らすひとつの対策として、家の水道水を飲むという簡単な方法を初めて知ってしまったからである。今までは東京の水道水に対して少し抵抗があり、心理的な不安が生じていた。が、この講義で世界と比べて東京は特においしいと知り、実際に今も飲んでいておいしいと感じているため、不安がなくなった。そのため、いつも買っていたペットボトルの量を減らすためにも、それが積み重なって起こる環境問題を自分ごととして考え、積極的に水道水を飲んでいこうと思う。その小さな積み重ねが長期的に見てよい行動につながると信じています。

3. 身についたこと

私にとって身についたことが 2 つある。1 つ目は、概要でも述べたように、『「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力』である。印象に残った授業回の項目でも述べたが、現状の水道水をそのまま飲まないことからつながるプラスチック問題を解決すべく直視し、世界的な規模の環境問題を「自分ごと」としてとらえ、日々の生活を変えることがで

きた。また、私たちの最終発表のテーマが気候変動についてであったため、環境問題への関心が高まり、環境マネジメントという秋学期開講の講義を集中して受けるといった行動につなげ、世界で行われている環境問題への取り組みについて学び、それについての自分の考えを深めることができた。2つ目は、こちらでも学修到達目標にある、「他者と関わりチームとして成果をあげる力」である。途中から、取り組む目標ごとにチームが分かれ、グループワークや最終発表のテーマや内容について話し合う機会が多くあった。私たちのチームは其中で、皆の意見を否定せず尊重し、それぞれが好きなように意見を発言出来る場づくりをすることができたと思う。そのため、SDGs に対しての様々な面白い意見や価値観を聞くことができ、価値観を吸収して自分も考えを深めることができた。また、最終発表に向かってチームの皆と協力し、良い発表ができたという成果を上げることもできた。私たちは「気候変動に対しての緩和策と適応策」というテーマで発表をしましたが、メンバーそれぞれが「どうやらみんなに温暖化対策をしてくれるのだろうか」という想いを強く持って意見を自由に出し合い、最終的には緩和策と適応策のそれぞれにおいて個人単位初歩的にできるような取り組みを考えることができた。これらの「自分ごととして考える力」と「チームと協力して何かを遂行する力」は、これからの大学生活の様々な活動で活かせる大切な力だと考える。

4. これからどう活かすか

さて、先に述べたように、この講義では2つの力が特に身についた。それをこれからどこでどのように活かしていくか。まずは日ごろの授業で「自分ごととして考える力」を活かしたい。私は国際学部であり、国際的な規模の知識を幅広く学ぶ。だからこそ規模が大きすぎて自分ごとのようにとらえることが難しい。実際私も、例を挙げるとすると、この講義で気候変動の内容を考えるまでは、環境マネジメントの授業の環境問題などに対してかなり消極的であった。しかしSDGsの目標13、「気候変動に具体的な方策を」について考えることで、温暖化に個人個人の日常生活が影響を与えていると考え、自分ごととして考えるようになり授業に積極的に参加するようになった。このように、自分ごととして考えづらい内容の授業でも、日常生活に少しでも結びつけることで考えが深まり行動も変わってくるだろう。このような経験を活かし、様々な授業の内容に対して自分の生活や価値観を結びつけて考えるという、自分からの視点、そして幅広い視点を持って学び、国際学部の様々な領域に対して関心の幅も広めていきたい。

また、私は国際的なサークル、「Salamat」というところに所属しており、2月14日からフィリピンに渡航し、チームと協働して活動することになっている。

そこでは「チームと協力して何かを遂行する力」を活かしたい。本講義では、皆の柔軟な意見を言いやすいような場づくりをすることの大切さや、皆で最後までやりきることの楽しさを感じた。これらを大切に、チームで協力し合いたい。そして、フィリピンという日本とは違う国に行くことを通じて、大きな刺激になり、考えることも多いと思う。そのような中でフィリピンの問題や実際に肌で感じたことを受け止めて、「自分ができることは何だろう」という問いを持ち続けていきたい。そのためにはやはり本講義で身に付けた、『「自分ごと」として理解したことを、主体的な行動として行動変容につなげる力』がたいせつになるだろう。

このように、これからの行動に対する学ぶ姿勢を得られた講義であった。実証するためにも学んだことを自分の血肉として活動していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート⑱

1. 全体の概要

この授業では、全体を通して様々な課題について学部、学年問わず議論を行い考えることができた。SDGs のゴールにピンポイントに的を当てたものだけではなく、それを含むものや間接的な課題等も議論の対象となり、SDGs のゴールというものを多角的に考えることができた。例えば、「貧困をなくそう」では、様々な技術が発展し各国の結びつきが強化されているのにも関わらずコロナ禍を機に再度貧困者が増えていること、これに対しマイクロファイナンスによる貧困対策がなされていることを学んだ。また、ジェンダー平等の講義では実際にトランスジェンダーであるゲストのお話を伺ったことで課題を身近に感じる事ができた。授業にて行ったディスカッションでは、1 人では思いつかなかった考えや解決策、取り組みを聞くことができ私自身の考えを深め、視野を広げることができた。

2. 心に残った授業回

第 2 回

授業の中で私の心に残ったのは、2 回目の「世界がもし 100 人の村だったら」である。2008 年に刊行されたため細かい数値の増減はあろうとも、当時の 67 億人という膨大な人数を 100 人という人数に減らし様々な分野の割合を端的に示したものが衝撃的であった。もちろん、この詩が衝撃的であったことも理由の一つであるがここに書かれた割合が社会問題を提起しているようであり印象的であった。前半部分では、性別や宗教や、言語について書かれてあり、

いろいろな人がいるこの村では、
あなたとは違う人を理解すること、
相手があるがままに受け入れること、
そしてなによりそういうことを知ることが
とても大切です。(『世界がもし 100 人の村だったら 総編集』 池田香
代子+マガジンハウス編 2008 年)

とまとめられている。現代でも無くなることのない潜在的差別意識はこの一文に込められているものを理解することで無くすことができるのではないかと感じた。趣味嗜好の異なるたくさんの人々がいることを知るそして相手に知って

もらうという簡単なことだけで他を尊重することができるはずである。また、後半では資産や教育などの生活水準が比較されていた。そして、ほとんどで「あなたはほかの何人より恵まれています。」に当てはまり自分の生活のありがたみを感じるとともにたくさんの社会問題を再確認した。

3. 身についてしたこと

最終的にこの授業で私が身に着けることができたのは、「分析力」と「統率力」であると感じる。授業では、問題に対しての解決策を議論することが毎回であった。もちろんこの際に自身の意見が求められ、さらに他者の意見も取り入れる必要があった。これを繰り返したことで、他者の考えはどこから発生し私の考えは何を根拠にしているのかを自分なりに分析することができた。また、課題の根本的な原因を考えることで効果的な解決策を導くことができるようになったため、分析力が身に着いたといえるだろう。加えて、最終グループ発表にて統率力を身につけられたと感じる。第2回の授業で世界人口の約1パーセントのみが大学の教育を受けることができていることに衝撃を受け、「質の高い教育をみんなに」を発表のテーマに選んだ。しかし、私たちのグループではオンラインでの意見交換が思うようにいかずグループ発表の準備をスムーズに行うことができなかった。そこで私は、対面授業の際に積極的に質問を投げかけることでそれぞれの意見を引き出し、引き出したそれぞれの意見と考えをもとに発表のテーマや流れ、各々が担当する内容を決めた。また、ミャンマー出身の留学生という私たち日本の学生とはバックグラウンドが大きく異なる学生とのコミュニケーションを積極的にとることでより異なった視点からテーマについて考えることができた。上級生に任せてしまうということなく積極的に発表に向け取り組んだことで、結果的に統率力を身に着けることにつながったと感じる。

4. これからどう活かすか

この授業にて得た SDGs や社会問題の知識と身に着けることのできた分析力、統率力を社会問題の解決のために活かしていきたいと考えている。大学生はたくさんの時間と機会に恵まれている。しかし、有限であるこの時間と機会をどう使うかはそれぞれに委ねられているため、これを有効活用できるように得たものを活かしていきたいと考えている。例えば、ボランティア活動への参加である。この授業によって様々な社会問題を知ることができた。グループ発表でテーマとした「質の高い教育をみんなに」では、学習支援ボランティア活動が行われていた。他にも、子供の貧困問題では子ども食堂でのボランティア活動などそれぞれの問題でボランティア活動が行われている。私が知ることの

できた様々な問題に対して行っているボランティア活動に参加することで問題解決へ共に向かうことができ、問題を身近に感じ考えることができる。さらに、問題を身近に感じることで周囲へ再提起する原動力となり問題自体の社会認知度を上げることに貢献でき、より問題解決へと近づくことができるのではないだろうか。また、分析力、統率力も問題解決に活かせるだろう。分析力によって問題の本質を理解し本質から問題解決に取り組むことができる。そして、本質的に考えた問題解決方法をアクションにつなげるため統率力を用いて自身が中心となりボランティア活動を実行するなどして活かすことができる。この授業にて SDGs や様々な問題について深く知ることができ、ディスカッションによって分析力を、グループ発表にて統率力を得ることができた。残り3年間ある大学生活の中でこれらを活かし、SDGs をはじめとした問題の解決への第一歩を踏み出せるよう充実させていきたい。

(参考文献)

『世界がもし 100 人の村だったら 総編集』 池田香代子+マガジンハウス
2008 年

SDGs 実践講座最終レポート⑩

この授業全体を通して感じたことは、SDGs の目標は各目標が独立しているのではなく、それぞれが関係しており私たちの生活にも影響があるものであるということが分かった。私は第14回の「トランスジェンダーから見える世界と共生」の授業が心に残っている。SDGs のジェンダー平等の中には LGBTQ+ の表記がないことに衝撃を受けたからだ。今日本でもジェンダーに関する法案が見直されていたり、性に対して寛容になろうとしたりする動きがみられているためそのような変革も SDGs の目標に向かっていていると思っていた。しかし世界には宗教的理由や地域によって同性愛を禁忌としているため世界で目指す SDGs の目標として取り上げられていないということだ。この授業で SDGs に取り上げられていない問題も数多く存在しそれらの解決に向けても行動しなければいけないということを知れた。性に関することで第5回の「移民・難民と私たち：共生社会へのカギ」の授業のなかで日本人が性的マイノリティということでカナダに難民申請をした事例を聞いて日本人も難民として指定されることがあることに驚いた。日本は先進国であり表面上ではあまり不自由がなさそうなイメージだったが実際には難民と認定されるような日本人がいたり相対的貧困層の人が苦しんでいたり課題が多く残っていること気づくことができた。さらに、環境面に関する SDGs 目標においては日本を含む先進国のほうがスコアが低いので目標を掲げているからにはどの目標も解決に向けて私たちが動かないといけないと思った。もう一心に残ったのは第13回の「ポーランドにおける原発計画と市民意識」の授業回である。市川先生が SDGs は理想主義的で実際に紛争が起こっている地域では SDGs を気にかけている場合ではない人たちがいるとお話しされていたことが印象に残っている。この講義は SDGs の目標について考え行動に移すステップとなる講義だと認識しているが、その SDGs 自体が先進国的な目線であって当事者の目線に立って考えられているか当事者意識の重要性を知る機会になった。また、先生はポーランドは戦争をしている国の隣国という点に注目し、日本も戦争国の隣国となる可能性を秘めているためポーランドにフォーカスを当てているとおっしゃっていた。たくさんある国の中のたかが一外国として考えるのではなく日本も同じような状況になるかもしれないことを考慮し関連づけて物事を捉えるのでは見えてくる世界は全く違うものになると思うので実際の状況や当事者と同じ目線に立って考え、先を見据えることはやはり大切だと気づかされた。

私はこの授業を通して SDGs 関連の内容以外にもいろんな分野のニュースや出来事に興味を持つようになった。一見 SDGs に関連してなさそうに見えても繋がっていたり、知識

を持つことが自分が思考し行動するときの材料になることに気づいた。SDGs 講座を受ける前はあまり自分の趣味以外のものに興味を向けていなかったが、グループワークで周りの学生が知っているニュースや自身の体験談をもとにグループワークを進めて、話し合う中で自分がいかに知識がなく行動にも移せていないことに気づいた。そのため自分から情報を取りに行く姿勢の重要性を実感にそれを身に着けることができた。知識や経験の多さはこれから自分を助けてくれる存在であると思うし、それらの情報をもとに SDGs 目標の解決の為に現実的で効果的な案を出すことに活かせるのではない方思う。そして、この授業を活かすために自分なりの SDGs 目標解決のためのアプローチをすることがポイントだと思った。各先生方、各講義の内容は十人十色でオリジナルだったように SDGs 目標解決の方法も様々であることが分かった。私は所属学部が国際文化コミュニケーション学科なので実際に問題がある地域に行きその現状を身をもって体験しその現状を発信する橋渡しの役割ができるのではないかと思った。現地の人とコミュニケーションを取ることと成果のある問題解決方法を実施できるのではないかと考える。授業を通して身についたいろんな分野に関心を持つという点でこの関心をよりボランティアなどの行動に移して活かしていくことで周囲にも小さな影響を与えられると思う。また、この授業で行われるグループワークを通してグループワークでの話の聞き方、発言、相手へのリアクションの仕方、短時間でグループの意見をまとめるコツが身についたように感じる。この講座の前までは発言をするタイミングがつかめず意見を言わないことが多々あったが、意見を言わないことはグループにとっても討論を深めることができないためマイナスになり、グループの意見をまとめる際に困るということを実感した。そして会話に入ることによって相手にリアクションをしたり意見が言いやすくなることが分かった。グループワークはこれから大学でも社会に出ても行われるものであり、SDGs の目標を解決するために話し合う場面でも必要となるスキルだと思うので、発言することを恐れず、会話の中に入っていくことでより互いに有意義なグループワークとなるように授業で身につけたコツを活用していきたい。

SDGs 実践講座最終レポート②①

1. 全体の概要

全体の概要としては SDG s の様々な問題に対して考える授業でした。第一回から 15 回まででいろいろな内容の問題を学びました。私たちの身近に潜む SDG s 問題や、世界規模の問題まで様々でした。主に問題提起からはじまり解決策や自分の今後の行動などをグループの人と話し合うといった授業形式でした。私たちのグループは「人や国の不平等をなくそう」という案について理解を深めました。様々な意見が交わされ私のなかの価値観や知識に大きな変化がありました。以下私が学んだ SDG s の概要について述べます。

SDG s は 2015 年に国連で採用された国際的な持続可能な目標で、貧困や飢餓の解消、気候変動対策、ジェンダーの平等など、17 のゴールと 169 のターゲットで構成されるものです。経済、社会、環境のバランスを取りながら持続的な社会を実現することを目標にしている、国や企業だけでなく、渡したと個人個人にできることもたくさんあります。

2. 心に残った授業回

私が一番心に残った授業回は第 14 回授業のジェンダーに関する問題です。講師の勝又栄政さんは東洋大学の出身ということもあり親近感を持ちました。興銀おなかで印象に残ったのはジェンダーが 4 つの要素から決定されるものであるというじぶんにとっては新しい考え方です。僕自身、自分の性について考えたことが事あまりありませんでした。14 回の講義を聞いてから性自任、振る舞い、恋愛対象などでいくつものパターンでジェンダーが分けられるという大事な視点を持つことができました。というのも僕は生まれてからずっと男性として育てられてきましたしそれについて疑問を持ったことがありませんでした。LGBTQ+ の方々は人口の 10 パーセントいるという話を聞いて自分の視野の狭さを感じました。自身の性自任に対して違和感を持ち、それを公言できない人が多いです。社会全体で改善して日本だけではなく世界全体で生きづらさを感じることはないようになればいいなと思いました。私にできることもたくさんあるので「自分は関係ないから」といって何も行動しないのではなく、全体の力になりたいと強く思いました。

3. 身についたこと

SDGs に関する講義を受講し、私は持続可能な社会の実現に向けた課題や取り組みについて、より深く理解することができました。これまで SDGs という言葉は知っていましたが、具体的な内容については漠然とした認識しか持っていませんでした。しかし、講義を通じて、SDGs が単なる理想ではなく、社会のさ

さまざまな分野で具体的な取り組みが進められていることを学びました。

特に印象に残ったのは、技術革新が SDGs 達成に果たす役割の大きさです。私は機械工学を学んでいるため、環境問題やエネルギー問題に対してどのように技術が貢献できるのかを考えるきっかけになりました。例えば、再生可能エネルギーの利用拡大や、省エネルギー技術の開発は、気候変動対策や持続可能な産業の発展に大きく寄与します。また、近年注目されているカーボンニュートラルの実現には、新たな製造プロセスや材料技術の開発が欠かせません。これらの技術が、私たちの暮らしや経済の発展と環境保全を両立させる鍵となることを学びました。さらに、SDGs の課題は国や企業だけでなく、一人ひとりの意識や行動によっても大きく変わることを実感しました。例えば、日常生活の中でエネルギー消費を抑えることや、環境負荷の少ない製品を選択することも、SDGs の目標達成につながります。私はこれまで、自分一人の行動が社会に与える影響をあまり意識していませんでしたが、小さな積み重ねが大きな変化につながることを学び、これからは自分にできることを少しずつ実践していきたいと考えています。

今回の講義を通じて、SDGs は自分の将来のキャリアとも深く関わる重要なテーマであることを改めて認識しました。機械工学の知識を活かし、持続可能な社会の実現に貢献できる技術者を目指したいと考えています。

4. これからどう活かすか

私は機械工学を学んでいる立場からでいうと、特にゴール7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」やゴール9の「産業と技術革新の基盤を作ろう」に関心を持っています。近年、再生可能エネルギーの導入が進んでいますが、エネルギー効率の向上や新たな技術の開発も必要です。また、持続可能なインフラの設備やスマート技術などの導入も社会全体の発展に大きくつながると考えています。一方で、SDGs は理想的な目標ではありますが、すべての目標を同時に解決する難しさも実感しています。経済成長を求める一方で環境に負荷をかけることを減らすのは困難であり、国や地域に迫って優先すべき課題も異なります。ここで私にできることは、将来技術者になる身としてこうした課題にどのように貢献できるかを考えることです。これは学びの大きな動機にもなっています。SDGs を意識しながら将来の社会のために役立つ技術を学び、開発していけばいいなと思っています。また、身近であり即効性がある課題に対しても行動を移すことができます。たとえばマイバック、マイボトルを持ち歩くことや、プラスチックや缶瓶の分別、節電節水など簡単に環境に対して貢献することもできます。このようなことも実践していきつつ、これからもSDGsに対する学びを深めていきたいです。

SDGs 実践講座最終レポート②①

1.全体の概要

今学期は授業内容を通じて SDGs に関する内容と関連知識をたくさん学んだ。私たちは授業ごとに異なる SDGs の目標を学ぶことができる。授業中にグループディスカッションの授業形式を通じて、私は多くの友人を認識した。同じ東洋大学の学生であっても、キャンパスと専攻が異なるため、お互いを理解し、交流する機会がない可能性がある。グループディスカッションを通じて、同じ問題に対して異なる人が異なる考えと理解があることも発見した。先生から知識を学んだだけでなく、皆さんの異なる考えを通じて多くの新しい内容を学んだ。とても面白いと思う。

同時に、最後の分子発表でチームワークの重要性を悟った。みんなの考えが違うからこそ、発表が順調に進んだ。私も先生の授業に対する情熱を感じた。私は毎回の授業はオンライン授業の形でしかできませんが、対面の交流でなくても、先生たちの真面目な責任感を感じることができる。

今学期、SDGs に関する知識を学ぶことで、グローバル意識を高め、視野を広げた。社会的責任感と個人的な行動力も育成し、持続可能な発展は世界中のすべての人の共通の使命であることを悟った。これからの勉強では、私は常に持続可能な発展の過程に注目し、自分から SDGs のために個人的な努力をする。

2.心に残った授業回

第 14 回

今学期、私が最も印象深い授業内容は第十四回ジェンダー平等に関する話題である。ジェンダー平等という問題はここ数年ずっと話題になっている。

ここ数年、女性は社会で頻繁に不公平な扱いを受けているからである。例えば、職場で同じ職位の男性の合格率が女性より高いことと、男女の収入が不平等である。男性の視点では、女性的な男性に対する無礼などの問題もある。女性として、私自身もこの話題にとっても興味があり、たくさんの考えがある。実は社会の進歩に伴い、人々は男女の性格、行動の定義が以前ほど明確ではなくなった。女の子が美しいと表現し、きれいな形容詞は男の子を表すのにも使える。男の子のカッコよさ、有能などの形容詞も女の子を表すことができる。男女のスタイルが多様化し、人々はこの多様化に対しても受け入れ、支持する態度を維持している。

なぜこのような現状なのか社会の進歩に伴い、映画やテレビ作品、書籍類のガイド、人々の認識の変化により、男女に対する人々の理解もより多様化した。しかし、職場で女性が不当な扱いを受ける理由もたくさんある。その中で最も明白な理由は、一部の企業リーダーは、女性の仕事能力が男性ほど強くなく、思考も男性ほど活発ではないと考えており、女性は結婚した後、家庭をより重視し、職場生活を見捨てる可能性が高い。確かにこ

のような状況が発生する可能性があります。すべての女性の仕事能力を否定することはできないと思う。仕事能力については、実は人によって能力が違う。性別から人の能力の良し悪しを判断するのではなく、個人から判断すべきだ。

しかし、多様性を過度に追求すると、過激な思想も生まれる。例えば、現在も徐々に一部の女性集団が男性を嫌悪し、男性を極度に排斥し、しばしばインターネットで過激な男性嫌悪の見解を発表し、既存の男性主導構造を覆すことを主張している。男女平等という話題に対して、私たちは単に一方の立場を支持したり反対したりするのではなく、具体的な不公平な問題に対して分析すべきだ。どんな話題でも、異なる観点を包容し、合理的な議論と思考を通じて変革を行い、極端な方法で問題を解決するのではない。そして、自分の意見を適切に発表し、過激な発言をせず、他人が自分の見解を提示するときに盲目的に反対せず、他人の発言を適切に聞き、自分の観点について考えなければならない。

私たちも自分から出発しなければならないと思う。個人的には、男女を問わず、偏見なくすべての人に接しなければならない。男女の性別に関する話題を提起して、みんなで議論に参加し、異なる考えを交換することもできると思う。今後、より多くの人々が平等に関する話題に注目し、議論することを願う。また、より多くの人々が男女平等という話題に参加した後、以前発生した不公平な事件が徐々に減少し、私たちの社会環境が比較的公平な社会になることを願っている。

3.身についてたこと

SDGs を勉強した後、グローバル問題の緊急性に気づき、世の中にはまだ解決されていない問題がたくさんあることを深く実感した。SDGs は企業と国家の責任だけでなく、私たちの個人的な責任と行動も必要である。個人の力は微々たるものですが、一人一人が行動すれば、グローバル変革も推進できる。

4.これからどう活かすか

SDGs を勉強した後、私は生活の些細なことから始めて、良い、持続可能な生活習慣を身につけるつもりである。例えば、不要な電力、水資源などの消費を減らし、できるだけ資源の再利用を行う。生活用品を選ぶ時、できるだけリサイクル可能、再利用可能な物品を優先的に選択し、ゴミ袋などの使い捨て物品の使用を減らし、環境保護を最大化する。外出に関しては、炭素排出量を減らすために、公共交通機関を優先的に選択する。私も積極的に家族に自家用車の利用を控えるように促し、環境保護を行う。実は私の父はボランティアサービスによく参加する。私もこれからも困っている人を助けるためにボランティアサービスに頻繁に参加する。留守の子供、孤寡老人などを助ける。先ほど述べたジェンダー平等の問題について、私も異なる性別の平等な権利を尊重し、支持する。私も家族に私と持続可能な開発の問題に注目するよう促す。

そしてこれからも SDGs の発展に引き続き注目し、関連情報を積極的に宣伝する。

SDGs 実践講座最終レポート②

1. 全体の概要

今学期の授業は私に多くのことを学びました。私もともと SDGs に対する私の印象は、環境保護、資源開発などの一般的な分野にとどまっています。しかし、今学期の勉強を経て、私はこの各分野を含むプロジェクトについてより深いレベルの理解を得ました。SDGs の意味は持続可能な開発目標です、このプロジェクトは 2015 年に国連が合意した 17 個の目標で構成されています。この 17 の目標はそれぞれ貧困撲滅、飢餓の終焉、健康と福祉、質の高い教育、ジェンダー平等、クリーンな水と衛生、手頃な価格のクリーンエネルギー、働きがいと経済成長、産業・イノベーション基盤の構築、不平等の削減、持続可能な都市とコミュニティ、責任ある消費と生産、気候変動対策、海洋資源の保全、陸上生態系の保護、平和と公正な社会、そしてパートナーシップです。この工程の計画は、2030 年に全世界の人類が一緒に努力してこれらの目標を達成し、社会の進歩を導き、持続可能な社会を築くことです。

2. 心に残った授業回は第 14 回

この 17 の目標の中で一番印象深いのはジェンダー平等です。今学期の授業では、ジェンダーに関する授業が私の興味を引きました。なぜなら、現在の社会では、男女の差、LGBTQ などの性別の違いに関する論争が続いているからです。この授業では、先生の説明で、私たちはこの社会に確かに私たちと性的指向の選択が異なる人々が存在し、lgbtq という少数集団をさらに理解しました。同時にこれも私の思考を引き起こした。現代社会では、かわいくてかっこいいという言葉は、女の子や男の子だけを表現することだけに固定されていません。現在、ジェンダー平等という問題に注目する人が増えています。このような思想の普及に伴い、LGBTQ などの少数派も徐々に大衆に知られ始めています。現代社会はすでに寛容だと考える人もいますが、これらは表面的な現象に過ぎません。目に見えない差別が徐々に露呈し始めました。まず、今日の社会における LGBTQ の人々の現状です。前述したように、今日の社会ではこのようなマイノリティグループを受け入れることができる人々がいる一方で、このタイプのグループを嫌う人々もいます。現在、インターネット技術は非常に進歩しており、LGBTQ の人気により、多くのネットセレブが性的指向を誇張して流行させようとしています。この種の中傷は、本物の LGBTQ の人々が自分たちの存在を世間に紹介する勇気を妨げます。表面的な歓迎や受け入れは、裏では際限なく差別される可能性があります。それからは、男女間の不平等についてですが、例えば公共の場に妊婦専用の席が設けられているなど、今の社会は女性にとってメリットが多いと思っている人もいます。しかし、専用席と言ってもこの席に座っているのは通常妊婦ではなく、男性の方が多いです。もう一つの例は、日本の現在の職場では、多くの役職で女性が不快な制服と

ハイヒールの着用を求められているということです。女性が仕事に応募する場合、一部の職位人を募集する時は女性に対する扱いが異なることが考えられます。その理由として、女性のリーダーシップスキルや論理的思考スキルが男性ほど優れていないことが挙げられます。

3. 身についてたこと

現在の社会にはまだ様々な不平等が存在することを再認識した後、私は伝統思想の檻を破る機能を身につけました。現在、大衆は LGBTQ の人々に対しても男女に対しても一定の固定観念を持っています。LGBTQ の人々はしばしば奇妙な異類とみなされたり、一種の精神疾患とみなされます。これは伝統的な思想がまだ破られていないため、人々は自分が信じたいことだけを信じ、その理由を調査しません。また、男女の違いの問題について言えば、現在、日本の理工科の学生の中で女子の割合は非常に少なく、多くの人は理工科は女子が学ぶべき専攻ではなく、女子は文学、歴史などの文科を学ぶべきだと考えています。このような伝統的な観念の下で、女子の選択範囲は何度も短縮されています。しかし、この世には女の子らしい男らしいものを規定する人はいないです。論理的思考能力と性別は関係なく、後天的な育成と大きな関係があります。現在、伝統的に女性の論理的思考能力が男性より劣っているという固定観念の大部分は、専門的な選択から始まったと考えています。理工科の勉強は脳の論理的思考を試すが、現在の男女学生の割合では、短期間で女性を男性と平等なスタートラインに戻すことは実は難しいです。しかし、その後の職場で女性のリーダーの論理能力が男性より劣っていると思われるより、最初から女性と男性を平等に育成し、伝統的な観念を破り、女性が理工科専攻に進学するように促したほうがいいです。そうすれば、人材が埋もれず、未来の社会発展がよりバランスよくなります。

4. これからどう活かすか

私たちは過去に受けた不公平を変えることはできません。重要なのは私たちがこれからどう生かすか。私たちは今使える情報技術を使って、できる限り大衆に LGBTQ 集団とは何かを普及させ、より多くの人に善意の目で彼らを見てもらうことができます。私たちは大学生の身分を利用して後輩たちに助け、専攻選択の指導を提供し、彼らが専攻の男女の限界を打破するのを手伝うこともできます。彼らの特技と長所に基づいて、合理的に専攻を選択することです。

SDGs 実践講座最終レポート②③

・全体の概要

総合 IIIB/全学総合 J(SDGs 講座 - 17 ゴールへの第一歩 -)の授業は、SDGs の 16 項目を掘り下げて考え、そこから出てくる課題をグループワークという形式で、自分たちなりの考えを抽出して、それをまとめたものを発表していくという授業であったと考えます。また、自分はこの授業を取る前は SDGs に対して無関心であったため、ほぼほぼ知らない状態で、少し知っていた教育の部分のグループに入っていたのですが、今回の授業を通して、他の項目も大切であることがわかったのですが、教育の部分は特に自分自身が何か出来るのではないかと考えることができたという点で、SDGs の全体像としての大切さと項目別の大切さを学べる授業なのであったと考えました。

また、グループワークを行うことによって世界の様々な場所で起こっている分野を自分自身に置き換えて考えていく必要があり、この授業を通して、世界の問題を自分自身に置き換えて考えて行くことができたことによって解決策を自分事として考えることが出来たので非常に考えが深まったと思います。また他の人の意見を聞くことで自分にはなかった発想があったことで考え方の幅が広がっていたなと思います。例えば僕は格差について考える時毎日本対世界の構図で考えていたのですが、グループの方から地方対都市部という考え方を聞いた時に自分自身には絶対に無い考え方であったのでこの意見を聞いた時に自分の考え方の幅の狭さと他の人の意見を聞くことの大切さを学ぶことが出来ました。

・心に残った授業回

自分が心に残った授業回は、大学生時代 12 回の久米教授の授業である。

この授業内容は、日本人の働き方はこれからどうなるのかという内容であり、SDGs の該当項目 8 の働きがいも経済成長の部分になる回でした。自分自身は大学 3 年という就活真っ最中であったため働き方について 1 番自分はこのテーマに対して 1 番自分事として向き合うことが出来ました。その中でも自分は今就職活動失敗続きで自分の価値について考えていたのですが、この授業で我々世代の労働力というのは必要であるということを書いて、年齢ですらバリューであることがわかりました。またこの授業で特に興味深かったのは、人工知能の社会実装の部分です。自分が生きていく 40.50 年間の間では何回も世界が変化していくことに対しての、自己変化や更新が大切だという点からこの世の中を生きていく中で柔軟性が最も大切な部分であると考えました。しかし今は流行やトレンドに敏感であるが、歳をとっていくことでそれらに対して敏感でなくなっていくのと同様に、柔軟性も歳をとってくると落ちていくのではないかと思います、ここが将来設計する中で最も課題になる点ではないかと自分は考えます。また自分は IT の分野で就職先を探しているのですが、この分野は変化や新しいことが数多く出てくる分野だと考えているので、キャ

リアを考えていく中でその柔軟性というのを鍛えていくことがこの授業を通して心に残りました。また昨今フジテレビのような問題のように権利が不当に使用されているニュースを見ているため、個人の尊重というのがなされていないと考えていたが、全体を見回した時に人工知能を使つてのフィードバックによって個人の内面が尊重されているのだなと思い、自分の中にあった不安点というのが少し薄れていきました。

・身に着いたこと

この授業で身についたことは、SDGs についての深い理解と、グループディスカッションで意見を交換し合うことが身につきました。SDGs についての理解は、最終授業での発表の際のスライド作成で自分は将来私たちが教育の未来に向けて貢献出来る点を調べていたのですが、自分は貢献出来ることは少ないと最初考えていたのですが、色々な体験談などを見ていると、ネットの普及のような大きいものも貢献出来る点ではあるが、自分が今大学で学んでいる知識や大学受験で学んだ勉強方法を広めていくことも十分貢献出来るということが分かり、SDGs に対して参加するということに対して自分自身ものすごく高いハードルを持っていたが自分自身も小さいものでいいから参加出来るということがこの授業を通して1番身についた点ではないかなと考えます。またそれと同時に自分自身が学び続けることの大切さ、また広めることができるような環境が悪い地域などに自分から進んで赴く大切さも重ねて身につきました。

また、授業形態であるグループワークも自分は特に苦手な部分で、今回の授業ではオンラインでの参加であったので速度感とかも分からない中模索して自分の意見を出すというところで非常に難しいところではありましたが、今回の授業を通して自分の意見に対する根拠を必ず持って発表することが大切であるということが分かりオンラインでのグループワークの力というのが少し身についたかなと思いました。

・これからどう活かすか

これから、この身についたことを活かして、まず自分自身は日々勉強をし自分の持つ知識というのをもっともっと増やしていくことが必要だと考えます。その上で自分自身が持っている知識を学ぶことが出来ない環境にいる人たちに伝えていくことが大切なのではないかと考えます。また、将来自分が就職して、将来設計をしていく中で重要になっていくのは柔軟性だということが分かったので、時代に合った生き方であったり働き方に対してアジャストできる人間になる必要があると考えます。また今回の授業はSDGsという点で、これは将来絶対に直面する問題である17の項目だと考えているので自分自身が理解したつもりになっていたように周りにも、自分と同じように意味を履き違えてる人や、項目自体を知らない人もいますので、今からでも自分たちが生きていく世界に対しての問題点というのを理解していくことと、どうしたらこの問題を解決出来るかというのを個人単位からでもいいので考えていくことが大切だと思うので、今日まで学んだものを使って考えていこうと思いました。

SDGs 実践講座最終レポート②④

1.

本講義では、SDGs（持続可能な開発目標）を軸に、持続可能な社会の実現に向けた多角的な視点を学びました。特に、第 11 回の「水道水を考える」講義では、飲料水の安全性や環境負荷に関する重要な議論が行われました。水道水とボトル水の環境負荷の比較や、飲用形態に関する心理的要因の分析など、具体的なデータに基づいた考察が印象的でした。本レポートでは、講義全体の概要を述べるとともに、特に心に残った授業、身に着いたこと、そして今後どのように活かしていくかについて考察します。

2. 心に残った授業回

第 11 回

数ある授業の中で特に印象に残ったのは、第 11 回「水道水を考える」の講義でした。この授業では、日本を含む限られた国々でしか蛇口の水をそのまま飲めない現状や、水道水の安全基準、水資源の管理とその課題について深く学ぶことができました。

グループディスカッションでは、水道水をそのまま飲む人と飲まない人の意識の違いについて議論しました。例えば、水道水を飲まない理由として「味が悪い」「安全性に不安がある」といった心理的要因が大きく関係していることが明らかになりました。一方で、ボトル水の製造や輸送にかかる環境負荷が水道水の約 100 倍にもなるというデータを知り、個人の選択が環境に与える影響の大きさを改めて実感しました。

この授業を通じて、水道水の利用促進が環境負荷の低減に貢献する可能性があることを学びました。そして、社会全体での意識改革が必要であることを強く感じました。

3. 身についたこと

本講義を通じて、SDGs の観点から日常生活の選択を見直す重要性を学びました。特に、水資源の持続可能な利用に関して、以下の点を理解することができました。

水資源の有限性と管理の重要性: 世界的に水資源が不足している地域が多い一方で、日本では水道水が比較的安定供給されています。しかし、これは日本の豊富な降水量や整備さ

れた水道インフラに支えられているに過ぎず、この状況が未来永劫続くとは限りません。気候変動の影響により降水量が変動する可能性があり、水道インフラの老朽化によって維持管理のコストが増大することも懸念されます。そのため、今後は単に水を確保するだけでなく、効率的な使用と管理が求められます。例えば、都市部では雨水の有効活用や節水型の設備の導入、農業分野では水資源の適正利用がますます重要になってくるでしょう。さらに、個人レベルでも日常的な節水意識を持つことが大切であり、小さな取り組みの積み重ねが長期的な水資源の安定供給につながると考えられます。このように、持続可能な水資源の管理は私たちの生活や経済活動に直結する極めて重要な課題であることを改めて認識する必要があります。

環境負荷と個人の選択: ボトル水の消費が増加すると、プラスチックごみの増加や輸送に伴う CO₂排出量の増大が深刻な環境問題となります。特にペットボトルの生産には多くの資源とエネルギーが必要であり、廃棄後のリサイクルが適切に行われない場合、自然環境への負荷は計り知れません。さらに、ボトル水の需要が増えることで、地下水の過剰な採取や水源の枯渇といった問題も引き起こされる可能性があります。このような環境負荷を低減するためには、水道水の積極的な利用が不可欠です。水道水は日本国内において厳格な水質基準をクリアしており、安全性が高いだけでなく、環境への負担も少ない選択肢です。加えて、水道水を選択することでペットボトルの使用を削減し、循環型社会の形成にも寄与することができます。個人の選択が環境に与える影響は決して小さくなく、持続可能な社会の実現のためには、一人ひとりが意識を持ち、行動を変えていくことが求められます。

また、SDGs の各目標が相互に関連していることを学びました。例えば、水資源の管理（目標 6「安全な水とトイレを世界中に」）と気候変動対策（目標 13「気候変動に具体的な対策を」）は密接に結びついており、一つの課題解決が他の目標達成にも寄与することが理解できました。

4. これからどう活かすか

本講義で得た知識や考え方は、今後の生活やキャリア形成において多方面で活かしていくことができると考えています。まず、日常生活では水道水の利用を積極的に行い、ペットボトルの消費を抑えることを心がけます。これは単に個人の選択にとどまらず、周囲の人々に対しても情報を発信し、持続可能な資源利用の重要性を共有する機会となるでしょう。さらに、講義を通じて得た SDGs に関する知識をもとに、より環境負荷の少ないライフスタイルを模索し、具体的な行動に移していきます。

また、今後の建築学科としての学業や研究活動においても、持続可能性を意識したテーマを追求していきたいと考えています。例えば、建築や都市計画の分野では、持続可能な水資源管理の観点を取り入れた設計やシステムの開発に関心を持ち、BIM 技術を活用した水インフラの効率化に関する研究も視野に入れています。これにより、実際の社会課題と学術研究を結びつけることができるでしょう。

さらに、社会貢献活動にも積極的に参加し、持続可能な社会の実現に向けた取り組みに関与していくことを目指します。特に、水資源管理や環境保護に関する NPO や自治体の活動に参加することで、実践的な知識を身につけ、社会の現場での課題解決に貢献できると考えています。こうした経験を通じて、自分自身の価値観やキャリアの方向性をより明確にし、持続可能な未来の実現に向けた具体的なアクションを取っていきたいと思います。

SDGs 実践講座最終レポート②⑤

1. 全体の概要

SDGs の 17 のゴールに沿う形で授業が展開された。それぞれの授業では先生方の専門分野を踏まえた講義や、ゲストスピーカーの方が実際に経験したリアルなお話を聞く機会が設けられた。

私自身は 1 年生の頃から東洋大学 SDGs アンバサダーに所属しており、SDGs の達成に関わる企画の参加や運営に携わってきた。しかし、振り返ってみると、参加した企画は主に自分の興味がある「地球環境問題」関係のものであった。だからこそ今期のこの授業で、改めて SDGs の全貌や各方面の問題について学ぼうと思い、受講を決めた。授業内では先生方のお話だけでなくグループワークの時間も設けられていたことで、ただ知識をインプットするのではなく、自分が考えたことを発信しそれに対する周りの意見や、また違った考え方を知る機会にもなった。また、特に印象に残りやすかった授業回は、ゲストスピーカーの方がいらっしゃった回である。やはり当事者目線でのお話は、より自分の身近な問題として考えることができ、自分の興味の幅を広げるきっかけにもなったと思う。

2. 心に残った授業回

第 14 回

私は第 14 回の勝又さんの「LGBTQ+」に関する講義が一番印象に残っている。その大きな理由は、自分が理解できていると思い込んでいたテーマであった、ということだ。強い関心こそなかったものの、今までも LGBTQ+ について学ぶ機会は多少あり、自分としても理解がある方だと思っていた。しかし実際に今回、当事者の方の話を聞きその考えは一転した。私は ally でもなんでもなかったのだ。

特に印象に残ったのは、「日本の名字ランキングのトップ 6 の人口よりも LGBTQ+ の人口の方が多い」という話だ。今までの学校生活などを振り返ってみても、名字ランキングトップの名前の人はいくらいた。それよりも LGBTQ+ の人に会う可能性の方が高い、という事実には驚いた。しかし私の記憶の中で LGBTQ+ だと言う人に出会ったことはほぼない。ということは、自分の周りにいた友達やクラスメイトの中にはそのことを隠して言えずにいた人がいた可能性がある。そのうえで自分の今までの考え方を振り返ってみると、やはり「性別二元論」がベースにあることに気が付いた。例えば、恋バナも今までたくさんしてきたが、勝又さんが例に挙げていたように、「好きな人＝異性」という前提で話を進めてしまっていた。もしかしたら、その場にいた人の中には気分よく感じていない人もいたのかもしれない。また、自分の周りの人のことも私が勝手に決めつけてしまっているの

では、と思った。最近では初対面の人と話す機会、女の子なら女の子の方が話しやすい、男の子なら男の子の方が話しやすいと、直接言ったわけではないが決めつけて行動してしまったことがある。

このように、講義を受ける前は自分は理解ある人のつもりでいたけれど、実際に身の回りの事象と照らし合わせて考えてみると、当事者の方たちがカミングアウトをしにくい世の中の風潮を自分自身が助長してしまっていたことに気が付いた。それは今回お話を聞いてみないと気が付けないことであり、私のような立場の人はまだまだ世の中には大勢いると思う。だからこそ、この授業のように「知るきっかけ」を増やしていくことが、誰もが生きやすい世の中への第一歩になると感じた。

「LGBTQ+」の問題に関しては今の段階では、簡単に受け入れられるものではないと思うし、すべての場面において「男女で区別するのはだめだ」などということも違うと思う。このように複雑で簡単に解決しない問題だからこそ、まずは知ってみることが大事だと気づいた。そして今度こそ本当に理解のある ally になりたいと思う。

3. 身についてしたこと

実際にこの授業を受けた後に、偶然 LGBT の方の結婚式の披露宴に立ち会う機会があった。そこでは誰もが当たり前とその 2 人を受け入れ、祝福していた。もはや「受け入れる」などという言葉を使うまでもなく、これが普通、といった空気を感じた。その景色を見て、今までの自分の当たり前を変えていかなければいけないと感じたし、その意識がもっと広まって生きやすくなる人が増えてほしいと思った。

このように、もともとあまり関心のなかったトピックへも SDGs 実践講座を通して興味をもったことで自分の視野が広がったように思える。視野が広がることで今まで自分が当たり前だと思っていたことも、いい意味で疑って考えることができるようになった。そして、多くの人がこのような経験をし、関心の幅を広げることが、SDGs の達成につながるカギになると思う。

また、グループワークを通して、改めて自分の考えを発信することの難しさと、意見を交わすことの重要さに気が付いた。自分の意見を持つためには、まずはそのテーマに関しての基礎知識が必要であるし、意見を持った段階で周りの考えを取り入れることで、より自分の考えの根拠をはっきりとさせることができる。

4. これからどう活かすか

先ほども述べた通り、今まではもともと自分が関心のあるトピックを中心にボランティアへ参加したり SDGs アンバサダー内で企画を行ったりしてきた。しかしこの授業を通して、あまり関心がないテーマだったとしても一度学んでみて、自

分の身近なところに落とし込むことの重要性を再確認した。これからは、どんなテーマや問題も避けることなく一度触れてみて、自分にできることを考えていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート②⑥

1. 全体の概要

今回の総合 III B の講義では、持続可能な開発目標に関する幅広いテーマを扱い、現代社会が今まさに抱えているタイムリーな課題や、その解決に向けた取り組みについて各回の先生の講義内容を踏まえてグループメンバーとの話し合いにより、学びを深めることができました。講義は、各分野に詳しい専門の先生を招いて行われました。机上の空論ではなく、先生方の実体験により得た知識や視点から SDGs について理解を深めることができとても有意義な時間となりました。講義内容は、ジェンダーやエネルギー、環境、貧困など多岐に渡り、それぞれのテーマについて現状と課題、そして正解のない解決策を考えることにより自分ごととして SDGs を捉える良いきっかけになりました。講義を通して、SDGs は単なる理想論ではなく、私たち一人ひとりの行動と意識によって達成可能な目標であるということを学ぶことができましたと思います。また、SDGs 達成のためには、政府、企業、NPO などの組織や団体と個人間の連携が不可欠であることを感じました。

2. 心に残った授業回

第 14 回

この講義では、LGBTQ に関する基礎知識や、実際の当事者である勝俣先生が直面した差別や偏見などについて学びました。特に、「性はグラデーション」という言葉が印象的でした。従来の性別の二元論的な考え方では捉えきれない、多様な性のあり方があるということを改めて気付かされました。例えば、性自認（自分の性別についての認識）、性的指向（自分が好きになる人の性別）、性表現（服装や髪型など、自分が表現したい性別）は、それぞれが複雑に絡み合って多様化し枠組みとして捉えることは難しいと感じます。また、LGBTQ の人々が人口の約 10%を占めるという統計を知り、決して少数派ではないことを認識しました。実際に私の中学時代の友人にもそのような方がいたので気付いていないだけでたくさんいるということには納得しました。ただ、このような人々の中で「LGBTQ の人はそのような人のみのコミュニティで上手くやっているから触れないでくれ」と言った声があることがグループワークで分かり、気を使いすぎるのもかえってよくないとも考えた。塩梅が難しいところである。また、講義では日常生活における無意識の言動が、他者を傷つけてしまう可能性についても指摘されていました。例えば、「女の子なんだから女の子らしくしなさい」といった言葉は、性別の役割を固定化し、多様な性のあり方を否定

する可能性があると思います。こうした無意識のうちの偏見をなくし、多様性を尊重する社会を築くためには、一人ひとりの意識改革が不可欠であると感じました。さらに、ジェンダーにとらわれた考え方が原因で、自尊心が低下したり、うつ病を発症したりする人もいるということが調べて分かり、深刻さを改めて認識しました。誰もが自分らしく生きられる社会の実現に向けて、私たちに何ができるのかを考えるきっかけとなる講義でした。

第 13 回

この講義では、ポーランドにおける原発導入の背景について学ぶことができました。ポーランドが原発導入を検討する背景には、ロシアからのエネルギー供給の不安定さや、気候変動対策といった要因があることを知りました。ポーランドは、かつて社会主義国で、ロシアからのエネルギー供給に大きく依存していましたが、ソ連崩壊後、エネルギー供給の不安定化や価格高騰といった問題に直面し、エネルギー源の多様化が課題となりました。また、地球温暖化対策として、温室効果ガスの排出量を削減する必要があり、原子力発電がその選択肢の一つとして浮上してきたという背景だったと思います。第二次世界大戦時の日本も大東亜共栄圏を作ろうとしたのはアメリカに石油を絶たれ、資源の確保をしようとしたという背景があったと思うので、いつの時代もエネルギーというものは国の存続に関わるとても重要なものだと再認識することができました。そしてエネルギー源が豊富にある国は世界での権力も強いということも学びました。また、ポーランドの原発導入において初め、原発は必要だと思うが近くには建てないで欲しいというノットインマイバックヤードの考えがあったが次第に自分の家の近くでもなんでもいいから原発を建てよう考えに変遷していく過程が興味深いと感じました。

身についたこと

正直初めは SDGs に関しての知識は皆無と言っても過言ではありませんでしたが講義を通して、SDGs に関する実践的な知識や視点、理解が深まりました。特に、これまで無意識のうちに抱いていた偏見や固定観念に気づき、多様な視点から物事を捉えることの重要性を学びました。また、グループでそのような正解のない社会的な課題について討論することによって、多様な意見をまとめて折衷案を考える力も個人的には身に付いたと思っています。そして、SDGs 達成のためには、政府や企業の取り組みだけでなく、これからの世代を担っていく私たち一人ひとりの行動が重要であることを認識しました。大きな行動でなくても、日々の買い物や消費行動、環境問題に対する意識、社会貢献活動への参加など、私たちにできることはたくさんあります。そのような小

さな一歩を地球単位で積み重ねていくことが重要だと思います。

3. これからどう活かすか

講義で学んだことを、今後の自分の生活や考え方に反映させていきたいと考えています。具体的には、以下の3つの点に力を入れていきたいと考えています。

まず一つ目に、多様性の尊重という点です。LGBTQに関する講義で学んだことを活かし、多様な性のあり方を尊重する社会を築くために、自分自身の意識を変えていき、周囲への波及させていくことができれば良いと考えています。例えば、今一度LGBTQに関する正しい知識を学び、偏見や差別的な言動をしないように心がけたいと思います。また、周囲へはLGBTQの情報を発信しているインフルエンサーなどの投稿や動画を拡散することで啓発を促していきたいです。

次に、持続可能なエネルギーの利用という点を普段の生活の中で意識したいと思います。省エネルギーや再生可能エネルギーの利用を促進する生活を心がけたいと思います。例えば、節電や省エネ家電の使用などを考えています。また、再生可能エネルギーを推進する企業を応援するなどもSDGsの一環になると考えています。最後に、途上国への支援として自分にできる範囲で途上国支援活動に参加したいと考えています。例えばNGO、NPOへの寄付やボランティア活動、フェアトレード商品の購入などがあると考えています。また、途上国の現状や課題について学び、周囲の人々にその現状を伝えて知ってもらうことが大事だと思います。これに関しては日本のように豊かな国で暮らしていると気付けない問題だと思うので知ることが最優先だと考えています。SDGsの全ての目標を達成することは現状のままでは不可能だと思いますが、講義で学んだことを活かし、持続可能な社会の実現に向けて貢献したいと考え自ら主体的に小さくても一歩踏み出す事が重要だと思います。そのためには、常に周りで起こる様々な問題に自分ごととして問題意識を持ち、学び続け、行動をしてみることが大切だと感じています。

SDGs 実践講座最終レポート②⑦

1,全体の概要

SDGs とは、2015 年 9 月の国連サミットで採択された国際目標であり、世界のあらゆる格差や経済成長、気候変動などの地球規模での課題に対する 17 の目標が設定されており、世界中のすべての人々が、SDGsへの参加を求められている。そのためには、国や自治体および企業はもちろんのこと、個人の立場からも取り組むことが求められており、途上国と先進国のすべてが一丸となって、2030 年までに「誰一人取り残さない」社会の実現を目指すという、世界共通の目標である。

2,私が特に心に残った授業回

本講義の中で一番印象に残っている講義は、第 14 回の勝俣さんの授業です。第 14 回の授業を受けまで私はトランスジェンダーなどの LGBTQ+の方に出会ったことがありませんでした。この授業を通して、こんなにも LGBTQ+の方は生活しづらく、苦しい思いをしているのかと感じました。また、私が今まで出会った人の中に LGBTQ+の方がいなかったのではなく、LGBTQ+を言い出すことができない人がいたのではないかと考えました。さらに、LGBTQ+の方のトイレやお風呂の問題が授業中に挙がり、課題の多さを痛感し、特に、勝俣さんが授業中におっしゃっていた、性別の二元化に対して取り組んでいくべきだと感じました。

3,身についたこと

本授業を通じて身に着いたと思うこととして、初めて SDGs を私が認知し始めたころは、使われるフレーズが「国際目標」「地球規模」「世界共通」といった言葉が所々に登場し、あまりにスケールの大きい取り組みであると反射的に感じてしまい、自然となかなか「自分ごと」になることができないでいましたが、本講義を通じて体系的に学べたこともあり、一個人の私では本当に微力ですが、自発的に「自分ごと」として取り組めることがいくらかもあるとの自覚を持てたことを強く感じました。また、このような意識を持つ人を広げていき、更にはその意識を高めていくことにより、まさに世界全体を持続可能な社会へ繋げていくべきと、強く思わされました。

4,これからどう活かすか

これを踏まえ、私が今後どう活かしていくかについて、SDGs のゴール 1 である「貧困をなくそう」にフォーカスして本講義を学んだ私は、ゴール 1 のみの目標に取り組むのではなく、SDGs のゴールをまんべんなく取り組み、達成する必要があると考えました。

私が考えるだけでも

ゴール①：貧困をなくそう

途上国で生産されて日本で販売されている商品のなかには、生産者へ支払われる対価と労働環境がアンフェアなものが存在しているとのこと。経済・社会・環境の視点で基準が守られていることを証明する「国際フェアトレード認証ラベル」というものがあることを知り、

特に途上国で貧困に苦しむ生産者の支援となるよう、今後はこれを強く意識した購買行動をしていきたい。

ゴール②：飢餓をゼロに

日本人は1日当たりおにぎり1個分の食品ロスを生じさせているとのこと。一方で、世界には飢餓で苦しむ人々があり、食料を世界全体で公平に分配されるためには、まずは我々が過剰な消費を抑制すべきである。私が食品を調達する際には、賞味期限や保存期限を考慮する、外食時に注文をし過ぎないことなどを心掛けていきたい。

ゴール③：すべての人に健康と福祉を

本項目に関しては、なかなか一個人での取り組みだけでは難しい目標であると感じました。但し、健康については、自分の経験や知見を身近な人々との会話などで伝えることが、その人の一助になると考えた。

ゴール④：質の高い教育をみんな

本項目に関しては、なかなか一個人での取り組みだけでは難しい目標であると感じました。但し、自分の経験談などを、これから進学や進路などを迎える甥っ子や姪っ子、身近な年少者との会話などで伝えることが、その人の一助になると考えた。

ゴール⑤：ジェンダー平等を達成しよう

どうしても家事の負担は、女性に負担が大きくなっているのが現状と思います。私は未婚ですが、将来に家庭を持った際には、家事負担の偏りがあってはならないように努めていきたい。

ゴール⑥：安全な水とトイレを世界中に

世界の地域の中には、数時間を掛けて自らの生活用水を徒歩で調達している一方、その時間と引き換えに水の使用を輸出作物へ優先させている地域があるという。世界全体の水の供給量は限られており、世界全体で公平に分配されるための一助として、節水の意識を高めていきたい。

ゴール⑧：働きがいも経済成長も

前述①と重なるが、途上国で生産されて日本で販売されている商品のなかには、生産者へ支払われる対価や労働環境がアンフェアなものが存在しているとのこと。経済・社会・環境の視点で基準が遵守されていることを証明する「国際フェアトレード認証ラベル」というものがあることを知り、特に途上国で貧困に苦しむ生産者の支援となるよう、今後はこれを強く意識した購買行動をしていきたい。

貧困という分野だけでも、これらの目標に取り組まなければならない、すべての17ゴールを達成することは非常に難しいと、本講義を通じて自覚させられました。目標達成に貢献するには、私たちの普段の日常生活においても、小さな積み重ねを意識していくことが重要と考えました。

以上

SDGs 実践講座最終レポート②⑧

1. 全体の概要

本講義を通して SDGs の理念および各目標への取り組みを学んだことで、世界で起きているあらゆる暴力や搾取が自分とは関係のないものではなく、大学で学問を学んでいる自分たちこそが社会を変えていく主体であるという当事者意識を持つことができた。今現在起きていること、解決への具体的な取り組みなどの知識を得て、社会変革の主体としてそこから自分たちに何ができるのかまで視野に入れた講義であった。SDGs 目標 13「気候変動に具体的な対策」を主に扱った気候変動チームに参加し、議論を通して学内・外でのアクションまでを提言することができた。しかしながら、提言までにとどまりアクションをどこまで結びつけることができるかは、講義終了後も長期的に私たちに課された課題である。

2. 心に残った授業回

第 5 回講義「移民・難民と私たち:共生社会へのカギ:難民に焦点をあてて」でのグループディスカッションが心に残った。6 人のメンバー各々が「難民を受け入れるべき」「難民の受け入れを制限すべき」「難民当事者」の立場に分かれて意見を述べる場では、「難民を受け入れたい気持ちもあるが、自らの生活基盤も安定していないのに、自国の情勢を解決するよりも難民を受け入れるのはいかなものか。優先順位をつけるべき。」「感情論、理想論では難民を受け入れることが十分必要なことは分かるが、現実面で考えなければならない。」という受け入れには慎重になるべきだという意見が多数出た。一方で、「安い労働力が手に入るならば企業にも利益が及ぶし、少子化社会には都合がいいのでは。」という難民を受け入れることで生じるメリットも寄せられた。

私自身の意見として、人の価値や生命に優先順位をつけることは、人権や人の尊厳を侵害する行為であるので、原則は難民・移民を受け入れる普遍主義の立場を取るべきだと考えた。しかしながら、普遍的な正義であるべき人権が、この世に生きる全ての人の共通の利益ではないことは確かである。相手を説得させるための理論や材料が十分にないうちは、難民を労働力として受け入れた方が、利益が生まれるという考え方がどうしても強くなってしまいうちにモヤモヤを感じた。人を労働力として受け入れることはまさに、奴隷制と似通った論理である。難民を人間として受け入れるのではなく、労働力=モノとして受け入れるのは非倫理的な考え方である。

一方、難民の受け入れの優先度をあげるために、自国の問題を解決するにはどうすればいいかという話し合いでは、選挙や教育、自治体レベルでの支援環境づくりの 3 点が主に挙げられた。1 点目の選挙では、問題解決のために、社会構造を変えるのには選挙が手っ取り早いという意見も挙げられた。しかし同時に、「選挙に行ってもどうせ何も変わらないし、そもそも誰か立候補しているかも分からない」との声もあった。政治的有効性感覚がない上に、

選挙への関心がないことから生じる投票に関する知識不足も政治、社会構造が変わらない要因であるとも考えられる。2点目の教育では、マイノリティに目を向けた主権者教育を取るべきだという意見も出てきた。3点目の自治体レベルでの支援環境づくりでは、難民と受け入れる側の人たちとの交流を促す定期的な機会を設け、受け入れる側の文化や言語を教える教室を開けばいいのではという意見も出た。解決策をひとりひとり挙げたとほぼ同時に時間がなくなってしまったため、さらに深掘り甲斐のある議論であったと思う。このような有意義な議論に参加できたことはなかなかないために、第5回講義から議論への苦手意識が少しずつ変わっていった実感があった。

3. 身についてしたこと

グループディスカッションのコツを第8回講義にて掴むことができ、それ以降のグループでの話し合いは雰囲気良く議論を前に進めることができた。なかでも、これまで議論が苦手だった自分にとっては講義を通して成功体験を得ることができた。普段であれば、意見の対立が生じた際に、どうしても相手の意見に納得できずに平行線のまま時間ばかりが経ってしまうことが多い。しかし、講義内でのディスカッションでは互いを否定せず、根拠を端的に言語化して伝え、相手に納得してもらうことができた。Why、How、Whatを意識しながら自分の意見を伝えることで、自分が言いたいことを言語化する力が備わり、自身に繋がった。それだけでなく、同メンバーのファシリテーション力も高かったため、自分にはないスキルもメンバーから学ぶことが多かった。特に、当初グループで定めた議論の目的から話が逸れた場合でも、メンバーが目的に立ち戻ってすぐに軌道修正する流れができていたのは感心した。グループ内でのルールメイキングも建設的な議論に貢献し、Zoomと対面のハイブリッド形式という対話の場としてはとてもスムーズに進んだ。

4. これからどう活かすか

今回得ることができた対話のスキルは、SDGs目標に少しでも近づくために必要不可欠な力である。SDGs目標を掲げ、いくら理念が高尚なものであっても、ひとりではできることには限りがある。だが、同じ目的を持った人々が集い、議論し、アクションにつなげることでできれば、ひとりではできることの何倍もの力を発揮することができる。そのため、講義内を通して得た議論の場での成功体験は、今後の学生生活または社会人生活を大きく左右するものであったに違いない。議論の方法を大学においても学ぶ機会がないために、時間を無駄に消費してしまう会議が多々あった。そのことによって、会議への忌避感が募っていったが、身につけたことを活かせば効率的かつ生産性の高い議論を設けることができる。相手との関係性を構築する以前に、目的や問題意識を擦り合わせて会議を進めなくてはならない場面で、実践の機会はとても有意義であった。所属している大学公認サークル社会科学研究会や、就職してからの会議の場でも積極的に議論のスキルを活用していけたらと思う。

SDGs 実践講座最終レポート②⑨

SDGs 実践講座は毎週様々な学部の教授が、研究しているテーマと SDGs を絡め講義をおこなっていた。また、時には外部講師を招き、講話を聴く授業回もあった。そしてどの講義にもグループワークの時間があり、オンラインのメンバーも含めて意見や考えを言い合い、SDGs への理解や関心を深める時間があった。このグループワークにより、他学部や他学年の人との交流を行うことができ、回数を重ねるごとに円滑なコミュニケーションをはかることができた。

私が 14 回の講義の中で心に残った回は、14 回目の勝又様による講義である。私は元々 SDGs のゴールの中でもジェンダー系に興味があり、最終発表もジェンダーについてであった。また、トランスジェンダーの友人や同性カップル、クエスチョニングの友人などが周囲に子供の頃からいたため「性別」についての在り方を考える機会が多く、今回の講義も自分の理解を深める一つのきっかけになった。LGBTQ の存在や価値観、考え方は昔ほど厳しくなく、若い世代を中心に柔軟になってきていると私は考える。私自身もジェンダーや同性同士の交際や結婚についての偏見はなく、周囲にも偏見を持った友人はいない。しかし、勝又様のお話を聞き、自分や個々に偏見がなくとも世間の風潮や考え方がまだ LGBTQ の人々を傷つけたり、無意識にジェンダーバイアスを与えたりしていると気づくことが出来た。色や遊び、習い事や部活動、服装や髪型など、今日に至るまでに無意識に「男女」で分けていることや「普通」「普通じゃない」と思い込んでしまっていることがある。それらは誰かが悪い場合ばかりではない。自分が置かれてきた環境や家庭や教育機関での教えなど、ジェンダーバイアスや「普通」の基準をつくる考え方は身近で形成され、疑問を持たずに生きていく。勝又様を傷つけ、希死念慮にまで追い込んだジェンダーバイアスは、簡単にはなくならないものだと思改めて思い知った。勝又様の場合、娘の誕生を祝い、「可愛らしく」育ててほしいという親の願いや、悪意なく同性同士の交際を晒し者にした先生など、身近な人から傷つけられていた環境に心が痛んだ。性転換手術や LGBTQ の交友の場が存在し、そういった選択を出来る人は多いと考える。しかし、周囲の反対や金銭面でそういった選択が出来ない人も世の中には数多く存在していることが、目を背けたくなるが現実であると感じる。また、私の友達が女性同士で交際をしているが、同性婚が認められていないが故に「交際のゴールがわからない」と嘆いていたことがあった。現状の法律や憲法では、まだまだ LGBTQ の人々は個人で解決できない縛りや悩みがあるのではないかと考えた。

私は SDGs 実践講座を通して、自分が元々持っていた SDGs への考え方や知識を更に深めることが出来た。また、グループワークを通じて、考えを共有するコミュニケーション力が今までよりさらに身に付いたと感じる。私は元々 SDGs アンバサダーに登録していることから、SDGs への知識が皆無なわけではない。しかし、普段自分が興味を持ち企画を

おこなったり、周囲と話したりする SDGs 目標以外の部分はあまり触れる機会がなかった。また、学生主体の団体であることから、大人の考えをインプットする機会もなかった。そのため、実践講座では毎時間異なる目標を取り扱い、更に毎回異なる教授や講師の講義を聴くことが出来たため、多角的に SDGs について知り、触れ、学ぶことが出来たと感じる。今後実践する機会は今と同様に多そうであるため、実践講座で考えたことやインプットした知識をアウトプットし、実践していきたい。また、グループワークでは冒頭に書いたように異なる学年や学部の学生と交流ができたため、コミュニケーション能力が身に付いたと考える。また、私は2部生であるため、5限にこの講義が開講されていることで1部生との関わりを持つことが出来、会話をすることが出来る人が出来たことが純粋に嬉しかった。これはSDGsに基づいて考えるのならば、17番のパートナーシップに値するのではないかと考える。この講義での交流やコミュニケーションも、SDGs 実践であり目標達成への第一歩ではないかと感じた。

私はこの講義を今後、SDGs アンバサダーでの活動やボランティア活動に活かしていきたいと考える。この講義で聞いた実体験や研究の話など、SDGs に関する情報を詳しく聞ける機会はなかなかないと感じる。そのため、今回の講義を活動に活かし、実践していくことで初めて講義が身に付き実践したと言えるのではないかと考える。私は今後、災害救助のボランティアや環境系のボランティア、ジェンダー系の企画など様々な企画やボランティアに携わると予想する。また、大学を卒業しても、誰かの助けになる活動は辞めず続けていきたいとも考えている。そのため、今後の生活や活動の選択や企画に実践としてうつしていきたい。また、毎年渋谷で行われているプライドパレードなど、大学を通さない企画や SDGs に関するイベント、ボランティア活動などにも積極的に参加し、この講義を活かしていきたいと考える。

SDGs 実践講座最終レポート③⑩

私が1番この講義で印象に残ったのは、水質汚染に関しての講義です。

水質汚染は、現代の地球環境問題の中でも非常に重要な問題の一つで、水は生命に欠かせない資源であり、私たちの日常生活、農業、工業活動において欠かせない存在です。しかし、水質汚染が進行することにより、私たちの生活環境が脅かされ、未来の世代にも深刻な影響を与える可能性があります。

水質汚染に関して最も心に残ったことは、その深刻さと広がりです。私は以前、水質汚染が主に工場や産業活動から来るものだと考えていました。しかし、実際に調査を進めるうちに、水質汚染が人々の日常的な行動からも引き起こされていることに気がきました。たとえば、家庭から排水される化学物質やプラスチック、農薬の使用など、身近なところで水質汚染を引き起こす原因があることを知り、衝撃を受けました。

また、特に心に残ったのは、発展途上国での水質汚染問題です。経済的な発展と環境保護のバランスが取れていないため、多くの国々では水質汚染が深刻な状況にあります。例えば、インドやアフリカの一部地域では、汚染された水源を利用することで、さまざまな病気が蔓延しています。私たちが日常的に使用している水道水がどれほど恵まれたものかを痛感し、日本で当たり前綺麗な飲める水がでることはとても恵まれていることだと改めて実感しました。

水質汚染について学ぶ中で、水質管理の重要性に気づきました。水の汚染が進行することで、その水源を利用することができなくなり、飲料水の不足、農作物の生育不良、さらには人々の健康に重大な影響を与えることになります。特に、化学物質や重金属が水源に流れ込むことで、その汚染が長期的に環境に悪影響を与え、回復が非常に難しくなることを学びました。

また、水質汚染の原因が私たちの生活習慣に密接に関連していることもわかりました。たとえば、プラスチックの使い捨てや不適切な廃棄物処理が、海洋や河川の水質汚染に直結していることが分かりました。私たち一人一人の行動がどれほど環境に影響を与えるかを考えることが重要だと実感しました。

さらに、水質汚染の問題に対する解決策として、リサイクルの重要性や、環境に優しい製品の使用、再生可能エネルギーの活用が挙げられていることを学びました。これらの取り組みが、少しずつではありますが、環境改善に繋がっているという事実を知り、持続可能な生活の大切さを理解しました。

これから水質汚染に関して学んだことを活かすためには、まず自分の生活の中で意識的に行動することが大切だと考えています。日常生活の中で無意識に使っているプラスチック製品や化学製品を減らすこと、リサイクルを実践すること、また汚水の排水処理に注意を払うことなど、環境負荷を軽減するための行動を意識的に取っていく必要があります。

具体的には、まず家庭で使う洗剤や化粧品、日用品に含まれる有害物質を避けることが重要です。環境に優しい製品を選び、プラスチック製品を減らすことで、河川や海洋に流れ込む汚染物質の量を減らすことができます。また、再生可能エネルギーを利用することや、エネルギー効率の高い家電を使用することも、間接的に水質汚染の防止につながることを意識していきたいと考えています。

また、地域社会での啓発活動にも参加したいと思っています。学校や地域のイベントで水質汚染についての意識を高めるために、積極的に情報を発信していくことが、他の人々にも影響を与え、より多くの人が環境問題に取り組むようになると信じています。

自分にはなにができるのか考え、まずは身近な場所からできるだけ環境に配慮した行動を取ることが大切だと思いました。例えば、家庭でのゴミ分別をしっかりと行い、プラスチック製品の使用を減らすことや、不要な化学製品を購入しないようにすることです。こうした小さな努力が、最終的には大きな効果を生み出すと考えています。

さらに、水質汚染問題に関心を持ち続け、情報を収集してその問題を広めていくことも私の役割だと感じています。SNS やブログを使って、水質汚染の現状や解決策について発信し、周囲の人々に意識を高めてもらうことができると考えています。また、ボランティア活動に参加して、実際に地域で行われている水質浄化活動や、清掃活動などに積極的に参加することも一つの方法です。

最後に、個人としてだけでなく、社会全体として水質汚染の問題に取り組む必要があることを認識し、より大きな視点で環境保護活動を支援することが重要です。企業や行政が取り組んでいる環境保護活動に対しても関心を持ち、積極的に支援することが、将来的な環境改善につながると信じています。

水質汚染は、私たちの生活の中で実際に直面している深刻な問題であり、日々の生活習慣の中で意識的に改善していかなければならない問題です。私は、これから学んだことを活かし、身近な行動から始めて、環境保護活動に貢献していきたいと考えています。また、水質汚染問題に対する意識を高めることが、広く社会に影響を与え、未来の世代にもより良い環境を提供できるのではないかと考えます。

1. 全体の概要

私はSDGs11「住み続けられるまちづくりを」という身近な目標に関する取り組みを行った。取り組みの内容は私の住む街のボランティア活動に参加し、地域のゴミ拾いを行った。この活動は、月に一度私の住む地域で行われるその地域に住むすべての人が参加の対象となり、私が幼い頃から継続的に行われている活動である。この活動には40人ほどの地域住民が参加し、老若男女問わず様々な年齢の人々が参加した。時間は1時間半、各自好きな場所を練り歩き、落ちているゴミを拾い集める。集めたゴミは地域の公園を使い一箇所に集め、分別する。私は今回、運営の助人として参加させてもらい、地域の子どもの参加を促すべくチラシ配りを行った。活動には10人以上の子どもが参加し、子どもたちのエコ意識や、ゴミ問題への取り組みとして良い影響を与えることができたのではないかなと思う。

この活動を通して、ペットボトルのポイ捨ての多さが印象に残った。夏には雑草が生い茂る公園の空き地に捨てられているものが多く、公園に公共のゴミ箱を用意することで減らせるのではないかなと考える。またゴミ箱を設置していない自動販売機の近くにも多くのペットボトルや空き缶が捨てられており、地域住民の当番性によるゴミ箱の管理を行うことができれば、一気に改善が見込めるのではないかなと考えた。また、地域の人々と一緒に活動することで新たなコミュニティの場にもなり、「住み続けられる街づくり」の充実に貢献できたと感じている。ゴミ拾い活動は、一度だけで街全体が綺麗になるわけではない。しかし、継続すること、またその活動を通して一人ひとりに綺麗にしようとする意識が高まることで「住み続けられる街づくり」に一步近づくことができると思う。これからもそうした地域全体で取り組む活動を大切にしていきたい。

2. 心に残った授業回

「第11回と第14回」

第11回の講義では、「水道水を考える」というテーマで東京の水道水の安全性や水道水のあり方について海外の市販水や日本の市販水、東洋大学の水道水で利き水を行い様々な観点から考えた。海外の水と日本の水では味が少し異なり、日本の水は海外の水に比べてほんのり甘いことがわかった。逆に海外の水には雑味を感じ、美味しいと感じられなかった。利き水では、味に違いがあったものの水道水から錆びた鉄の味や不純物が混ざったような味はせず、水道水を当てることができなかった。味の観点や安全性を考えても日本の水道水は優れたものであるとこの講義を通して感じた。

また、日本人は多くの方がマイボトルを持参せず、ペットボトルの水を購入

しており、普段から水道水を避ける生活をしている人も多い。その理由は安全性や衛生面を気にしてのことであると考え。しかし、飲食店で提供されるほとんどの水は水道水であり、その事実を知らないが故に日常で避けるようにしているのではないかと考えた。ペットボトルの利用による CO2 の排出の観点からもマイボトルの利用や水道水の利用をもっと推奨するべきであると考え。そのため、今回の講義のような水道水の安全性について理解するための講義やワークショップを行い、水道水の利用に対する抵抗感を減らしていくべきであると感じた

第 14 回の講義では、「ジェンダー平等」というテーマでトランスジェンダーの講師の方からお話をいただいた。講師の方は出生後に登録されている性別は女性であるものの、外見は男性であり、ご自身も男性として生きてきたという方であった。女性器が付いているからという理由で判断して良いのか、男性として生きてきたら男性になるのか、自身の意思で性別が決まるものなのか、男性か女性か、何をもとに判断すべきかとても考えさせられる講義で印象に残っている。トイレはどうするのか、女性車両は利用できるのか、銭湯はどちらに入るべきかなど様々あるがどのような配慮を行っても真の平等を実現させることは叶わないのだと感じた。真の平等に至らなくとも、LGBT-Q の人々が過ごしやすい世の中かつ男女平等に近づける努力や考えを持っていきたいと思う。

3. 身についたこと

「水道水を考える」講義では、日本の水道水の安全性や味に関する固定概念を見直し、実際に利き水を行うことで、客観的に判断する力が養われた。特に、「水道水は避けるべきもの」という呆然とした印象が、必ずしも事実に基づくものではないことに気づき、より合理的かつエコな選択をする重要性を学んだ。

「ジェンダー平等」の講義では、男性・女性という概念が単純なものではなく、個人の経験やアイデンティティによって異なってくることを学んだ。性別を生物学的な特徴だけで判断するのではなく、当事者の視点に立ち、多角的に考えることの重要性と大切さについて学んだ。

4. これからどう活かすか

この講義を通して、身の回りの当たり前を見直し、より良い社会のために行動することの大切さを学ぶことができた。実際に活かしていきたいこととして、マイボトルを積極的に利用しようと思う。周りに訴えかけることも大切だが、まずは自分自身が意思を持って行っていくことが重要であると考え。自身が使っていると、それを見た人にもまた意識する機会を与えることができると思

う。また、将来的に働く職場では、性別にとらわれず活躍できる環境づくりを意識したい。先入観を持たず、異なる価値観を持つ人との対話を大切にし、自分と違う意見に耳を傾け、多様性を受け入れる姿勢を持ち続けていきたい。

SDGs 実践講座最終レポート③②

SDGs「貧困」は、2030年までに、極度の貧困を終わらせるという目標が掲げられています。極度の貧困は絶対的貧困と言われていて、必要最低限の生活水準を維持するための食糧・生活必需品を購入できる所得・消費水準に達しておらず、寒さをしのぐ衣服や栄養価のある食事を手に入れられず、医療を受けることも難しい状態のことを指します。その他に相対的貧困という言葉もあります。相対的貧困とは、その国の文化水準、生活水準と比較して、大多数の人よりも困窮している状態のことを指します。相対的貧困率は、等価可処分所得が全人口の中央値の半分に満たない人の割合を指します。こう言った貧困には子供の貧困というものがあり、子供の貧困率が貧困線に届かない国もあります。子供の貧困対策として、すべての子供への支援の重要性、レジリエンスの構築が必要であると考えました。

続いて、SDGs とカーボンニュートラルについて話します。

カーボンニュートラルとは、脱炭素社会を目標に掲げた1種のSDGsです。

SDGsの持続可能な開発とは、将来のニーズを充足する能力を損なわずに、現世代のニーズを充足する開発のことです。3つの主要の調和は、経済成長、社会的包摂、環境保護があります。実現する社会には、誰1人取り残さないというスローガンがあります。そして、2つの多様性の尊重として、人種、民族及び文化的多様性、自然の多様性・生物多様性があります。東洋大学は「わかりやすさ」でムダを減らすという方式を取っています。その取り組みとして、ゴミの減量やリサイクルを行っています。

続いて、移民・難民について話します。

まず人はなぜ移動するかについて話します。プッシュ要因として、貧困、紛争、迫害、不安定な社会、よい教育を受ける、社会的地位の向上等が上げられます。プル要因として、労働力確保、経済の発展文化・共生、少子高齢化が上げられます。

難民には3つ種類があって、人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるかあるいは迫害を受けるおそれがあるために他国に逃れた人々を指す難民、内戦や暴力行為、深刻な人権侵害や、自然もしくは人為的災害などによって家を追われ、自国内での避難生活を余儀なくされている人々を指す国内避難民、自身の故郷から逃れて、他の国の避難所にたどり着き、その国で庇護申請を希望する人々を指す庇護希望者があります。

日本の2022年の難民受け入れ認定率は、2.0%です。自分はこの数字を見た時もっと難民を受け入れても良いと思いました。難民も自国で生活していくのが苦しいのに日本まで苦しくするのは違うのでは無いかと考えたからです。

続いて、飢餓について話します。

世界を見渡せば、毎年 10 億人以上が慢性的に飢えています。学校に上がる前の子供が、6,3 秒あたり 1 人の割合で命を落としています。

今後も世界の人口は増え続けていくにつれて、100 億人の食糧をまかなうには何が必要なのか考えてみると、耕作面接を増やすこと、面接あたりの収量を増やすという方法があります。少しでも飢餓で苦しむ人々を減らすためにも上記で述べた方法をいち早く取り入れた方が良くと思いました。

続いて、MDGs から SDGs に発展ついて話したいと思います。MDGs はミレニアム開発目標のことを指していて、先進国の支援により途上国の発展を目指すや、低所得国の健康衛生の強化の重視、数値目標を重視などといったことを目標に掲げています。SDGs との目標間の相互関係は、各目標が相互関係を持ち、1 つの目標が他の目標の手段になることもあり、SDGs は経済・社会・環境の 3 側面の相互連関を強く認識しています。

SDGs の成功要因として、多くのステックホルダーの巻き込み、ステックホルダー間の競争意識、ビジネス重視、広報戦略と連帯感の形成が上げられます。そして、実現に向けた動きとして、大学や公的セクター、産業界が働きかけることで、実現に向かって 1 歩進むと思いました。

2,心に残った授業回

自分が心に残った授業回は、14 回の勝又先生の授業で、ジェンダーについて深く考えさせて貰える授業だったなと思いました。自分の友達もジェンダーで悩んでる人がいて、自分にも相談してきた時、自分はなんて言葉をかけていいか曖昧になってしまったので、この勝又先生の授業を通して、その場合の答えが出てきました。他 13 回の授業も素晴らしかったですが、その中でも勝又先生の授業がとっても心に残りました。

3,身についたこと

自分はこの講義で身についたことは、ゴミや食べ残しといったムダを減らしていくことで地球温暖化の抑制をはかれることを知りました。そして、貧困に関しては先進国が発展途上国に支援してくことで貧困を抜け出すことが出来ることも知りました。すべて、各国の人々全員が働きかければ、抑制を阻止出来ることだと思いました。

4,これからどうするか

上記に述べた通り、全員が働きかければ地球温暖化や貧困問題が解決出来ることを知ったので、まずは自分からでも徹底出来るようにしていきたいです。具体的には、コンビニで飲み物を買わないでマイボトルを持ち歩いたり、貧困問題解決の 1 個として、募金活動に協力したり、ゴミの分別をしたり、小さいことでもひとつひとつ取り組めば改善に繋がると思いました。これからは、上記のことを徹底付けるようにしていきたいです。

SDGs実践講座最終レポート③

SDGs（持続可能な開発目標）に関する授業を受けることで、私たちの社会や地球環境に対する理解が大きく深まりました。SDGsは2015年に国連が採択した17の目標と169のターゲットから成り立っており、持続可能な未来を実現するための世界的な取り組みです。貧困や飢餓、ジェンダー平等、気候変動対策など、さまざまな課題を包括的に扱っているため、授業を通じて自分たちの生活と世界のつながりを意識する機会が増えました。

特に印象的だったのは、SDGsが単なる目標ではなく、私たちの生活や社会の仕組みと密接に関連しているという点です。例えば、環境問題について学んだ際には、地球温暖化の原因やその影響について深く考えさせられました。私たちが普段使っているエネルギーの多くが化石燃料に依存していること、それが二酸化炭素（CO₂）排出量の増加を招き、気候変動を引き起こしていることを知りました。また、森林破壊や海洋汚染なども深刻な問題であり、これらは遠い国の話ではなく、日本国内でも見られる問題であることを理解しました。

また、貧困や格差の問題について学んだ際には、先進国と発展途上国の間の経済的な格差だけでなく、同じ国の中でも貧富の差が拡大している現状に驚きました。特に、日本国内でも子どもの貧困が深刻な問題となっており、経済的に厳しい家庭の子どもたちが十分な教育を受けられない現状を知りました。

教育格差の問題は、実際に私も痛感してきました。沖縄という狭い世界で戦ってきて、ぬくぬく育った私たちが大学受験で全国相手に戦うのです。勉強する環境も、とてもよいとは言い難い環境でした。私立の高校も限られているため、おおよそが公立高校への進学、塾の過疎化、東京に比べると相当なハンデがあった気がしていました。

加えて、教育を受ける機会が限られてしまうと、その子どもたちの将来の選択肢が狭まり、貧困の連鎖が続いてしまう可能性があるという指摘には、大きな衝撃を受けました。

ジェンダー平等に関する授業では、世界的に見ても女性の社会進出が進んでいる一方で、まだまだ課題が多いことを学びました。日本においても、女性の管理職の割合が低かったり、男女間の賃金格差が存在したりすることを知り、私たちの身近な社会でもジェンダーの不平等が根強く残っていることを痛感しました。特に、家庭や職場での固定観念がジェンダー格差を生み出していることを考えると、一人ひとりが意識を変え、行動することの重要性を強く感じました。

加えて、LGBTQの授業では、実際にトランスジェンダーの方に講義をしてもらいました。トランスジェンダーとして実際に体験した出来事などを紹介してもらいましたが、私には、想像を

絶する体験をなさっていました。私の友達にもトランスジェンダーの方がいます。私の中ではみんなと同じように接しているつもりでしたが、「無意識のうちに相手を傷つけてしまっていたことがあったかもしれないな」と感じました。勝又さんの残した言葉で、私がいちばん印象に残った発言があります。

Aさん「トランスジェンダーだったこと私に言えばよかったのに！全然そんな気にしないよ！」

勝又さん「言えるはずがない。自分が周りとは違うってことを認識した上で、人に言うことがどれだけ怖いか。」

Aさんはもちろん優しさのつもりで言った発言であっても、勝又さんにとってはそれも怖いものであると仰っていました。彼らがその自分に自信を持って生きられるような環境を社会を作る事がどれほど大切なことか知り、またそれがどれほど難しいことかも知りました。私はLGBTQの立場ではないので、完璧に気持ちを理解することはできません。しかし、私なりに考えて寄り添っていくことを、今後はしていきたいです。

これらの授業を通して、私自身が日常生活の中でどのようにSDGsに貢献できるかを考えるようになりました。例えば、環境負荷を減らすために、使い捨てプラスチックを減らすことや、エコバッグを持ち歩くこと、電気や水の無駄遣いを避けることなど、すぐに実践できる行動があります。また、フェアトレード製品を選ぶことで、発展途上国の労働者の生活を支援できることも知り、消費者としての選択が世界に影響を与えることを実感しました。

さらに、SDGsの目標は個人だけでなく、企業や政府の取り組みとも密接に関連していることを学びました。企業の中には、環境に配慮した製品を開発したり、従業員の働きやすい環境を整えたりすることで、SDGsの目標達成に貢献している例もあります。授業で紹介された企業の取り組みを見て、社会の持続可能性を考える上で、ビジネスの視点も重要であることを認識しました。

SDGsは、単なる理想ではなく、私たち一人ひとりが実際に行動することで達成に近づくものです。この授業を通して、社会や環境問題について深く考え、自分ができることを実践しようとする意識が高まりました。今後もSDGsに関する知識を深め、自分自身の行動を見直しながら、持続可能な未来のために貢献していきたいと強く感じています。

SDGs 実践講座最終レポート③④

1. 全体の概要

この全学総合 SDGs 講座では、SDGs17 の目標について、日本と世界の現状、そして各ゴールごとに現在どのようなことが問題視されていて、どのような対策が行われているか、ということを講師の先生方のお話や、履修生とのディスカッションをキャンパスの垣根を越えて行った。

2. 心に残った授業回

第 7 回

全 15 回の講義の中で特に心に残っているのは第 7 回の講義でのうまい棒の会社の方の講義である。この講義を通して、一度自分自身の人生観や目標、そして自身の性格などを再確認することができた。

初め自分は SDGs の講座に参加する際も、どのような目的意識を持って参加しているのか、ということをおろそかに考えず、なんとなく面白そうだから、という理由でなんとなく参加していた。また、SDGs での取り組みなどについても、なんとなくの意識しか持っておらず、どこか他人ごとのような感覚で講義を聴いていた。しかし、この第 7 回目の講義を通して、一度自身の人生を振り返るきっかけをいただいたことで、そういった SDGs などの社会に貢献することの意義や大切さ、そして自分自身がどのようにして今後社会貢献していくべきか、ということをおろそかにせず、自分の中で再議論することができた。その講師の方のお話の中でも、特に「人生を野球のスコアの表として考える」という考え方が、自分自身にとってはすごく衝撃的で、とても感銘を受けた。自分自身、目の前の小さなことに執着してしまうことが多く、そしてそのことで毎回一喜一憂しやすいなど、かなり繊細な性格だったが、このお話を聴いてから、自身の人生はまだ 2 回表なのだから、そういった小さなことに執着せずに、より長期的な目で物事を考えよう、と思えるようになったと共に、自分に大きな自信がついた。それに加えて、より社会に貢献する生き方をしたい、とも思えるようになると共に SDGs の諸問題についてより知ろう、という気持ちを作ることができた。

3. 身についたこと

この講義を通して大きく 2 つの力が身についた。1 つ目は、より多角的な視点で物事を考える力である。この講座では、様々な学年、様々な学部学科、そして様々なキャンパスに所属する履修生と共に毎回グループディスカッションを行ってきた。そのため、自身は経営学部第 2 部経営学部であったが、毎回他の国際学部や法学部などの 2 部学生、そして同じ学部でも第 1 部に所属している履修生とも関わり、議論をする機会があったため、自分の持ち合わせていないたくさんの視点を知ることができた。また、同じ学部でも全く

考え方が異なっていたり、自身の意見について反論を受けたこともあり、その都度新たな視点、考え方を開拓していくことができた。自身は経営的な視点で物事を考えることが得意であるため、何か諸問題を解決していく中でも、予算や経営戦略、運営方法などの経営的な視点で物事を捉え、考えることが得意であるが、他の学部、例を挙げると国際学部では、日本だけでなく世界の諸問題とも比較をしていたり、それらの国で取り組んでいる解決策の中で有効なものを模倣することなど、国内に留まらずよりグローバルな視点で諸問題の解決策について考えている人が多かったり、法学部では日本と世界の法律や、諸外国での法律の適用問題などについても意識している人が多く、自分が気づかない視点が様々あったため、これらを知れたことは自分がこれから社会に貢献していくにあたって、大きな利点であったと心から思う。

2つ目は、課題解決力である。各講義では、その問題についての現状と、それらを改善するための対策をディスカッションを通して議論したり、日本、世界で行われている解決策について学ぶ、などのことを行った。そういった、現状を知り課題を見つけ、それらを解決するために多角的な視点で物事を見る、そしてより具体的で建設的で実行可能な解決策を提案する、という課題解決のプロセスを各講義で行なっていたため、より課題解決への取り組み方が大きく改善されたと自分自身とても強く感じている。また、まずは現状を知ることから始め、そこから課題を発見し、より本質的な解決策を提案したり、特にSDGsなどでは初めから掲げられている目標や達成すべきゴールが定まっていることから、ゴールから逆算して物事を考える、という逆算思考が身についた。加えて、ここで身につけることができた課題解決力というのは、とても自分にとって大きな強みとなる力であると同時に、個人ワークだけではなく、グループ活動でも活かすことができるものである、ということも大いに実感した。

4. これからどう活かすか

自分はこれらの講義を通して身につけた力を自身の専攻する分野でより活かしていきたいと思う。一つの問題を解決するにあたって、一人の視点、一つの見方だけでは根本的解決や建設的な発展には繋がらないと私は考える。現に、この講義を通してそれを大いに実感した。そのため、より発展に繋げるためには、ここで得た課題解決力と多角的な視点が必須となると言える。ここで得た力を活かして、自身の専攻する分野について、その視点のみならず他分野の視点も活用し、さらに課題を瞬時に見抜き本質的な解決に繋げていきたい。そして、そのことを通じて、より社会に貢献し、SDGsなどの目標達成やより持続可能な社会にしていく、ということにも努めていきたい。

1. 全体の概要

今学期の 15 回の授業で SDGs について全く興味がなく無知であった私が学んだことやこれから学んだことをどう生かしていくかを書きます。

2. 心に残った授業回

第 13 回「ポーランドにおける原発計画と市民意識」

この授業で私は原発の恐ろしさを学ぶことが出来ました。元々、原発は東日本大震災で「危険なもの」という意識はありました。当時私は 6 歳で事故の二次災害の被害の大きさが分からず、「原発」が「危険」であるという意識でした。今更原発について調べなおすという事もするはずがなく、知識はゼロに等しいものでした。「チェルノブイリ原発事故」については頭の片隅に事件の名前を憶えていた程度でした。ザルノヴィエツで原発建設を開始してその 4 年後に事故が起こった。というの知りませんでした。世界中で化石燃料に依存している現状は何も変わっておらず、原発が危険であっても使いたいのも理解できました。ポーランドの 2030 年までの目標も沢山あって、自動車の電化割合を 100%にするなどありますが、可能なのか？と信じられない目標でした。結局、目標達成のために国産エネルギーによる代替が必要であるという認識が高まり、それが原発と風力発電という選択に帰結。とありましたが、危険な事故を多発していてもなお、原発の発電量がすさまじいのだと思いました。

自分の居住地の近くに原発が建設されたら、に関しては、マイナスなニュースばかりが目に入るせいで私自身反対でもし建設されてしまったらすぐには難しいですが、引っ越すという選択肢をとるのではないかな。と考えました。ですが、先生のお話でもあったように原発近くの住民が離れていかないようにアウトレットなどの施設を充実させる工夫も国がしていて、ここに住み続けてほしいのかな、と感じました。でも私の中で不思議に思ったのが、「なぜ危険な原発施設の近くに民間人が住んでいてほしいのか」でした。万が一、不慮の事故で規模が大きいものがまた起こってしまったら、当時よりかは対策などもあるかとは思いますが、死者が出ないとは言い難いものだと思いますので、そこだけがなぜなのか。と思いました。

3. 身についたこと

原発についての危険である知識。今回の授業を受けて自分で調べた内容で、チェルノブイリ事故と東電福島事故の内容をもとになぜ原発が危険であるかを学んだ。

チェルノブイリ事故では放射線での死亡者は 8 名（小児甲状腺）で放射性物質を含むミルクの摂取制限が遅れたため発生した小児甲状腺ガン患者の大部分は、手術で治療された。更にチェルノブイリ事故では事故収束に当たった作業員 49 名が死亡している。公衆の発がんや死亡の増加は、線量が低いので、疫学研究で観測するのは困難であろう。（UNSCEAR の HP）

東電事故については、放射線による健康被害は観測されないであろう。

（UNSCEAR2013、2020）

福島第一原子力発電所の事故の原因は、原発の安全を確保するために重要な「止める」「冷やす」「閉じ込める」機能が津波によって失われたことだった。事故当時、地震の揺れを感知した運転中の原子炉はすべて自動的に停止し、燃料が燃えることを「止める」機能は働きました。しかし、地震によって外部電源が失われ、さらに、津波によって発電所内が浸水、すべての電源と原子炉冷却機能が失われた結果、「冷やす」が出来なくなりました。更に、「冷やす」機能を失った原子炉内は高温になり、炉心が損傷して、そこから水素が発生。この水素が原子炉建屋内に爆発を起こしてしまい、放射性物質が発電所の外へ放出されてしまって、「閉じ込める」こともできなくなってしまった。

等の知識が身についた。

4. これからどう活かすか

こうした事故の背景から、普段から原発の安全性に「絶対はない」として、不確実なリスクにも対応できるよう、安全性にあぐらをかかないように意識を持つようにしたいと思っています。

原子力防災会議では、2013 年 9 月 3 日、「関係自治体による避難計画の作成などに、関係省庁が全面的に取り組む」という方針が決定されました。

これを受けて、原発のある全国 13 の地域において「地域原子力防災協議会」が設置され、内閣府や国のすべての関係省庁と、避難計画を策定する関係自治体などが参加しています。この「協議会」の枠組みの下で地域防災の課題について平時から話し合い、一体となって地域防災計画・避難計画の策定や、充実化の取り組みを進めている。

更に福島第一原発の事故以前は、避難計画が自治体任せだったのではないかという批判もありました。そこで、地域原子力防災協議会では、国も計画の策定にかかわり、地域が抱える原子力防災の課題をともに解決しているのです。私は、それを踏まえてこれから生きていくときに原子力発電が減らしていけるようにほかの発電方法なども個人的に考えてみたり、普段から使う電力量を減らしていけるように生活に気を付けてみたりしていければいいと思いました。

SDGs 実践講座最終レポート③⑥

1. 全体の概要

本講義では、SDGs の 17 のゴールに関するお話を毎回、違う講師の方に伺って、その話を基にグループで意見を話し合いました。第 1 回授業では、パキスタンにルーツをもつアルーサさんの人生のお話を聞きました。日本における外国籍住民の人口は年々増えていて、それに伴い、日本語の指導が必要な生徒や日本語がネイティブでないことによって、高校や大学の進学率の低さや就職の際の格差など深刻な問題がある。授業では実際に外国で生まれ育ち、途中から日本に来た方の自身の体験したことをたくさん聞くことができました。第 2 回授業では、「世界がもし 100 人の村だったら」の詞をもとに貧困について考えました。世界に貧しい人、栄養が不足して死にそうな人、戦争や紛争におびえている人がこの授業を受ける前まで想像していたよりも多いこと、雨露をしのぐことができる家があって、安全な水、生活に必要なお金、車、教育、インターネットがあり文字を読める私はすごく豊かで恵まれていて、そしてそれは普通のことではないと改めて気付かれました。第 3 回では、貧困についての講義を受けました。日本はインフラ、水、食べ物、家、服などの生活に必要不可欠なものを持っていない人は少ないけれど、教育環境などまわりと比べて相対的に貧困である人が多い傾向にあることを知りました。「日本政府は 2030 年までに貧困を半減できるのか」という問いが投げかけられたが、これは極めて困難であると感じる。第 4 回では、地球温暖化の最も大きな原因である二酸化炭素に着目した授業を受けました。二酸化炭素の排出を止めることはできないけれど、遅らせることはできると思いました。カーボンニュートラルにおいては今すぐにできることがすぐに浮かんだので実践していこうと思います。第 5 回では移民問題やマイノリティーの人々との共生について考えました。様々な信仰、思想をもつ人が生きる世界で、人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属することを理由に迫害される人々が大勢いることが現状で、それってすごく悲しいです。自由や個人の尊重はもちろん大切だけど、多様性が推進されてマイノリティーの人がそれを主張するとバランスや均衡がなくなって大きな集団としての力は弱くなると思います。多様性は表向きはすごくいいことだけど、本当にそうなのか疑問が生まれました。第 6 回では飢餓についての授業を受けました。人として生まれて生きるための食糧がないことは不憫すぎると感じました。今、慢性的に飢えている人、栄養失調で亡くなる子供はものすごく多いということを知りました。知ることは第一歩ではあるけれど、知っただけではすぐに解決しなくてはいけないことを解決することさえできませ

ん。ただただ悲しくなります。第7回は楽しい授業でした。うまい棒を食べながら授業を受けました。うまい棒の会社で行われていること、思い付きを大切にすることや子供にたくさん買えるワクワクを与えるための工夫などを知ることができました。第8回ではグループが作られました。同じグループにインドで発展途上国の貧困を見たことがあるメンバーがいて、授業で聞いたり、写真で見たりしてた貧困の現状が本当に起きていることが実際にそれを見て感じたことがある人に聞くことができ、人ごとにできないと感じました。第9回ではSDGsの歴史に触れる回でした。SDGs17の目標には人の目を引き付ける工夫があることを知れたのは興味深いことでした。また、第9回では「水」についての講義も受けました。水がきれいなことって日本の素晴らしい技術のおかげで、他の国では水道水を飲むことができないだけでなく、水に含まれる病原体によって病気になってしまう人がたくさんいると知りました。第10回では、ノルウェーの住宅事情について学びました。将来の住宅の候補に共同住宅が今までありませんでしたが、共同住宅には出会い、交流、だけでなく広い家だからこそできることもあり、メリットがたくさんあります。家はお金もすごくかかるので、共同住宅は良い制度です。第11回では水道水について考えました。やはり日本の水道水は素晴らしいようでした。第13回ではポーランドの原子力についての講義を受けました。第14回では「トランスジェンダーから見える世界」という授業で、当事者の講師の方の話を伺いました。授業の中で「あなたの性別を思い浮かべて下さい」「その根拠は何ですか」という質問があって、改めてこの質問をされると考えさせられました。自分の性別に違和感を持つ感覚がどんなかはわかりませんが、性の捉え方には身体の性的特徴、性自認、性的指向、性表現の4つの捉え方があって、はっきりと男女に分けなくてもいいのかなと思いました。第15回では発表をしました。私のグループでは「絶対的貧困の現状と私たちができること」の内容で発表をしましたが、事前準備が足りなかったというのが正直な感想です。貧困についてもっとたくさんケースを知って考えたいと思います。

2. 心に残った授業回

第5回

私が一番印象に残った授業回は「移民・難民とわたしたち：共生社会へのカギ」の回です。世界に難民がたくさんいることがすごく嫌だと思いました。貧困や戦争、紛争などの悪い環境で生きている人はたくさんいて、日本はどちらかというと貧困と紛争・戦争はほとんどないので、難民を受け入れる側になります。しかし日本にも少子高齢化で労働力が不足し、難民の受け入れが労働力の確保につながったり、経済の発展につながることもあります。難民が移動すること

は良いこともあると思います。その背景で、難民は「人種、宗教、国籍、政治的意見や特定の社会集団に属することを理由に迫害されるか、迫害を受けるおそれがある」と定義されていますが、そのような人々がたくさんいると思うとすごく悲しいです。生きるとはなにか、哲学的なことを考えてしまいます。私ができることはほとんどありません。自分のまわりに難民の方はいませんがそのような方と出会ったら受け入れて差別しないことや身の回りの人を差別しないことくらいしかできることが浮かびません。

3. 身についてしたこと

SDGs の 17 のゴールズを学んで、世界の多くの問題に対する理解と関心が深まりました。貧困と格差の実態については、授業を通して貧困がどれほど公判で深刻な問題であるかを実感し、発展途上国のみならず日本にも相対的貧困の問題があることを知り、貧困が必ずしも物質的な不足だけでなく、教育や学びの機会の不足にもかかわっていることを学びました。環境問題への意識としては、地球温暖化や二酸化炭素搬出に関する授業で、自分たちができることを積極的に実践する重要さに気付きました。また、カーボンニュートラルに向けた取り組みや、エネルギー問題の解決に関する具体的な取り組みを考え、自分にできることを学びました。多様性と共生という点では、移民問題やマイノリティーとの共生についての授業で、多様性の重要性を感じました。また、性別の捉え方に関する授業を通して、性自認や性表現について新たな視点を得ることができました。当たり前を感じていることが、そうではないことの多さに驚かされるとともに、当たり前を疑ってみることの重要さにも気づくことができました。そして、SDGs を学ぶことで、社会の一員として自分ができることは何かを考える機会が増えました。

4. これからどう活かすか

今後、グループ発表を通じて興味を持った貧困問題についてもっと学び、どんな形で貢献できるかを考えていきたいと思っています。多様性については異なるバックグラウンドを持つ人々と関わる際には、その人の立場や視点を尊重し、偏見無く接することを心がけることが第 1 歩だと思います。そのためにもマイノリティーの問題についての理解を深め、周囲の人に対しても尊重する関わり方をしていきたいと思っています。この授業での第一歩である SDGs を知ることが授業を受ける前に比べて備わったと思うので、これからは具体的な実践を考えていきたいと思っています。

SDGs 実践講座最終レポート③⑦

私が心に残った授業はやはり、最終授業である「ジェンダーレス」の授業だろう。

近年世間一般的に LGBTQ が認知されてはいるが、「認知はしているが深く理解はしていない」という層が大半ではあると思う。

LGBTQ という存在は知っているが、「身近に居ないためにまだ遠い存在」という意識が強いのであろう。

私も 18 歳まではそうであった。

しかし私の身には身をもって体験したこともある。

19 歳になる年の夏にトランスジェンダーとなった現女の子から恋心を寄せられた事をきっかけに LGBTQ というのは思ったより遠い世界の存在なのではなくて、私の認知している世界に近い距離にいるのでは無いかと思い始めた。

そして今回の第 14 回の授業でさらに分かったことがある、それは世界の 10 人にひとりが LGBTQ というのだ、これは私の小学校の 1 クラスの人数が 30 人だったので 1 クラスに 3 人は LGBTQ ということになる。

これを多いと捉えるか少ないと捉えるかは人それぞれであるが私は多いのではないと思う。

前述の通り近年 LGBTQ の認知は広まってはいるが、私達は未だ人の外見だけで心の性別まで分かった気になっている節があるのではないと思う。

例えば、ゲームセンターのプリクラエリアを例にあげるとしよう。

近年になってプリクラエリアは「男子だけ」のグループは入れないのだ、それは性犯罪防止などの理由が挙げられるのだと思うが、今一度想像して欲しい、見た目はたしかに男の子に見えるが心の性別が女の子だった場合、その「男子禁制」の案内を見て何を思うだろうか、私がその立場なら酷い自己嫌悪としくも無い「私は男なのだ」という自覚を無理強いされるのでは無いか。

確かに、全てを LGBTQ に合わせる訳にもいかない、合わせたあとの世界でそれを悪用する人が現れて性犯罪が多くなってしまふのは火を見るより明らかであるからだ。

しかし、これは私の身に付いたものにもなるのだが私達が「個人個人で見た目だけで心の性別を判断しない」という意識はそこまで難しいものでは無いのだろうと考える。

実際に第 14 回の授業から私は「見た目だけで心の性別を判断しない」ということはより一層身についたと自負する。

例をあげれば、「彼氏いる?」「彼女いる?」などの質問を「恋人いる?」という質問に変えてみたり、メイクをする男子やボーイッシュな女子に偏見を持たなかったり、個々で LGBTQ に対してすぐ出来るアプローチは探せば沢山あると私は考える。

この議題について、「これからどう活かすか」というリクエストは難しいが、それもいく

つか考えられるであろう。

例えば、前述の通り恋人の有無についての質問の仕方を変えていたりだとか、LGBTQ が一般になる前のファッションのステレオタイプを見直すだとか活かせることは沢山あると思うが、私が思うに「こちらは LGBTQ 側にこういう事をやってあげるよ」のような意識は要らないのではないかと考えるし、LGBTQ 側の人達もそれはありがた迷惑で必要としていないのではないかと考えるので「どう活かすか」は難しいが、変に意識せず、そもそも性別にとらわれず「性別で判断」を「その人個々の個性」へ変換する意識が 1 番のアプローチになるのではないかと思う。

人種差別や障害を持つ人に対しても共通することだとは思いますが、人の肌の色に対して肌の色が違うと認識するよりはその人の個性として判断したり、「そういう障害があるからこういう事をやってあげるね」という意識よりはその人には得意苦手があるとして判断したり、つまりはもっとフラットな目線で、僕たちの「勉強が出来る、出来ない」とか「運動が出来る、出来ない」のようなもっと身近な意識に寄せることが、LGBTQ の理解にも共通して繋がるのではないかと考える。

確かに、世間はトイレを男女で分けているし、旅行に行った先で風呂を男女に分けていたりで難しい場面も多くまだあるし、改善すらもまだ難しい。

LGBTQ を完全に認めた世界で何が起きるかというものの中でやはり避けて通れない物は「性犯罪」であろう。

もし女子トイレに LGBTQ のフリをしたストレートの男性が入れるとしたら？もし女子更衣室に LGBTQ のフリをしたストレートの男性が入れるとしたら？まず真っ先に思い浮かぶのは性犯罪である、全てを合わせるのは難しいことだ。

しかしこれ程、LGBTQ が一般化し始めている世界で LGBTQ を少数であるから無視するという事は愚かであることも間違いない。

私が考えるのは近年 AI も進歩しているので、コロナ禍によく見かけた顔をかざすだけで体温が測れるようなもので、ホルモン値を分析しトイレを分けるだとか、LGBTQ 専用のパスを作るだとか色々考えはできるが、どれも机上の空論であることは間違いないので、第 1 に必要なのは私達も LGBTQ の立場を理解すると同時に LGBTQ の人たちも私たちの立場を理解する歩み寄りなのではないかと考える。

全体の総括にはなるが、ストレートである私を含めた大半の人間にできることとは、LGBTQ に対して決して遠い存在だとは認識せず、だからと言って、LGBTQ に対して過度な意識や対応もせず個性ととらえて、なにも変えることなくフラットに関わることが最善の意識なのでないかと考える。

1. 全体の概要

SDGsについての授業を受けて、持続可能な社会を目指すことの重要性を改めて実感しました。特に「4.質の高い教育をみんなに」に関する内容が印象的でした。私は夜間大学に通っており、同じ学部には日中は仕事をしながら学んでいる人も居ます。このような環境で学べること自体が、教育の機会の平等につながっていると感じました。しかし、世界には依然として教育を受けられない人々が多くいます。教育は貧困の連鎖を断ち切る大きな力を持つため、すべての人に平等な学習機会を提供することが重要だと考えます。

また、「8.働きがいも経済成長も」についても考えさせられました。仕事をしながら学ぶ中で、労働環境やキャリアの選択肢について考える機会が増えました。経済成長とともに、働く人がやりがいを持てる環境を整えることが求められていると感じます。SDGsの目標は単なる理想ではなく、私たち一人ひとりの行動にかかっていると改めて思いました。

2. 心に残った授業回

どの回も印象的で多くを学ぶことができましたが、特に印象深かったのは第10回、水村先生のノルウェーにおける持続可能な住居供給とその政策についての授業でした。その授業では、ノルウェーの持続可能な住居供給に関する取り組みを学び、日本の住宅問題への応用可能性について考えさせられました。特に、環境配慮と共同性のバランスを重視する姿勢は、日本にとっても参考になると感じました。

例えば、「Gaining by Sharing」のように、環境負荷を低減しながら住民のコミュニティを活性化させる取り組みは、日本の都市部でも有効だと思います。近年、日本でも単身世帯や高齢者の増加により、地域のつながりが希薄になっています。GbSのように、共用スペースを活かした交流の機会を提供し、住民自身が管理に関わる仕組みを導入すれば、社会的孤立の解消につながるのだなと感心しました。

また、自治体主導の「BOPILOT計画」は、日本の公営住宅政策にヒントを与えます。日本では、公営住宅の供給が限られ、高齢者や低所得者層が住居確保に苦労しています。一方で、ノルウェーのように行政が積極的に市民と協力し、デジタル技術を活用しながら住宅政策を策定することは、日本の住宅政策の透明性向上にも寄与すると考えられ、参考になりました。

ノルウェーと日本の共通点として、持ち家志向が強い点が挙げられます。しかし、ノルウェーでは持ち家政策と同時に、社会福祉サービスも充実しており、住宅市場の安定化に成功しています。一方、日本では住宅価格の高騰や賃貸市場の不安定さが問題視されており、ノルウェーのような「持続可能な住宅政策」の導入が急務だと感じました。

第10回での学びを通じて、住宅は単なる「住む場所」ではなく、「社会とのつながりを生む場」であることを実感しました。日本でも、環境に配慮しつつ、住民主体のコミュニティ形成を促す住宅政策を進めるべきだと考えます。

3. 身についたこと

自分の参加したグループ6ではSDGs目標4「質の高い教育をみんなに」をテーマに、「インクルージョン」「インテグレーション」「ダイバーシティ」の観点から先進国の教育問題を探求・発表しました。この過程で、教育の課題が複雑に絡み合っていることを学び、多様な視点を持つ重要性を実感しました。

まず、「インクルージョン」では、障がいや経済的困難を抱える学生の支援の必要性を強く感じました。合理的配慮の制度は存在するものの、現場での対応には課題があり、学校・企業・地域が連携して多様な学びの機会を提供することが重要だと考えました。

次に、「インテグレーション」では、移民や留学生の教育問題に着目しました。言語や文化の壁によって十分な学習機会を得られない子どもがいるため、二言語教育や異文化理解を深めるプログラムの充実が求められます。教育が知識を伝えるだけでなく、社会統合の役割も持つことを改めて認識しました。

「ダイバーシティ」の観点からは、ジェンダーやLGBTQ+の学生に対する教育の課題を考えました。理系分野における女性の進学率の低さやジェンダーステレオタイプの影響が依然として存在するため、キャリア教育の充実や多様なロールモデルの提示が必要だと感じました。

また、デンマークの教育制度を参考にしながら日本の教育問題を考えることで、学びの多様性や自主性の重要性を再認識しました。特に、デンマークの「ゆとりある学習環境」や「生徒主体の教育」は、日本の詰め込み型教育や画一的な評価制度の課題を解決するヒントになると感

じました。日本でも、個々の興味や能力に応じた学びの機会を増やし、もっと自由度の高い教育を取り入れることで、創造力や主体性を育む環境が整うのではないかと考えます。

4. これからどう活かすか

今回の探求を通じ、教育制度の改善には国や政府だけでなく、私たち一人ひとりの意識や行動も影響を与えることを学びました。今後、多様性を尊重し、誰もが学びやすい環境づくりに貢献できるような視点を持ち続けたいと思います。

現在、世界では貧困や人権などの様々な改善すべき課題がありそれぞれの課題について議論と対策が行われている。しかし、それは国が各々で取り組んでいるわけではなく SDGs と言われる開発目標を基盤にして一丸となって取り組んでいるのだ。この SDGs とは「Sustainable Development Goals」の略称であり持続可能な開発目標を表し、正式名称は「我々の世界を変革する持続可能な開発のための 2030 年アジェンダ」となっている。2001 年に策定され 2015 年に達成期限を迎えた MDGs の後継として 2015 年 9 月に国連サミット内で採択された。SDGs は 17 個の目標と 169 の目的から構成されており、「地球上の誰 1 人として取り残さないこと」を目指している。また開発途上国だけでなく先進国も対象として、世界全体で自国や他国の課題に取り組んでいる。17 個の目標は以下の通りである。

(1)貧困をなくそう:SDGs において最も根源的かつ主要な目標の 1 つとされる。

(2)飢餓をゼロに

(3)すべての人に健康と福祉を

(4)質の高い教育をみんなに

(5)ジェンダー平等を実現しよう

(6)安全な水とトイレを世界中に

(7)エネルギーをみんなにそしてクリーンに

(8)働きがいも経済成長も

(9)産業と技術革新の基盤をつくろう

(10)人や国の不平等をなくそう

(11)住み続けられるまちづくりを

(12)つくる責任つかう責任

(13)気候変動に具体的な対策を

(14)海の豊かさを守ろう

(15)陸の豊かさを守ろう

(16)平和と公正をすべての人に

(17)パートナーシップで目標を達成しよう

第 3 回の「世界と日本の貧困について考えよう」が最も印象に残っている。テレビ番組やインターネットでは、日本の貧困よりも戦争している地域の貧困や発展途上国の貧困をより多く扱っている。そのため私は日本では貧困の子どもは少ないまたはほぼいないと考えていた。しかし資料やお話を聞き、他国にばかり目を向けて寄付をするのではなく日本の貧困問題に目を向けて解決するために行動する必要があると考えた。また日本の貧困問題は子どもと大人どちらも深刻であり両方の支援が大切なのだ。さらに日本は自然災害が多く、災害の影響が深刻化する事によって貧困に陥る場合もある。最近、とある問題が提起され始めている。昨年の正月に起こった能登半島地震の復興が進んでいないのにも関わらず、海外への支援を手厚くすることに対し批判の声が上がっている。能登半島の復興が進んでいないのには、今までの被災地と異なり極めて僻地であることで交通の便が悪く、元請けの解体業者がその地域にいないため一年経った現在も復興活動が進んでいないのだ。これ以上長期化すると、元々住んでいた人が移住を余儀されなくなって

しまったり、貧困になってしまったりする可能性がある。同様にひとり親家庭の貧困も問題視されている。共働きの家庭が増えている現状で周りの家庭と比べて生活に格差が出る「相対的貧困」に陥る家庭もある。日本は欧米をはじめとした先進国の中でも相対的貧困率が高い。日本の2021年時点でひとり親世帯の相対的貧困率は44.5%となっている。特にシングルマ

ザーの家庭の貧困が懸念されている背景には女性が男性に比べると正規雇用されにくく非正規で働いているため収入が少ない。このような現状を改善するために、国や各自治体、NPO 法人が支援する必要がある。

私は本講義を通し、あらゆる問題に対して自分は何ができるかを考えられるようになった。気候変動や経済成長のようなひとりでは改善することが難しい課題であっても一度どうするべきか、さらにもし自分が社会人になった時どのようなアイデアを出せるかを考えてみるのが大切だ。その上、初歩的なことだが何も知識がない状態で日本とは関係ないことと考えるようになった。上記でも記したように、第3回の講義を受けるまで日本で貧困が深刻になっていることを知らなかったのだ。この講義以外にも、勝手に日本では問題になっていないと決めつけてしまっていた目標が多数あった。さまざまな社会問題に関心を持ち、情報を得て行動するために意見交換も大切だ。

私はSDGsがどこか他人事で自分にできることは特になんか思っていた。しかし講義内の先生方のお話やグループワークを通して自分達にできることは何かを話し合ったことで、一人ひとりの意識と行動がSDGsを達成する上で重要であると気づいた。これを踏まえて今後、以前から気になっていたボランティア活動をしたい。具体的に項目4に関わるキッズドアというNPO法人に所属し子どもの学習の手助けをする。さらに、項目5のジェンダー平等についてより深く理解できるように一年に一度開催されるLGBTQ+への理解と人権について考えるイベント「東京レインボープライド」にも行ってみたい。

(2035文字) 参考文献

- ・テキスト
- ・ <https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/about/>
- ・ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>
- ・ <https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/>

SDGs 実践講座最終レポート④⑩

総合の授業を振り返って、一番自分が成長したと言える部分は世界の SDGS の現状を詳しく知れたことです。ニュースなどで地球温暖化、LGBT などが世の中や世界で重要視されていて、問題に上がっていることは十分に知っている。だけど、この授業のように 90 分弱講義を聞き、話し合うことは滅多にないと思うし、貴重な経験だったと思う。また、一つ一つの授業の進め方が異なっていて、水の飲み比べ、チームでのプレゼンテーションなどの参加型授業もいくつかあり、中でも自分たちで SDGS の興味がある目標を選び、発表する授業では大学の緑プロジェクトについてたくさん考えたし、授業外の時間も活用して試行錯誤したのですごく良い経験が出来たと感じる。

僕が印象に残った授業回は LGBT の話です。なぜかというとその授業を受けて、LGBT の問題は他人事ではないのだと感じたからだ。その時の講師がトランスジェンダーで、僕はその人が自分たちにトランスジェンダーということを公表するまで、全くわからなかったし、その事実を知った瞬間、すごく驚いてしまった。

また授業の中で、私たちは人生の中で何回も LGBT の人に会ったことがあるという話があり、初めはその意見を否定していたけど、世界にはトランスジェンダーだけではなく、たくさんの性があり、しっかりと区別しようとする、8 つほど？あるということを知り、こんなにも区別できるんだという関心もあり、驚きもあった。なので、本当に他人事ではないのだと感じたし、その事実を知れてよかったと思った。その授業を受けたことにより、まずどんな発言にも人を傷つける可能性があり、被害者が負った傷は一生消えないことがあるということを知った。

講義の中で、小さい頃に女の子と付き合っていたことがありそれを部活の顧問に（女性同士で恋愛をすることは気持ち悪い）の様なことを言われたという経験談を聞いた時、僕はその顧問は最低だと思った。今は大学生で、物事の良し悪しが少しが理解できるからそう思える。だけど、もし僕が小学生、中学生の時にこのような場面に遭遇した時に、きっぱりとその意見を否定できるかどうか聞かれたら、わからない。周りの意見に合わせて、その人たちを批判し、傷つけてしまう可能性も十分にあると思う。なのでこの話を聞いて良かったし、この辛い経験を私たちに話してくれたことをすごく感謝したい。

LGBT についてどのくらい興味があるという問いがあったが、僕は興味はあるけど行動に起こさないという部類はいると思う。だけどこの部類に入る人が一番多いし、一番傷つける可能性が高いと言われて、自分も納得した。

LGBT について関心が増えて、もっと関わっていききたいので、ボーイズドントクライなど LGBT の映画を見るなど自分ができることを少しづつやっていきたい。

これからどう生かすかの問いに対して、まず私の班で考えた 13、15 の目標で、学校に緑を増やすという計画をいつかは実現したいと考えている。北海道大学の研究で、キャンパス内に緑を増やし一面緑にするということをしたが、それにより、生徒のリラックス効果が上昇し、常に新鮮な気持ちで勉強できる様になったと言われていた。

それを参考に東洋大学でも屋上など空いているスペースに緑を増やしたり、グリーンカーテンなどの大規模な企画もありだなと思った。

また、貧困問題に対して、小野さんの授業を受けて凄く深刻だなと思ったし自分に出来る事は沢山あるなと感じた。まず、僕は貧困ということを大雑把に考えていて、アフリカの子供が貧困の広告にのって可哀想としか思っていなかった。だけど今、もっと深刻な状況にあり、極度の貧困という 1 日 200 円以下で生活をしている人が 10 パーセント弱もいるということに驚いたし、人口が上がると貧困の割合が上がるので、世界は人工的にも、食料、土地的にも危険なのだと実感した。自分みたいに貧困について関心がそこまで無く、大雑把に考えている人が多いしまた、現状を知っているだけで止まっている人もいるので、僕はまず拡散が大事だなと感じた。また、講演会などにも参加して、実際に現地に言った人体験談とかもきいてみたい。

最後にこの授業で話し合いの重要性を学んだ。特に驚いたのは毎回、僕が思いつけないような逆の発想をする人がいて、その意見に自分が納得できると言うことだ。貧困について班の人と話し合った時、僕は募金をする、支援を広げるなどの普通の意見しか出なかったけど、班の 1 人が貧困層の人達を助けるのではなく、彼らが助ける側になるという意見をだした。空き家を活用したコミュニティだったり、生活に困ってる人が職人の技を学び、自身の収入に繋げるということが出来たら良いという意見がでて、凄く感心した。

また、自分の少し曲がった意見もみんな頷きながら真剣に聞いてくれて、嬉しかったし、自分の意見を少し訂正されたり、反論されたりするけど、よくよく考えてみると根本的に間違っていることを気づくことがあったし、自分の考えを整理するために話し合いは常に必要だなと思った！

SDGs 実践講座最終レポート④

社会・国際貢献、繋がりと知の共有による、地球社会の一員として多くの人と繋がり、知識を共有することともに、一人ひとりがリーダーシップを発揮し、目の前の課題を提示し解決する為に挑戦し続けることを目指します、ガイダンスの素晴らしさが印象深く残りました。SDGs（持続可能な開発目標）は、2015 年に採択された後、持続可能な社会を実現するための 17 の目標を達成するために、多様な主体が取り組んでいます。政府もこれらの 17 の目標を実現するため SDGs を推進しています。

日本政府は、SDGs に関連する施策を実施するため、全国務大臣を構成員とする「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部」を設置しました。2016 年 12 月 22 日に「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」課題を決定し、優先課題として、2030 アジェンダが掲げる 5 つの P（People：人間、Planet：地球、Prosperity：繁栄、Peace：平和、Partnership：パートナーシップ）に対応した 8 項目を示しました。さらに、2019 年 12 月に開催された第 8 回推進本部会合では、2020 年に向けた具体的な SDGs 推進策をまとめた「SDGs アクションプラン 2020」を決定しました。

社会貢献・国際貢献「繋がりと知の共有による社会・国際貢献」社会の一員として、多くの人と繋がり、知識を共有することを重視しています。そして、一人ひとりが個々の役割を発揮し、目の前の課題を提示し解決するために挑戦し続けます。

17つの目標は1つ目貧困をなくそうすべての場所ですべての貧困を終わらせる。2つ目飢餓をゼロに、飢餓をなくし、すべての人々が栄養のある食料にアクセスできるようにする。3つ目すべての人に健康的な生活を送り福祉を享受できるようにする。4つ目質の高い教育をみんなにすべての人々に質の高い教育を提供し、学びの機会を確保する。5つ目ジェンダー平等を実現する、それからすべての女性と女児が平等な権利を享受できるようにする。6つ目安全な水とトイレを世界中に、人々が安全な水と衛生的なトイレを利用できるようにする。7つ目エネルギーをみんなにそしてクリーンに、すべての人々が安価で信頼性が高く、持続可能なエネルギーにアクセスできるようにする。8つ目働きがいも経済成長も持続可能な経済成長、完全で生産的な雇用、働きがいのある仕事を提供する。9つ目産業と技術革新の基盤を作ろう、持続可能な産業化を進め、技術革新を支援する。10つ目人や国の不平等をなくそう、国内および国際的な不平等を削減する。11つ目住み続けられるまちづくりをすべての人々が安全で住みやすい場所に住むことができるようにする。12つ目つくる責任つかう責任、持続可能な消費と生産のパターンを確立する。13つ目気候変動に具体的な対応を強化し、温室効果ガス排出量を削減することによって環境を守る。14つ目海の豊かさを守ろう、海洋資源を保護し、持続可能な自然環境を守る。15つ目陸の豊かさを守ろう、陸上の生態系、森

林、砂漠化防止、生物多様性を保護する。16 項目平和と公正をすべての人に、すべての人々が平和で公正な社会に生きることができるようにする。17 項目パートナーシップで目標を達成しよう。

持続可能な開発目標を達成するために、国際的な協力とパートナーシップを強化する必要性があると考えられる。環境問題への理解、SDGs には、地球環境を守るための目標が多く含まれています。例えば、「気候変動に立ち向かう」（目標 13）や「海の豊かさを守ろう」（目標 14）など、地球規模の環境問題に対する理解を深め、どのようにして自然環境を保護し、持続可能な方法で利用するかを学ぶことができます。社会的な課題への意識向上貧困や飢餓、教育、ジェンダー平等、健康と福祉などの社会的課題にも焦点が当てられています。例えば、「すべての人に教育を」（目標 4）や「ジェンダー平等を実現しよう」など、社会的公平性を高めるために何ができるかを考えることができます。経済的な繁栄と持続可能性、経済の成長と繁栄を追求しながらも、その成長が環境や社会に与える影響を最小限に抑える方法を学びます。働きがいも経済成長も産業と技術革新を基盤として、持続可能な経済成長を達成するための方法を理解することができます。平和と公正な社会の実現を目指す目標も掲げています。「平和と公正をすべての人に」では、法の支配や腐敗の防止、人権保護を優先し平和な社会を作るかを考えられています。グローバル国際的な協力、国際的な協力とパートナーシップの重要性を

強調しています。（目標 17）「パートナーシップで目標を達成しよう」では、国際的な協

力とコミュニティの力を結集して、世界の課題に立ち向かう方法を学び、私たちそれぞれの課題解決力を身に付けられると思います。SDGs を達成するためには、私たち一人

ひとり果たす役割があります。自分ができること、社会にどう貢献できるかを考え、個々

の役割を発揮する力が必要だと考えられます。

環境や社会を守るために必要な知識とスキルを身につけ、より良い社会を作るために

行動を取るべきだと思います。

SDGs 実践講座最終レポート④

全体の感想について、今まで私は SDGs について「エコや再生可能エネルギーで CO2 排出を抑制し、地球温暖化に対処する程度のこと」と思っていました。周りの人々も SDGs を「意識高い系の woke だ」と馬鹿にしたり、「SDGs に配慮するために街作りゲームで市民に下水を飲ませる」などという人もいて、私の周りで SDGs をまともに理解している人はいない状況でした。しかし、SDGs の授業の中で地球温暖化以外にも飢餓、ゴミ問題、農業技術の問題、トイレの問題、移民受け入れの問題、ジェンダーの問題、教育格差の問題など様々な分野で、生活環境の改善に取り組んできた人の体験談を聞いて、SDGs は他人事ではなく自分や他の国の人々の生活環境に直結する重大な課題を解決するためのプログラムであることを実感しました。心に残った授業回としては、第九回の北脇教授の世界各地で水関係の衛生生活環境の改善に奔走した記録があげられます。1月31日現在、八潮市で下水道が陥没して使用不能になり、中川の支流に下水を緊急放流しています。タイやインドネシアなどでは下水道インフラを作ったものの機能しておらず、下水を川に垂れ流しているという話を聞いた時、全く他人事のように考えていましたが、同じことが日本でも起こってしまったのを目の当たりにして、北脇教授の授業であったような途上国の汚染の状況は日本でも起こりうるのかと驚きました。私は土木学科に所属しているため、下水道局の関係者の公演などを聞いたことがあり、高度成長期のインフラが老朽化している、土木構造物である下水道の補修はきつい仕事だから人手が足りないという話を耳にタコができるほど聞かされてきました。今回のような事故が起こってしまい、授業で聞かされた懸念が脅し文句ではなく本当であることを実感し、実際に会って話したこともある下水道局の関係者の方々へ重圧がかかっていることを想像すると心配が募るばかりです。私がこの授業の経験をどう活かすかという、現在の国民の安定的な生活を維持するために、隅々に張り巡らされたインフラを補修する仕事に就くことだと思います。あちこちが老朽化するインフラの補修を足りない人手で補修するのは大変な困難が伴いますが、どうにかしないと今の道路陥没事故のように国民の生活が脅かされてしまいます。今のインフラ補修労働者の不足と老朽化という危機的状況と、昨日まであったインフラが維持されるのが当たり前だという人々の認識との間に大きなギャップがあります。SDGs の授業などを通して生活環境の改善はどうやっているのかを説明することで、それらの認識のギャップを埋めることができるのではないかと思います。認識のギャップが埋められたところで日本や世界のインフラ整備不足についての危機的状況が解消されるわけではありませんが、何も周知されないよりは少しはマシになるのではないのでしょうか。また、SDGs の授業は、インフラ整備に関係ない学科の学生に生活環境の改善やインフラ整備についての課題を周知するのにも役に立つと思います。他にも授業の活かし方として、なるべく問題を周知し

ていこうと思いました。水処理についての授業では私は知っていることが多かったですが、農業や移民の授業では今までにない知識を多く身につけることができました。このように多くの人々へ分野横断的な発信をして、現在発生している社会問題とその解決への取り組みについての知識を国民に浸透させることが、SDGs 広報の大きな役割であり、私も自分が詳しい土木関係の分野の課題について、これも SDGs の一環で重大な問題だと周りの人々に周知するように努めたいです。

SDGs 実践講座最終レポート④③

半年間、SDGs 実践講座を受けて、様々なゴールについて学び、なぜ達成する必要があるのか、現在どういうふうに取り組んでいるのか、これから我々が貢献すべきなものはなんだろうかについて勉強した。授業を受ける前は、SDGs について聞いたことだけあって、実際どのようなものであるのかについて全くわからなかったため、この講座を通じて、様々な知識を獲得したと思う。単なる講義だけではなく、活動やディスカッションスペースなども用意されて、SDGs 実践講座ならではの魅力があった。ブレイクアウトルームを通じて、他人の意見を受け入れながら、自分の考えが述べられるチャンスが与えられて、留学生として、コミュニケーション能力が向上したと思うのでよかった点として挙げられる。ブレイクアウトルームの後、相談したことを共有してシェアさせることで、違う視点から考えることも可能になった。講座に来てくださった先生や教授たちなども、パワポなどを通じてわかりやすく、説明してくれたので、オンライン参加ではあるが、興味深い講座になったと思う。また、最後の課題として、グループプレゼンテーションで、パワポも 1 人で作り、最初から最後まで管理したのでちょっと大変だったが、パワポ作りスキルから始め、チームメンバーと協力し、それぞれの役割を定めることで、チームスキルを向上させたと考えられる。

講義の内容としては、毎週、異なる講義で様々な分野からの先生によって違うことについて聞いたので、それぞれ特徴があり、印象に残ったのは多数ある。自分は発展途上国から来たので、SDGs で述べた問題は自分の国だけに生じていると思っていたが、第 3 回目の小野先生の世界と日本の子供の貧困に関する講義や第 6 回目の廣津先生の食料問題に関する講座などを聞いて、発展途上国はもちろん、日本のような先進国でも珍しくなく存在して、解決策を探すために力を入れていることがわかった。中で、建築学生である私にとって一番印象に残ったのは、第 10 回目の、水村先生の持続可能なコ・ハウジングについての講座である。

日本とノルウェーの住宅政策や若者の移住意向などの共通点と相違点を比較しながら、SDG11 である、住み続けられるまちづくりを実現するために建築家としてどのような行動を取ればいいのかについて考えさせられたので心に残った。まず、調査結果によると、ノルウェーは日本より、幸福度、国際競争力で高いランクを維持していることがわかり、住宅に関する新たな取り組みが理由として挙げられる。

例として述べられたのは、GBS(Gaining by Sharing)という、住宅供給の動向であり、持続可能な環境のため、配慮しながら、社会的孤立を払拭するために生み出された住宅提供モデルである。このモデルを通じて、木材などが主に建材として使われたり、スペースをみんなに共有

してミニマリズムの感じで効率的に資源を利用したりすることで、CO2 の削減ができるメリットがある。また、孤独に悩む人が増えている現代において、お互いに手伝ってもらいながら、料理作ったり、家事をしたりすることで、孤独感の軽減ができて、生活の質を向上させること

がわかった。私はこの授業を通じて、少子高齢化が大問題になっている日本では、お年寄りなどの世話をしてくれる人が多くの場合、不足しており、非常に求められているのに注目した。将来、建築家になりたい自分はこれから GBS についてもっと研究していきたいと思い、SDG11 を実現するために力を入れて、人々の生活水準を上げられることができればと思った。日本だけではなく、生活費の急激な増加に陥る母国でも、手軽に購入できる住宅モデルを作って、ホームレスの解決に貢献していきたいと思う。

この講座から獲得した知識を活かして、より良い社会を築くために貢献できる人材になりたいと思う。SDGs の重要性を意識しながら、世界中、様々な問題に対してどのような取り組みが行われておるのか、自分の国にも導入できるものがないのかについて、これから勉強していきたいと思う。以前は、前学期のテキストや筆記用具などを勝手に捨てたり、メルカリで売っていたりしたが、これからは、実際に必要なところ、質の良い教育は充実されてないところなどに寄付するようにした。環境も配慮して、省エネを支える行動や取り組みなども自宅にいるとき、注意を払いながら、やっていきたいと思う。また、1 人ではできかねることが存在するはずなので、これからボランティアグループや社会活動などに積極的に参加して、自分ができるものを休みの間、探したいと思う。最後に、一つのゴールだけに注目せず、ゴール一つ一つのつながりを理解して、全てのゴールの達成に向けて、大学生から用意しておくべきなことを行なって、周りに共有し、協力しながら、SDGs が充実されている社会を築造したいと思う。